

全員まとめて幸せにしたい～百股男の恋愛無双戦～

讃岐うどん屋さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様の手違いにより、一人しかいないはずの『運命の人』を100人設定されてしまつ
た男、愛城恋太郎。

結ばれなかつた彼女には死が待つてゐる。そんな過酷な運命を知り、100人全員を
幸せにすべくDEAD OR LOVEの百股生活へと邁進する誠実な男。

彼と秀知院学園の生徒達が出会つてしまつた時、一体何が起きるのか。そんな物語。

※※※※※

『君のことが大大大大好きな100人の彼女』は、2020年初頭より週刊ヤングジャ

ンプにて連載中の漫画です。

原作未読の方向けに、第10話にあたる『【幕間】神様は100カノを紹介したい』で作品とキャラの紹介をしておりますので、もし良ければそちらからご覧ください。

目 次

【第7話】四条眞妃は見極めたい①

73

【第8話】四条眞妃は見極めたい②

85

【第2話】四条眞妃は千切りたい

14

【第9話】藤原千花は描かせたい

96

【第3話】四条眞妃は踏み出したい

22

【幕間】神様は100カノを紹介したい

113

【第4話】四条眞妃は裏切らない

31

【第10話】愛城恋太郎は鍛えたい①

123

【第11話】愛城恋太郎は鍛えたい②

48

【第5話】四条眞妃は相談したい

132

【第6話】四条眞妃は打ち明けたい

59

【第12話】大仏こばちと運命の出会い

【幕間2】作者は帳尻を合わせたい

〔第13話〕大仏こばちは誘いたい

153

〔第14話〕大仏こばちは祝われたい

176

〔第15話〕大仏こばちは見せつけたい

190

〔第16話〕大仏こばちは忘れたい

207

〔第17話〕大仏こばちは信じたい

216

〔第18話〕伊井野ミコと運命の出会い

227

【第1話】四条眞妃と運命の出会い

5月。都内某所。

きらびやかな調度品に、所狭しと並んだ馳走の数々。華やかな喧騒に囲まれながら、イエローのパーティードレスに身を包んだツインテールの少女、四条眞妃しじょうまきは深い溜息をついていた。

(帰りたい……)

遠くはフランスの地にて、哀れなガチョウたちの喉に飼料を流し込んで生産された美味なる臓物の塊を無感情に口元へ運び、咀嚼もそこそこに飲み下していく。

もともと好物の一つであつたはずのそれを味わう余裕もないほどに、彼女は疲れ、憔悴していた。

憂鬱の原因はこのパーティー 자체にはない。

日本を代表する名家の一つ、四条家の長女として生を受けた彼女。幼少の頃より社交

の場には慣らされており、性格的にも人づき合いを苦にするタイプではなかつた。

そんな彼女が、ここまで落ち込む原因は何か。

思いを馳せるのは、今日この場に招待されながらも姿を見せることのなかつた親友と。その恋人であり、自身が密かに恋心を寄せていた、一人の少年について。

(体調不良。あまり考えたくはないけれど。このタイミングでソレつてことは、普通に考えて、アレつてことよね)

——マキちゃん。私、デキちゃつたみたい。

そんな報告兼相談を少女が親友から受けたのは、今から1ヶ月ほど前のこと。
それは客観的に見れば、親友とその恋人の、『ごく普通の高校生活』の終わりを告げる言葉であり。

そして主観的に見れば、不運と苦悩をその身いっぱいに抱えながら、一縷の望みを信じて耐え続けてきた少女の夢見た未来が、永遠に失われたことを知らせる、最後通牒の言葉であつた。

(流石に事ここに至つて破局を期待するなんてのは、人でなしの所業よね)

17歳という身空で天からの贈り物を授かつてしまつた二人には、この先多くの困難が待ち受けているだろう。

しかしながら、彼らは天下の秀知院学園生。未来を自らの手で力強く切り開くに足る学力を有しており、実家の太さも並大抵のものではない。

既にお互いの両親への報告と謝罪は済まされ、手厳しい叱咤を受けはしたもの、懷妊の事実そのものは受け入れられ。

『生涯に渡つて責任を背負い続ける』ことを条件に、彼らの愛の結晶は無事この世に生を受けることが許された、と聞いている。

そんな重大事を聞かされ、全ての精神力を振り絞つて表面上の励ましと祝福の言葉を送つた少女は、部屋に籠つて一人荒れた。

『生涯に渡つて責任を背負い続ける』。禁断を踏み越えておきながら、なんと甘美な、幸せに満ちた罰であろうことか。

予想外に早く決着がついて良かつた。これで私も、諦めて次の恋を探すことができ

る。

そんな文言を脳裏に並べながら、まるで正反対の叫びを上げ続ける本心との折り合いをつけるために、丸々費やされた1カ月間。

いい加減に前を向かないといけない。もしかして、新しい出会いなんかが転がつているかもしれない。

そう自分に言い聞かせて、久しぶりに繰り出してきた社交の場ではあつたが。
きらめく照明も、華やかな出し物も、ずらりと並べられたもてなしの品も。

沈む彼女の心を慰めるには些かの役にも立たず、むしろ自らの慘めさを際立たせる残酷な舞台背景にしかならなかつた。

「眞妃さん。顔色が優れないよう見えますが、大丈夫ですか？」

「……羽香里。しばらくぶりね」

そんな眞妃に声をかけてきたのは、肩口まで伸びるミディアムショートの髪に、やや幼さを感じさせる美貌とそれには不釣り合いな豊かな双丘を携えた、可憐な少女。

今日のパーティーの主催者であり、四大財閥の一つに数えられる花園家。その一人娘、花園羽香里_{はなそのはかり}だつた。

「別に、全然平気よ。ただよつと最近寝不足で、疲れが溜まってるだけ。アンタに心配されるようなことなんて一つもないわ」

「その強気な語り口。相変わらずですね、眞妃さん」

ふふつ、と屈託のない笑顔を浮かべながら、羽香里は恭しく礼をする。

「本日は母のお祝いに出席してくださり、ありがとうございます」

そう頭を下げる彼女の向こうに見える垂れ幕には、『花園羽々里○○高等学校理事長就任記念パーティー』と銘打たれている。

「そういうアンタこそ、相変わらず大袈裟ね。今更そうかしこまらないでよ。アンタの母親のパーティー好きは今に始まつたことじやないでしよう」

四条眞妃は、お互い日本の将来を背負つて立つことになるであろう旧知の仲の少女に向かつて、そう軽口を飛ばす。

ビジネス上の親密な関係を保つためには、まずプライベートでの交流が大事。

そうした思想に基づいて子の世代も積極的に招かれる社交の場において、二人が出会ったのは眞妃が小学3年生、羽香里が1年生の時のことであつた。

「そうは言いますが、眞妃さんは今年受験の年でしょ。一刻の時も惜しいであろう中、時間を作つて出席してくださつたことに感謝しています」

「私を誰だと思ってるの？ 秀知院学園で3位の成績を誇る天才、四条眞妃よ。大学受験

のために必死^こいて勉強する必要なんかどこにも無いわ」

「本当に、相変わらず。成績の方もしつかりキープされているんですね。眞妃さんのそういうところ、すごく格好いいと思います」

そう言つて羽香里は、右手を口元に当てながら朗らかに笑う。

花園家は、芸能、催事、観光など、日本のエンターテイメント産業を一手に支配する名家だ。

29歳にしてその当主を務める女丈夫、花園羽々里は自らの生業を誇示するかのとく、何かと理由をつけては自宅でパーティーを開く癖があつた。

毎年一度行われる創始者の生誕記念日パーティーは、他の四大財閥の関係者も招いて盛大に行われるのだが。

今日はその最も重要な集まりではなく、当主の理事長就任を祝して開かれた臨時のも。招かれているのは、花園家と特に友好的な関係を築いている限られた家の人々であつた。

「それにしても、花園家が教育界に手を伸ばすなんてどういう風の吹き回しかしら。多角経営は企業成長の基本とは言え、あまりに唐突な印象を受けるわ」

「えつと……あはは、お母様つてば急にどうしたんでしょうね。私には全然わかりません」

そう言つて笑う羽香里の言葉の裏に潜む含みを、眞妃は敏感に感じ取る。

「そういえば、アンタもこの春から高校生よね。どこの高校に進学したの？」

「……どうしても答えないとダメですか？」

「何よ、隠すようなことでもないじゃない」

「……○○高等学校です」

「アンタの母親が理事長になつた高校じゃない！え、何、そういうこと!? 羽々里さんつてば、いくら娘が心配だからって」

「そういうことじやないです！お母様がうちの理事長になつたのは……そう、突然のことで、私にも何が何だかわからんんですけど！きっと、お母様にとつては大事な理由があつたんです！」

嘘である。この娘、母親の行動の理由がわからないどころの騒ぎではない。

高校入学初日に出会つた、大切な大切な恋人。実の母親によつて引き裂かれそうになつていた彼との仲を、強引に繋ぎ止めてくれた仲間達のあの大立ち回り。

そしてその結果として、母親のハートまでもが彼によつて射止められてしまつたこ

と。

全てが羽香里にとつては記憶に新しい事件であつた。

だが、言えるはずがない！まさか自身の母親が、14歳年下の恋人に会いたい一心で、娘の通う学校の理事長の座を買収したこと！

「大事な理由、ねえ。アンタが心配だつていうことぐらいしか、私には思いつかないけど。アンタつて昔つからポヤポヤしてて、危なつかしいし。悪い男にすぐ騙されそうだわ」

「悪い男つて……。眞妃さん、その言い草は酷いです」

見るからに不機嫌になる羽香里の反応に、眞妃はさらに思案する。

その反応は、ただ単に自らの未熟さを咎められたことに対する立腹には見えず。もつと何か、例えばそう、自分の大切なものを貶められた時に見せるような……。

「羽香里。アンタもしかして、彼氏できた？」

「!!なんで急にそういうんですか!!どうしてそう思うんですか!?」

そう言い返す彼女の頬と耳は、傍目にもはつきりわかるほど紅潮していて。

(なんてわかりやすいこと)

そう結論に達しながら、眞妃は自分の心がさらなる暗闇に落ちていくのを自覚する。羽香里に恋人。人が失恋にもがき苦しんでいる最中にもたらされた、旧友の吉報。シアワセマンカイ。

(やつぱり今日来なければ良かつた)

などと思いながらも、それを表面にはおくびにも出さず、ニヤリと笑つてみせながら問答を続ける眞妃。

彼女は本当に強く、気高く、優しい人間なのである。

「恥ずかしがることないじやない。高校生にもなれば恋人の一人や二人できたつて不思議じやないわ。私にも紹介しなさいよ。今日このパーティーには来ていないの？」

(まあそういう私には恋人の一人もいた試しはないんだけど……)

(恋人の、一人や二人……どころの話ではないんですけど……)

両者それぞれに微妙にダメージを受けながら、羽香里は慌てて返答を返す。

「話を勝手に進めないでください！私に恋人なんて！恋人なんて……、その……いないわけでは、ないんですけど」

「やつぱりそうじやない。誤魔化そうとしてもバレバレよ。で、ここにいるの？その愛しの彼は」

「……来ています。今向こうでフォアグラを頬張つてます」

「あら、ダメ元で聞いてみたんだけど意外ね。ということは、その子もそこの良家の息子さんなのね。ちようどいいわ。紹介しなさい」

（今日ここにいるのは、恋太郎君が良家の子だからというわけではないんですけど……）

彼の出席の真の理由は話せないまま、羽香里は言われるままに彼を呼びに行く。
複雑な事情はあるにせよ、羽香里にとつて彼は自慢の恋人。友人にその仲を紹介できることに、喜びこそあれど抵抗はなかつた。

「あ、羽香里。このパーティー最高だね、こんな美味しいもの俺生まれて初めて食べたかもしれない。ああいや、羽香里の作ってくれた卵焼きの方がもっと美味しかつたけれど」

「ありがとうございます恋太郎君。紹介したい人がいるんですけど、ちょっと来てもらえますか？」
「紹介したい人？」

「私の旧友で、歳は2つ上のお姉さんです。ちょっと口が悪いところがあるけど、とても優しいいい人なんですよ」

どれどれ、と歩き出す恋太郎。

そんな彼らが近づいてくるのを待つ、四条眞妃。

3人の距離は近づき、そして。

恋太郎と眞妃の、目と目が合わさつた。

ビビン!!

そして眞妃は、自身の身体に走る電流を自覚した。

それはかつて彼女が、翼に対して覚えた甘い感覚に近く。

違つたのは、それとは比べものにならないほど、全身を貫く激しい熱の量。

かつての想い人の温かい優しさに徐々に惹かれていた、緩やかな恋の軌跡ではな
く。

俗に言う、『一目惚れ』

そんな単語が頭をよぎつた瞬間であつた。

「眞妃さん。紹介します。私の恋人の、愛城恋太郎君です」

羽香里の口から出した言葉に、眞妃の心の闇が極限まで濃度を増す。

そんな。私、また。

「初めまして。愛城恋太郎です」

「…………」

「眞妃さん？」

「……わ、私の名前は四条眞妃！」

「正当な四宮の血筋を引く者にして、秀知院学園学年3位の成績を誇る天才よ！覚えておきなさい！」

困惑からどうにか立ち直り、高らかに名乗りを上げた彼女であつたが。
心中はまるで吹き荒ぶハリケーンの如く。

(もしかして……私、また、このパターンなの――!?)

横 恋 慕

絶望とともに、自らの運命を睨う眞妃。

これが、四条眞妃と愛城恋太郎の出会いであり。

引いては秀知院学園の女生徒達とこの希代の百股男を繋ぐ、物語の始まりの時であつた。

【第2話】四条眞妃は千切りたい

「あうあううああああああ……あんまりだああああああ……」

花園家主催のパーティーから帰宅し、ドレスを脱いだ眞妃。

虚ろな表情を浮かべながら何とか湯浴みをこなし、部屋着に着替えた彼女が次にとつた行動は。

自室のベッドに突っ伏し、ただ嗚咽を垂れ流すことであつた。

「なんで。どうして。私ばっかりいつつも。羽香里も、渚も、翼くんも。御行も、優も、かぐやおば様も。……恋太郎さんも。みんなみんな、大切な人を手に入れて幸せそうにしているのに。どうして私だけ」

つい数時間前に出会ったばかりの、気になる男の名前をあえて口にし、少しだけ浮いた気分を味わいながら。

その何百倍もの絶望感に押し潰されそうになつて、眞妃は涙を流し続ける。

正確に言うと、似たような感情に苛まれながら日々を過ごしている少女は彼女だけではなく。どこぞの生徒会室の中においても、一人きりになつた瞬間に悲壮感をだだ漏れにさせている女が、意外と身近にいたりするのだが。

そんなんのは今の眞妃の知つたことではないし、例えそこに思い至つたとしても、彼女の悲哀を軽減させてくれるものではないのだ。

「ううううううう……」

ひとしきり呻いて少しだけ落ち着いた眞妃は、枕元に投げ捨てたスマホを取り、連絡用のアプリを起動する。

愛城恋太郎。まさに恋をするために生まれてきたかのような名前が記されたトークルームには、『よろしくお願ひします』と『こちらこそ』、短い挨拶のスタンプが並び。小さく添えられた、既読の文字が1つだけ。

今すぐにだつて、メッセージを送つてしまいたい。そんな衝動に眞妃はかられる。

今何をして、何を考えているのか。興味のあるものは何で、何に感動して、何を好ましいと思うのか。

……今日出会つた自分のことを、どんな風に思つたか。

知らないことも聞きたいこともいくらでもあつて、そこで彼女はふと我に返る。

自分はまだ、恋太郎のことを何も知らない。それなのに、どうしてこうも心を奪われてしまつてしているのか。

容姿があまりにも好みだつたのか。答えは否だ。そもそも自分は、容姿だけを見て一眼惚れするような性格はしていないと思う。

かと言つて、中身に惚れたわけでもない。本当に、今日出会つたばかりの男なのだ。
好きになるポイントなんて、あるわけが——

そこまで考えて、眞妃の思考は止まる。

今、『好き』と。『心を奪われてしまつた』と。確かにそう思つた。

それはあの翼に対してさえ、長い間はつきりと認めるることはできなかつた感情。

まあ、そうやつて認めずにいた間に、彼は手の届かないところに行つてしまつたわけ
ではあるが。

「どうしよう……」

生まれて初めて襲われるジエットコースターのような感情の変化に、ただただ眞妃は
振り回される。

（どこが好きなのかは全くわからない。にも関わらず、好き。そんなことは今までの眞
妃の人生には存在しなかつた概念で。）

（私ひよつとして、ネットラレ趣味があるのかしら）

正確にはネットラレでも何でもない。眞妃のそれは横恋慕であり、むしろ明確に立場は

逆だ。

そんなことにも気づかないぐらい、眞妃の頭は混乱し、オーバーヒート寸前となつて
いた。

(聞いたことがあるわ。一目惚れは遺伝子レベルで相性がいいことの証左。容姿に惹かれているわけでも中身に惹かれているわけでもないのに、こんなにも頭から離れないのは、つまり……)

自分の遺伝子が、彼の遺伝子を本能的に求めていた。

そんな考えに辿り着いてしまい、彼女の身体はさらなる羞恥に熱く染まる。

「馬鹿馬鹿馬鹿！私ったら何考えてるのよ」

こんなのはきっと、渚たちのせいだ。こんな年齢で、子供なんて作るから。

その熱にアテられて、自分の思考もおかしくなつてしまっているんだ。そう眞妃は自分に言い聞かせる。

「……好きな人の子供を身籠もるつて、どんな気分なんだろう」

自らの腹部を軽く撫でながら、親友の気持ちをトレースしてみようと試みるが。

好きな人と結ばれた経験すらまだない彼女にとつて、その遙か先にある気持ちなどわかるはずもなく。

「あうあうう……ああああああ……」

考えていたら、また悲しくなつてきた。

どんなに想いを募らせたところで、彼には既に恋人がいるのだ。しかもその相手は、またもや、眞妃にとつて大事な友人の一人。

こんなに辛いのなら、悲しいのなら。いつそのことこんな恋心、千切つて捨ててしまいたい。

そんな文言を脳裏に並べるも、やつぱり本心は正反対で。

一方、愛城恋太郎。

彼もまた、自室のベッドに横たわり。

もう幾度目かのことではあるが、全く慣れる事はない、全身に衝撃が走った今日の瞬間のことを思い起こしながら、スマホの画面に目を向ける。

四条真妃。彼にとつては7人目となる、運命の相手。

まだ彼女について、多くは知らない。わかっているのは、偏差値77を誇る名門校、秀知院学園高等部に通う3年生であるこ

ティロン。

スマホの通知音が響く。思考を中断し、ちょっとだけ、真妃からのメッセージかと期待しながら画面を見ると。

(花園羽々里)『恋太郎ちゃん、今日はお祝いに来てくれてありがとうね。スーツ姿、とっても似合つてたわよ。いずれは恋太郎ちゃんのお披露目会を開くから、パーティー

のマナー、ちゃんと勉強しておいてちょうどいいね。』

6人目の運命の相手である、花園家当主からのメッセージだつた。

恋太郎は少し微笑んで、羽々里への返信を考える。

眞妃との出会いに心を奪われてはいるものの、それはそれ。彼は今まで出会つてきた運命の相手を、全員心から愛している。

返信を打ち終わり、また眞妃のことについて想いを馳せる。

そう、わかっているのは秀知院学園に通う3年生であること。それから、学年3位の

秀才

ティロン。

また通知音。

(ハカリ)『恋太郎君、今日はありがとうございました。夢中になつて料理を食べている姿、可愛かつたです。今日並んでいた料理に負けないぐらいの品を毎日食べてもらえるよう、私も頑張りますね。』

メツセージの主は、彼の1人目の運命の相手。

プロポーズに近いとも思える文面に頬を緩めながら、恋太郎は返信を終える。

それから、学年3位の秀才であること。軽く前髪を編み込んだツインテール

ティロン。

(A-I) " 好き。 "

えいあいな。

4人目の運命の相手、栄逢凪乃。何事にも効率を求める彼女らしいメッセージは、トーキルームの片側を上から下まで埋め尽くしている。

そんな彼女の愛情確認に応えてから、恋太郎は思案に戻る。

軽く前髪を編み込んだツインテールが可愛いこと。羽香里とは
ティロン。

(化学部ぶちょー) " 恋太郎！恋太郎！新しい薬ができたのだ！『思つていることが全部口から垂れ流しになる薬』なのだ！早速明日唐音に飲ませるのだー♪ "

5人目の運命の相手、薬膳楠莉からの不穏な提案。

そんな薬を飲ませなくとも、2人目の運命の相手、院田唐音は本心を隠しているように見せかけて、その実常に本音しか口にしていない気はするが。

羽香里とは小学生の頃からの

ティロン。

(K a r a n e) " ベ、別に今から布団に入るわけじゃないんだからね!! "

「いやこれ真面目に考えるの無理だな?!」

そう叫んで恋太郎は、ひとまず今日のところは、新しく出会った聰明な少女のことを、頭の片隅に仕舞つておくことにした。
なお3人目の運命の相手、好本 静は、既にグツスリ夢の中である。

【第3話】四条眞妃は踏み出したい

「ツンデレ先輩。浮かない顔して、どうしたんですか」

秀知院学園高等部2年、生徒会会計、いじがみゆう石上優。

いつものように生徒会室を訪れた彼は、そう来客に声をかける。

「うつさいわね。私は別にツンデレじゃないんだからね！」

「それ、酔っ払いが『俺は酔つてない』って言うのと同じぐらい説得力無いですよ。あと

先輩の語尾そんなんでしたつけ」

「これには大いなる力が働いているのよ」

「わけがわかりません」

定位置に荷物を置きながら部屋を見渡す。応接用のソファには、眞妃が一人。そして正面に陣取る豪奢な机の向こうに座るは、生徒会会長、しろがねみゆき白銀御行。

石上を含めて、室内には男2人と女1人。もはやお馴染みとなってきた感のある、恋愛相談の布陣であつた。

「とりあえず、ハーブティーを淹れますね。ちょうど新しい茶葉が入ったところです」

「おねがい。今日はどんな種類のを淹れてくれるの？」

「カモミールです。気分を落ち着かせる効果があつて、不眠にも良く効きますよ」「寝ちやいそだだから別のにして」

そう返す眞妃の下まぶたには、くつきりと隈が刻まれている。目は赤く腫れており、彼女が鬱々とした夜を過ごしたことは想像に難くなかった。

「それで、どうしたんだ四条。最近元気がないとは思つていたが、今日の顔は一段と酷いぞ」

「二人揃つて、女の顔を浮かないだの酷いだと。もう少し優しく接したらどうなの」「事情を聞かないことには優しくしようがないだろう」

ソファの対面に腰かけながら、白銀は会話の糸口を開く。

去年度に引き続き、眞妃と同じクラスになつた白銀。学年が上がつてすぐの頃から、彼女が目に見えて落ち込んでいることには気づいていた。

声をかけようかとも思つたのだが、プライドの高い眞妃のこと。他人から手を差し伸べられて、素直に事情を吐き出すとは思えない。

待つていればそのうち、自分から相談に来るだろう。そう踏んでいた白銀にとつて、目の前の光景は予想していた通りのものであつた。

「また神の人々絡みで辛いことがあつたんじゃないですか」

「本当に優はズバズバと切り込んでくるわね。もし違っていたらどうするつもりなのよ」

石上の指摘は半分当たりで、半分ハズレ。

「違うんですか」

「ええ、違うわ。私がいつまでも同じことで悩んでると思つたら大間違いよ」

真妃の返答も半分真実で、半分は嘘。

渚が妊娠を打ち明けたのは、友人の中では今のところ真妃だけだ。いくら自分が辛いからといって、親友の秘密を言いふらすなんてもつての外。

その話題をここで出すつもりは、真妃には毛頭ない。誰にも話せないからこそ、余計に辛さが増したこの1ヶ月であった。

「じゃあ、一体何に悩んでいるんだ」

「……友情なんて、人を苦しめるだけの物じゃない？」

「半年前と同じセリフじゃないですか」

「同じセリフで違う悩みを抱えているとしたら、これほど気の毒なこともないが」

「察しがいいわね。その通りよ」

思いの外素直な真妃の言葉に、固まりながらも頭脳を回転させる男子一人。

「まず聞こう。田沼以外に、好きな奴ができたのか？」
「そうよ」

「それはいいことだと思いますけど。ただ、その」「ご想像の通りよ。好きな人には既に彼女がいるの」「そして、その彼女というのが」

「私の友達」

「うわあ……」

白銀と石上は頭を抱える。

目の前にいる少女は、いつたいどんな星の巡り合わせの下に生まれたのだろうか。
神はないのか。

「相手は秀知院の生徒なのか？」

「いいえ。他校生よ。昨日パーティーで知り合ったの」

「昨日？ 昨日知り合つてもう好きなんですか？」

「うつさいわね、この不調法者。私だつてわかってるわよ。わかってるけど、頭から離れないんだからしようがないじゃない」

白銀は驚いていた。四条眞妃とは、こんなに自分の感情を率直に認める奴だったか。白銀自身も関与するところのあつた彼女の前の恋の顛末は、あらかた聞いている。素

直な一步を踏み出せずに足踏みしていたことが、彼女の敗因。

今回こんなにも素直なのは、その失敗を反省したゆえか。それとも単純に、素直にならざるをえないぐらい大きな感情を抱えているためか。

この話だと1カ月前からの眞妃の落ち込みには説明がつかないが、そこは触れないでおくとして、白銀は話を先に進める。

「その彼女という友達と四条は、どの程度親しいんだ」

「小学生の頃から知ってる仲よ。ただ、普段から遊んだりしているわけではないわね。たまに連絡を取り合ったり、パーテイーで顔を合わせるのが主よ」

「毎日目の前でイチャイチャしているところを見せつけられるよりはだいぶマシですね」

「優は黙つてて。ハーブティーおかわり」

ポットを傾ける石上を横目に、白銀は核心へと触れる。

「それで、四条はどうしたいんだ。聞いた限りでは、そんなに接点の多い相手ではないのだろう。忘れることにするという選択肢も十分ありそうだが」

「…………」

白銀の質問に眞妃は、すぐには答えない。少し俯いて、息を大きく吐いて。吸つて。

まるで自らの心にポンプで空気を送り込んでいるかのように、何度も深呼吸を繰り返

して。

それから顔を上げて、こう宣言した。

「……私、今度は我慢しないかも知れない」

「！と、いうことは」

「私、努力する。彼に私を見てもらえるように。そしていつか、彼に想いを伝えてみせる」

「略奪愛も辞さないということか」

「ええ、もし成功すればそうなるわね。そうなれば、友達との仲は壊れてしまうかも知れない。でも、それを恐れて自分の気持ちを押し殺すなんて、もうできそうにないの」

友情のために、恋心を押し殺す。それは眞妃が、つい昨日までずっと続けてきたことだ。

昨日までできていたことが、今日からはできない。

それは今まで我慢を続けてきた、反動のせいなのか。それとも、眞妃自身の性格に変化が起きたのか。

過程がどちらであれ、結論は同じこと。

「私が翼くんにアタックできなかつたのは、渚との距離が近すぎたせいもあるわ。友情

が壊れれば、その後の日常生活まで壊れてしまうのは明白だつた」

「でも、今回はそれとは違う。仮に略奪に成功したとしても、その友達とは毎日顔を合わせるわけじやない。失うものが無いわけではないけど、十分に取り返しのつく範囲だと思うわ」

「その口ぶりだと、あまり本気で奪い取りたいとは思つていなさそうだな」

「そう聞こえる？ 彼が欲しいという感情は本物よ。……でも、そうね。できれば、私は負けた方がいいかな。友達を失わないで済むなら、その方がいい」

「結果的に、つきあえないとしても。気持ちを全部封じ込めて、手も足も出せないまま身を引くよりは、感情のままに突っ込んで玉碎した方が、ずっと気が楽ですもんね」

「いちいち瘤に触る言い方をするわね。でもまあ、その通り。勝つても負けても、失うものはあるわ。でも、何もできずにただ耐えているよりはずっとマシだと思う」

眞妃の瞳に、静かな闘志が宿る。

「だが、本当にいいのか？ 何せ昨日出会つたばかりの男だろう。もう少し時間をかけて、自分の気持ちを確かめてみてからでも遅くはないんじやないか」

「今のところはぐつと堪えておいて、その男がフリーになつた瞬間を狙うというプランもありますね」

「流石、彼女持ちは二人とも余裕があるわね。もちろん、今日明日にでも告白しようつて

わけじやないわ。まずは足場固めから。お互のこと教え合って、彼に私のことを意識してもらう

「ひよつとしたらその過程で、恋が冷めることがあるかもしれない。時間をかけている間に、彼が友達と別れるかもしれない。そつちの方が、私としては失うものが減つて助かるわ。……でも」

「でも？」

「予感があるの。きっと私、我慢しきれない。知れば知るほど、欲しくなつてしまふ。周りの状況なんて、考えられなくなつてしまふ。知り合つた翌日で既にこうなんだから、いつこの気持ちが爆発するかと思うと怖くなるわ」

恋は人を変えるとは、よく言ったものだ。

白銀も石上も、はるか高い所にいる想い人に手を伸ばすために、自分の殻を破つた。どんなに背伸びしても届かないかと思われたそれに向かつて、一つずつ石を積み上げていき、ついには掴み取つた。

今度は、眞妃の番なのかもしれない。

「そこまで本気で想つてゐるなら、俺たちは止めない。ただ、あまり無茶はするなよ。何の氣兼ねもなくできる恋ではないだろう。なるべく傷を浅くできるように、立ち回り方

はよく考えた方がいい」

「そうね。ありがと。考えが回らなくなつたら、また相談に来るわ」「もしダメだつたとしても、骨ぐらいは拾つてやる」

「アンタに拾われるような安い骨は一本も持つてないわよ」

最後は、いつも通りの軽口で返し。

いつまでも一步を踏み出せずに不幸を抱えてきた少女は、覚悟を決めた。

表が出るか、裏が出るかはわからないが。とにかく、コインを投げてみることに決めたのだ。

まさか表でも裏でもない結末が待つているとは、この時は夢にも思つていなかつた。

【第4話】四条眞妃は裏切らない

「恋するのって……たーのし——♡」

先月までなら絶対に言わないセリフを吐きながら、自室で勉強机に向かう眞妃。その口角は上がりっぱなし。

先日腫らしていた目は健康的に輝き、誰もが認める美少女の趣を取り戻している。教科書を広げてはいるものの、目線はスマホの画面を捉えっぱなし。勉強は全く手につかない……などということはなかつた。

恐るべきスペックの脳は唸りを上げてフル回転。それによつて教科書とスマホとの並行処理を完璧にこなしながら、それでも意識の8割は彼とのLINE、そして今日という一日を反芻することに使われている。

眞妃と恋太郎の出会いから、1週間が経過していた。
 （あー、ヤバい。好き。まだたつた1週間なのに。大好き）

この1週間、1歩を踏み出すと決めた眞妃の行動は速かつた。生徒会男子に相談した日の夜には、早速彼への連絡を敢行。

かぐやのように、メッセージ1つ送るのにも30分は考え込み……などということはない。

こういうのは、変に考えるからなかなか送れなくなるのだ。

重要なのは内容を着飾ることではなく、とにかく繋がりを作ること。文面なんかは定型でいい。そう割り切る眞妃は、かぐやよりも明らかに世間慣れしていた。

“こんばんは。昨日は楽しかったです。”

“今、何をしていますか？”

彼女には珍しく丁寧語を使いながら、まずは軽くジャブを放つ。
そして待つことしばし。

(返つてこなかつたらどうしよう)

こんな時に誰もが思う不安を感じながら。

既読マークがつくのは、予想よりずつと早かつた。

“こんばんは。俺も楽しかつたです。”

“今は筋トレをしています。”

「まさかの肉体派!!」

ツツコミを入れながらも、眞妃の心拍数が10上がる。

筋トレしてゐる姿が生理的に無理などござる眼鏡つ子とは違ひ、眞妃は筋トレに対する嫌悪感はない。

汗くさい弟に蹴りを入れたりはするものの、それも親密さの裏返し。これが何とも思つていなかつたなら、『ふーん』で済ませたことだらう。だが、一目惚れした相手なら話は別。男性としての魅力を高めようと努力する姿を想像し、思わず胸が高鳴ってしまう。

ちなみに恋太郎的には、筋トレをするのには理由がある。

先日経験した、実の母親による花園羽香里軟禁事件。

頼れる恋人たちの協力もあつて、彼女を取り戻すことには成功したが。

危ない場面はいくつもあつた。救出が紙一重でうまくいったのは、主に彼自身と唐音の身体能力のおかげ。

百股という困難な道を成し遂げようとしているのだ。この先も様々な試練に襲われることは必定。

愛する彼女達を守るために、力はどれだけあつても足りない。

そう痛感した恋太郎は、努力の限りを尽くして自らを鍛え上げることに決めていた。既に護身術の教室にも申し込みを済ませてゐる。

そんな事情とは露知らず、眞妃はウキウキしながら返信する。

“筋トレですか。男らしくていいですね。”

“実は私、栄養学もかじっています。役に立てることがあつたら何でも聞いてください。”

本当のところは、眞妃は栄養学にはあまり明るくない。

眞妃の興味は金融分野に向いており、得意教科はどちらかといえば文系科目の傾向がある。

しかしながら、そこは四条家の血を引くブレインモンスター。

必要とあらば、どんな知識であろうと即座に吸収し、活用できる自信が彼女にはあつた。

“ 本当ですか。ちようど知りたいなと思つていたことがあつたんです。”

“ 筋トレをする時のPFCバランスについては理解できたんですが、ビタミンをどの程度とればいいのかがよくわからなくて。”

“ 水溶性ビタミンはいいとして、脂溶性ビタミンの摂取量はどのくらいがベストなんでしょうか。必要なことはわかっているのですが、過剰摂取した際の蓄積が気になつて

「驚きの知識量!!」

これは自分も急いで勉強しなければならないと焦りながら、この男の『本気』を感じて眞妃の心拍数はまた10上がる。

なお、恋太郎のこの知識は薬学のスペシャリスト、薬膳楠莉からの受け売りである。本当は眞妃の助けは必要ないのだが、それを正直に言うのも野暮というもののサポートは多いに越したことはないし、何より恋太郎にとつても眞妃は気になる運命の相手。話題の提供は渡りに舟であつた。

“眞妃さんの方が年上なんですから、敬語じやなくて大丈夫ですよ。”

“気楽に接してもらえると嬉しいです。”

そんな文面を恋太郎から引き出し、眞妃は小さくガツツポーズ。

お互いへの口調の変化は、親密さを深める第一歩だ。

いつかは恋太郎からも、くだけた口調で『マキ』と呼び捨てにされたい。そんな妄想を浮かべながら、眞妃はコミュニケーションの締めに入る。

“ありがとう。お話てきて楽しかったわ。”

“近いうちに、どこかで食事でもしたいわね。羽香里にもよろしく。おやすみなさい”

い。
“

そう送つてトーケルームを閉じた眞妃。

食事がしたいとの願いは、意外なほど早く叶えられた。

パーティーから数えて、ちょうど1週間後。時刻は昼前。

流石に毎日連絡を送るのは露骨すぎると控えめになりながらも、最初よりは遙かに増えた彼とのやりとりを読み返してにやけながら、眞妃はカツプルを待っていた。

「眞妃さん。お待たせしてしまつてごめんなさい」

そう言つて駆け寄る羽香里。今日はガーリーなワンピーススタイルである。

「いいのよ、私が早く来すぎただけ。まだ待ち合わせの30分前じゃない」

対する眞妃は、シンプルなTシャツにショートジャケット、パンツスタイルで大人っぽくキメている。

いつか翼と行つたカラオケの日を彷彿とさせる、自信のあるコーディネートだが、流石に細部はあの時とは変えていた。

「お待たせしました。行きましょうか、眞妃さん」

「ちよつと待つて。何故にブレザー!?」

「これには深い理由がありまして」

口元を搔く恋太郎に代わって、羽香里が説明をする。

「今日恋太郎君、花壇の水やり当番で登校してたんですけど。帰り道で迷子の子供を見つけたらしくて、3時間もそれにつきあつてあげてたそうなんです」

「何よそれ。迷子のくだりはともかく、高校生にもなつて花壇の水やり当番? 夏休みでもないのに? それに、まだ待ち合わせ時間まで30分もあるじやない。流石に色々と苦しくない?」

「実は、『うまいオチが思いつかなかつたから悪いけどこれで頑張つてくれ』っていう天作者の声が」

「全く意味がわからない!!」

そんなやりとりで始まつた、休日のひと時。

「このパンケーキ美味しちゃー♡」

「まつたりとしていてコクがあり、それでいてぐどくなく口の中で雪のように融けていく。これはまさに匠の技ですね」

「トップピングのフルーツも絶品です」

「ねえ、見て見て! あの服可愛い!」

「そろそろ夏物を準備しないといけませんね」

「こっちのブラウスは、羽香里によく似合いそう。あっちのパーカーは、眞妃さんにぴつたりなイメージですね。値段は……げつ、25000円。結構するなあ」

（その気になれば余裕で買えるけど）

（その気になれば余裕で買えますけど）

「恋太郎。いつまでもその服装でいるのもなんだし、思い切って上から下まで一式揃えちゃえば？」

「でも、脱いだ制服を入れられるような鞄も今日は持ってきてないですし」

「一緒に買っちゃえといいやない」

「そんな予算はないですよ」

「私が買つてあげましょか？」

「気持ちだけもらつておくよ。そのお金は自分のために使つて欲しいな」

「タピオカミルクティーもそろそろブームは過ぎた感があるわね」

「案外並ばずに座れましたね」

「原作好きとしてはタピオカミルクティーのキーワードは外せないですよね」

「さつきから何を言つてるの？」

『フルコンボだドーン！』

「すつぐーい！リズム感抜群ね！」

「好きな曲だつたので、たまたまですよ」

「じゃあ次は『おに』、いつてみましょう！」

「いや流石にそれは無理つてあばばばばばばば」

「それじゃあ最後に、3人でプリクラを撮りましょうか」

「いい思い出になるわね。恋太郎、喜びなさい。両手に花よ」

「今日最初から喜びっぱなしですよ」

楽しい時間は、あつという間に過ぎていき。

「今日はありがとうございました。眞妃さんとは長いつきあいですけど、こんな風に遊んだのは初めてですよね。私も高校生になつたんだつて実感します」「こちらこそ、ありがとう。こんなに楽しかったのは久しぶりよ。……そう、本当に、久しぶり」

眞妃の瞳から光が消えかける。

「眞妃さん？ 大丈夫ですか？ おっぱい揉みますか？」

「もう少し恥じらいというものを見なさい」

たしなめながら、瞳に光の戻つた眞妃が二人を見据える。

辺りは夕暮れ。ほどなく、夜の帳が下りる時間。

「それじやあ、またいつか。次に会える日を楽しみにしています」

「ええ。またね。一人とも、仲良くしなさいよ」

羽香里を泣かせたりしたら、私が許さないからね。

よくある文言を思い浮かべながら、決して外に出ていかないように、そつと心に蓋をした。

そこまで言つたら、嘘になつてしまふから。

そしてシーンは冒頭に戻る。

勉強にも一段落がつき、一日の回想を終えた眞妃。

略奪も辞さない覚悟を決めた彼女ではあつたが、二人との濃厚な一日を過ごして、また少し心境は変化していた。

現時点では、自分が悪いことをしているというつもりはほとんどない。

強いて挙げれば、友人の恋人に対しても自分からLINEを送つた点ぐらい。かわいいものだ。

だから彼とのやりとりを思い出して、浮かれ気分でいることができた。

一緒に過ごしたたつた半日の間で、恋太郎の優しさ、誠実さは十分に伝わってきた。彼を好きになつて良かつた。根拠の無い本能の導きでしかなかつた恋心が、眞妃の中で確信に変わる。

しかし。

持ち帰つたプリクラに目をやる。羽香里の笑顔を眺めながら、眞妃の心に影が差していく。

“眞妃さんとこんな風に遊んだのは、初めてですよね。”

“二人とも、仲良くしなさいよ。”

高揚し、パンパンに膨らみきついていた心の風船に、わずかな裂け目に入る。

今は、まだ、大丈夫。本音を隠してこそいるものの、嘘をついてるわけではない。不義理を働いた覚えもない。

しかし、この先、これ以上。『彼が欲しい』という感情に従い、行動を重ねていくとしたら。

それは、羽香里に対する裏切りだ。幼少の頃から自分を慕い、信じ、尊敬してくれている、大切な友人に対する冒涜だ。

“友達との仲は壊れてしまうかもしれない。でも、十分に取り返しのつく範囲だと思

うわ。』

覚悟を決めた、つもりだつた。わかつたつもりで、何もわかつちゃいなかつた。

『羽香里を泣かせたくない』

『恋太郎が欲しい』

決して両立しない二つの感情が、等価に胸に去来する。

「私はこれから、どうしたらしいのかしら」

そう一言呟いて、眞妃は刹那の熟考を始める。

この願いを両方とも叶えようと思つたら、簡単な選択肢が一つある。

それは、待つことだ。決してこの想いが溢れ出さないように、固く固く封をしながら、羽香里と恋太郎の関係に決着がつくまで、じつと待ち続ける。

もし彼らが破局すれば、その時は晴れて自分の番だ。傷心の恋太郎にそつと寄り添い、身も心も自分色に染め上げる。ベリーイージー。誰も傷つかない、優しい世界。でも、もしそうならなかつたら？

1カ月前の、あの日の絶望が蘇る……かと思いきや、案外そんなことはなかつた。
(確かにあの時は、そりゃあショックだつたけど)

人間の脳は、辛い記憶を忘れるようにできている。

新しい恋を歩み始めた眞妃にとつて、渚の妊娠発覚は苦い思い出ではあるものの、既に過去の出来事だ。

今の眞妃は、恋太郎との一日を経た幸せ状態。

満足しきつた頭で羽香里と恋太郎のゴールインをシミュレートしようとしても、イマイチ実感が伴わない。

前の恋では、必死で感情を殺すこちらの気も知らず、毎日毎日イチャイチャする姿を目の前で見せつけられていたのだ。

それに比べれば、今日という一日はまさに天国だつた。

カツプルに同行して遊びに行くのだから、多少は辛い思いをすることも、覚悟はした上だつた。

だが、独り身の自分への遠慮もあつたのか。羽香里と恋太郎が、眞妃を傷つけるような行動をとることはついぞ無かつた。手を繋ぐことすらしなかつた。

そういう心遣いが、さらに彼に惚れた一因でもあり。羽香里への罪悪感を覚え始める、きつかけともなつたのだつた。

(今のところは、待つという選択肢も悪くはなさそうね)

パターン1。とりあえず、ステイ。いつたん、そう結論づける眞妃。そのままさらにもう一度、ありうる展開を精査する。

パターン2。待つていてる間に、待ちきれなくなつた場合。

これには、『そもそも待たない』という選択肢も含む。

その時は、恋太郎へのアタックを敢行することになる。
アタックするからには、当然成就させたい。となると、ある程度時間をかけての根回しは必須。

それが羽香里への裏切り行為となることが、この場合の問題点であつた。

良心の呵責には、おそらく耐えられる。人様の恋人を奪おうというのだ、そのぐらいは割り切らないといけない。

ただ、念願成就し、全てが発覚した時。表向きは親しげな様子を保ちながら、裏では恋人を誑かされ、ついには奪われたことを知つた、羽香里の気持ちを考えたら。
その心痛たるや、いかばかりのものであろうか。

そんな事態を招く行いは、四条家に生まれた眞妃という人間の矜持に反するものだ。
(やるとしたら、絶対に裏工作を悟られないようにする必要があるけれど)

『眞妃に裏切られた』という事実が伝わらなければ、羽香里の傷は浅くて済む。それなら

ば、ギリギリ許容の範囲内。

だが現実的に考えれば、その見通しは甘すぎる。

まず、自分が恋太郎にアプローチをかけていることが、羽香里に伝わってはいけない。次に、念願成就の過程で必ず訪れる羽香里と恋太郎の別れの際に、自分が関与することも知られてはいけない。

さらにその後、自分が羽香里の後釜にすわった時、前々から裏切っていたことを悟られてもならない。

越えるべきハードルが多すぎて、目眩がしそうだ。

(こつそり奪いにいつて一つでも下手を踏めば、絶対に羽香里を傷つける。となると)

パターン3。まず、羽香里に本心を伝える。

問題の核心は、奪うことにあるのではない。裏切ることが最悪なのだ。

裏切らずに奪う。つまり、あらかじめ羽香里に宣戦布告をしておけばいい。

(なーんて、漫画なら良くありそうな展開だけど)

少し考えれば、それが一番ありえない選択肢であることはわかる。

『あなたの彼氏を好きになりました』。そんなことを馬鹿正直に伝えれば、普通はどうなるか。

徹底的に、彼からは遠ざけられるだろう。連絡する手段すら取り上げられて、それでおしまい。

しかも、裏切りによつて相手を傷つけることこそ避けられるものの、結局友情の崩壊は避けられない。

どう考へても賢い策ではない。

(あとは、どういうパターンが考えられるかしら)

こつそり奪いにいつて、敗北するパターン。

とりあえず待つてみて、少し向こうの関係に亀裂が入り始めた時に動き出す、折衷案。待つている間に新たな女が現れて、そつちに略奪されてしまうパターン。

待つている間に、自分に新たな恋が訪れるパターン。

エトセトラ。エトセトラ。

正解の決まつている学問の世界とは異なり、恋愛における選択肢は無限。莫大に増えていく分岐を追うために、眞妃の頭脳は限界を超えた回転を強いられ。結果、睡眠を欲する。

「ふああ。寝よ寝よ。これ以上考へてもいいことないわ」

勉強道具を片付けて、明日の準備を確認してから、眞妃は床につく。

電気を消す前に、プリクラをもう一度手に取りながら。
「おやすみ、恋太郎」

そう呟けば、幸せな気持ちで眠りにつけるかと思つたのに。
二人の笑顔が喉に刺さつて、今一つ寝心地は悪かつた。

【第5話】四条眞妃は相談したい

“れ・ん・た・ろ・う・い・ま・な・に・し……”

「はあ……」

浮かない顔で文章を消去し、スマホを枕元に投げ捨てる。

学校から帰ってきてから、もう何度目になるかわからない動作。

ベッドに寝転がりながら、眞妃は欲求と理性との狭間で戦っていた。

「流石に昨日の今日で連絡を入れるのは、がつつきすぎてるわよねえ……」

そう呟いて、眞妃は今日一日のことを回想する。

モヤモヤした寝付きの後には、モヤモヤした目覚めが待っていた。

寝ぼけ眼で朝食を口に放り込み、歯磨きをして身だしなみを整え、荷物を手にとつて玄関へ向かう。

ドアを開ける前に、プリクラを取り出して。

『恋太郎、行ってきます』。

笑顔で写る二人の前に、その一言が喉から絞り出せず。

そのままプリクラを鞄にしまった。

登校。いつもと変わらぬ挨拶。いつもと変わらぬホームルーム。

一限目、数学。微分方程式における変数分離の方法。

二限目、世界史。中世イスラム世界における寡婦の存在と一夫多妻制について。

三限目、音楽。合奏曲『マントヴァーニ 慕情』。チエロを担当。

四限目、現代文。隨筆読解。『双極性ニユーロンの融合による人間性の昇華』。

昼休み。いつものメンバーでお弁当を囲む。イカさんウインナー美味しい。

五限目、倫理。日本における神話の始まりと八百万の神思想について。

六限目、英語。長文和訳。”The only strategy to over
come fate”。

放課後、ボランティア部。第16回駅前募金活動の申請書を作成。
下校。帰宅。

30秒で回想が終わってしまった。

24時間前のめくるめく記憶とは違う、何ということのない平凡な一日。それはそうだろう、平日なのだから。

そして眞妃は、もう一度スマホを取り。

“れ・ん・た・ろ・う・い・ま・な・に・し……”

埒が明かない。そう悟り、方針を変えてみることにする。
「羽香里に連絡でも入れてみようかしら」

それは別に敵情観察でもなければ、挑発行為でもない。

純粹に、話がしたいという思いと、明日以降恋太郎と連絡をとるための、わずかばかりの贖罪の意思を込めたもの。

“こんばんは。昨日はありがとうございました。”

“まだ起きてる?”

すぐに返信。

“起きてますよ！こちらこそありがとうございます。本当に楽しかつたです。”

“眞妃さんと一緒に、また遊びに行きたいです。だいぶ気が早いんですけど、夏休みぶりに予定を合わせて、どこかに出かけたりしませんか？”

望外の誘いを前に、眞妃は少しだけ逡巡する。

浮かれ気分だった昨日までとは違い、今日の時点では既に、自分の心にはもやがかかっている。

夏休み。果たして自分は二人を目の当たりにして、平静を保てる心理状態にあるのだ

ろうか。

そんな思いを胸に押し込みながら、肯定の意を示す返信を作る。

“いいわね。予定が合えば、是非行きましょう。どこか場所の候補はある?”

“そうですね～、横浜で中華街とか、ラーメン博物館とか。上野の美術館巡りも魅力あると思います。”

“あとは近場になりますけど、蘭舞園フラワーパークもオススメですよ！この前恋太郎君と行つて、素敵な写真を撮つてきました！”

そして送られてきた、一枚の画像。

それを見て、眞妃はこれでもかと目を見開く。

心臓は倍の鼓動を打ち、手の平にじんわりと汗が浮かんでくるのがわかる。

それはタキシードに身を包んだ恋太郎と、ウエディングドレス姿の羽香里の写真だった。

周りを女子ばかりが囮んでいるのが不思議だが、生憎とそれが目に入るような状況ではない。

ある朝教室のドアを開けたら、上からギロチンの刃が落ちてきた。

そんな展開にも等しい、突然の衝撃。遠い未来のことだと思つていた、悪夢の具現化。
嫌だ。

嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ。

輝く才女の理性は影を潜め、赤子のような一つの感情だけが脳内を駆け巡る。

投げつけたい言葉はいくつもある。形にしてはいけないそれらはしかし、形にまとまることもない。

震える指で、何とか打ち込む。

“ とつても素敵な写真ね。私もこんな写真、誰かと撮つてみたい。 ”

“ 今日はもう遅いから、この辺りで寝ることにするわ。場所の候補、私も考えておくわね。おやすみなさい。 ”

送るが早いか、即座にスマホを投げ捨てて。

充電ケーブルを繋ぐ余裕も無いまま、電気を消して、布団にうずくまる。

そのままわけのわからない夢を見た。

「それで、それで！その時のかぐや様の視線ときたら！それはもう高潔で麗しく、見る者全ての心を包み込むみたいで！」

「でもそんなまなざしも、今は会長だけに向けられているのですわ……ああ、何て尊いの

かしら……

(この二人はいつも通りだなあ)

今日も今日とてお弁当を囲む、いつもの顔ぶれ。

マスマディア部所属、紀かれん。カプ厨。

同じくマスマディア部所属、巨瀬エリカ。香り高いポンコツ。

ボランティア部部長、柏木渚。授かりし堕天使。

ボランティア部所属。沈黙の少女、四条眞妃。

「…………」

「マキ、どうしたの？さつきから一言も喋つてないわよ」

「お箸も全く進んでいませんわ。どこか具合が悪いのではなくつて？」

氣遣う二人にも全く言葉を返さず、眞妃は虚空を見つめ続ける。

「マキちゃん。保健室行つた方がいいんじゃない？」

「……渚。大丈夫よ。大丈夫。……大丈夫」

うわごとのように繰り返す彼女を見て、周囲は心配を募らせる。

「ただごとではありませんわ。何に悩んでいるのか、聞かせてくださいまし」

「私たち、友達じゃない。つらい時は頼つてよ」

力強く声をかけられ、眞妃はゆっくりと口を開く。

「どうしても。どうしても欲しい、宝石があるとしてね」

「その宝石は既に売約済みなの」

「でも、どんな手を使つてでも、今掴まないと。もうすぐ、永遠に手の届かない場所に行ってしまうの」

「ぱつり、ぱつりと、眞妃は言葉を紡ぐ。

それに対して、二人は。

「なるほど！つまりかぐや様の財力に頼つて、その宝石を買収してもらえばいいのね！」
「このポンコツーーー！」

「ポンコツとは何よ！！かぐや様の威光にケチをつける気！」

「あなたがポンコツと言つているんです！だいたいお金で解決できる問題なら眞妃さんはこんなに悩みませんわ！」

「二人とも、例え……例え話だから……」

「なだめながら、渚は一つの提案をする。

「マキちゃん。私たちには、はつきり言えないことなのかも知れないけど」

「そんなに悩んでるのなら、いい相談先、紹介するよ？」

「全然知らない人の方が、詳しく述べ話をすることもあるんじやないかな」

「そう言って、スマホを取り出す渚。

開いた画面には、目つきの悪い中年男のピースサインが映っていた。

「はいどもー」

「5億円の借金を背負った男ホワイトおじさん」

「今日も元気に台所前から配信するぞお」

「……始まつた」

バツチリとベストを着こなし、重低音イケボで配信を始める灰髪の男。

登録者数10万人を超える人気チャンネル、『借金5億円チャンネル』。

その主、ホワイトおじさんの姿を見ながら、真妃はタイミングを見計らつていた。

話題が途切れ、コメントが疎らになる瞬間を狙い、用意していた文字を入力する。

“高三の女子です。一目惚れした人に彼女がいて、しかもその彼女は私の友達です”

“自分にチャンスが来るまで待っていたかつたのですが、止まれそうにありません”

“どうしたら良いでしようか”

「……よくある話だな」

「まず、前提として。横恋慕している相手に想いを伝えるのは、基本的に迷惑だということを知つておくべきだ」

「！」

画面を見つめながら、耳を傾ける眞妃。

「求愛を断るというのは、労力のいることだ」

「たとえ何とも思っていない相手でも、フッたら後味は悪いし、しこりは残る」

「好感のある相手なら、なおさらだ。湧き上がる欲望を抑え、恋人への罪悪感を感じながら、自分の心に嘘をついて、相手を突き放す」

「好感が大きければ大きいほど、その後彼は悩むことになる。順風満帆な恋路を、陰らせてしまうかもしれない」

「だから、君は想いを抱えておくべきだ。人生は長い。今焦らなくたって、しかるべき時に、收まるべき所に收まるようにできてる」

そんなアドバイスを聞きながら、眞妃はかぶりを振る。

それができたら、苦労はしていない。想いを抑えられるなら、こんな相談はしていいのだ。

「だが、止まれないという君の気持ちもわかる」

「！」

「心を完璧に制御するのは、不可能だ。ベストではないとわかりきつていてる選択を、とら

ざるをえなくなることは確かにある」

「そういう時は、一つだけ、ルールを守つて欲しい」

『自分で自分を、許せなくなるような行動は、絶対にしないこと』だ』

「君の行動の末に、どのような結末が待つているかは、動いてみるまでは誰にもわからない」

「失うものもあるだろう。あんなことしなければ良かったと、悔恨に打ちひしがれることもあるだろう」

「誰に許され、誰に許されないかもわからない。だが」

「たとえ全てを失つたとしても、最終的に自分だけは、自分の目の前に残る」

「その時に、自分だけは、自分を認めてやれるような、そんな人間でいることだ』

「それさえ守れば、いつかは立ち直れる。逆に、自分だけは自分を許せなくなるような、そんな行動をとつてしまつたら」

「たとえ全てを手に入れたとしても、心内の業火に焼かれ、いざれはその身を滅ぼすことになる」

「おじさんから言えることは、それだけだ」

「それじゃあ、次の相談いくぞー」

「高校生男子です。彼女が僕に殴られるのを心から望んでくるのですが、僕は彼女を殴

りたくありません——」

遠ざかる音声を聞き流しながら、眞妃は静かに決心を固める。ユーチューブの画面を閉じて、目を閉じ、沈思黙考する。しばしの後の後開いたのは、花園羽香里とのトークルーム。ゆつくりと文字を打ち出す指は、もう震えてはいなかつた。

【第6話】四条眞妃は打ち明けたい

「眞妃さん。またお待たせしてしまって、ごめんなさい」「呼び出してもらえて、嬉しいです。話つて何ですか？」

アセアセとした表情の中に喜びを滲ませながら、眞妃の対面に座る羽香里。眞妃が話し合いの舞台に選んだのは、どこにでもあるようなファミリーレストラン。時刻は日暮れ過ぎ。古くは逢魔が時と呼ばれ、魑魅魍魎に出会う禍々しい時とされている時間帯。

果たしてこれから眞妃が呼び出すのは、怒りを司る禍津日神まがつかひのかみか。それとも、永遠の離縁を言い渡す伊邪那美命いざなみのみことか。

見えぬ未来に心を震わせながら、それでも眞妃の決意は揺らがない。

私は、決めたのだ。自分に恥じることのない行動をする。たとえ何が起きたとしても、最後には前を向いているために、私は今日ここに来たんだ。

カルピスの中に入れられた氷が、一つ音を立てて溶け落ちる。メニューの冊子を手にしながら、眞妃は口火を切った。

「とりあえず、注文。お腹空いてるでしょう？ 話はご飯の後でいいわよ」

「いいえ、飲み物だけで大丈夫です。学校が終わつた後、簡単なものはお腹に入れて来ました」

「……大事な、話なんですよね？」

一段だけ落ちた声のトーンに、眞妃の心臓がピクリと跳ねる。

穏やかな笑みを浮かべる羽香里だが、その瞳には真剣なものが宿つている。

女の勘というやつだろうか。呼ばれた目的がただの雑談などではないことは、彼女も感づいているようだつた。

「……わかつてもらえるなら、話は早いわ」

ピーチジュースをテーブルに置いて、席に着き直した羽香里を前に、眞妃は改めて覚悟を決める。

どんな言葉から話を始めようか。

今日、学校はどうだつた？

夏休みには、どこへ行きましょくか？

恋太郎は、元気してゐる？

当たり障りのない枕詞を浮かべながら、そのどれもが嘘なような気がして、うまく表には出てこない。

私が今日言いたいのは。伝えたいのは、そんなことじゃなくて。

「……私。恋をしてしまったの」

結局選んだのは、ストレートな表現。

自分の心の中心を占める、嘘偽りの無い真正直な言葉。

心臓が、早鐘のように打つ。

ついに溢れさせようとしている思いの丈が、荒波になつて真妃の全身を飲み込んでいく。

わああ、おめでとうございます！

相手はどこの誰なんですか？出会つてからどのくらい経つ人なんですか？

私、応援しますね！

そんな顔で、こつちを見ないで。お願ひだから、何か口を開いて。
を見詰めるばかり。

そんな顔で、こつちを見ないで。お願ひだから、何か口を開いて。

それは、彼女の本音ではない。震える心を少しでも宥めるための、逃げ口上に近い嘆願の言葉。

「……相手は、貴女もよく知つている人」

「貴女によつて出会わせてもらつた、貴女にとつて大切な人」

「恋太郎に。私は、恋をしてしまつたの」

一度堰を切つた感情の濁流は、とどまる事を知らず流れ始める。

「一目見た瞬間に、心を奪われた」

「その夜からずつと、頭を離れることはなかつた」

「彼のことを一つ知るたびに、胸が躍つた」

「彼のことを一日見るたびに、欲しくて欲しくてたまらなくなつた」

「彼の心を手に入れるために、何だつてしまふと、一度は思つた」

「彼に近づいて、奪い取るために。私は恋太郎に連絡をしたの」

「ごめんなさい。…………ごめんなさい」

謝罪につけ加える言葉が見つからず、ただただ同じ言葉を並べる眞妃。

羽香里は一言も発することはなく、ただ同じまなざしで眞妃を見続ける。独白は続く。

「それでも今日、貴女をここに呼んだのは」

「このままじゃいけないって、思つたから」

「このまま何も考えずに突き進んでいつたら、大切なものをたくさん失つてしまつて、気づいたから」

「許して欲しいわけじゃない。自分がこれから、どうしたいのかもわからない」

「それでも私は。貴女に、私の想いを知つてもらいたくて」

「……これから恋太郎と関わっていくのに、貴女に何も知らせないなんてことに、耐えられなくなつて」

「羽香里。私は、恋太郎が好き」

「……それが今、私の全てよ」

全部、伝えきつた。

生まれてこの方、素直になれずに周囲と距離を置いてきた。

本当は仲良くしたかつた血縁者も、手から零れ落ちた初恋も、元を辿れば、自分が素直になれなかつたことがうまくいかない原因となつていた。

もつと早くから、こんな風に生きられていたら。

そう省みる眞妃の中には、決して後悔の雲が押し寄せて いるわけではなく。どこか生まれ変わつたような、晴れやかな気分だつた。

感情を押し殺さずに、相手に伝えられるということは、こんなにも――

「……そうですか」

羽香里がやつと口を開く。

「眞妃さんと、久しぶりにパーティーで会つて、彼を紹介して」

「初めてプライベートで遊びに誘つてもらえて。連絡をもらつて、こうやつて呼び出しつてもらえて」

「嬉しかつたのにな」

俯く羽香里。

しばしの沈黙を挟んだ後に、落胆の色を隠すことなく、少女は言葉を繋いでいく。

「この前も、今日も、私を呼んだのは自分の恋愛のため」

「私のことなんて、恋太郎君の添え物としか見ていいなかつたんですね」

「…………違う！ そうじゃなくて！ ……違うの」

先ほどまでの気持ちとは一転。心を侵し始める動搖をはつきりと感じながら、続けるべき言葉が見つからないことに焦る眞妃。

添え物として見ていたわけなんかじやないと、言おうとした。でも、その実、何も違わなかつた。

小学生の頃に出会つてから、今までずっと遊びに誘つてこなかつたことは事実。初めて出かけた休日が、恋太郎に会うためだつたことも事実。今日呼び出したのが、彼への恋心を伝えるためだつたのも事実。

羽香里から見た時の自分の行動を想像して、眞妃はハツと息を呑む。やつぱり自分には、何も見えていなかつた。

裏切りたくないなんて散々思いながら、その実既に裏切つていたんだ。

友人の恋人に、横恋慕をして。自分から身を引かずに、奪い取ろうと決心して。

一日二人の姿を見たぐらいで、簡単に決心を揺らがせたりして。

鍵をかけていた想いの全てを、自分に恥じたくないからなんて理由をつけて、彼女に対してだけは解放して。

「それを聞かせて、私にどうしろって言うんですか」

「事前に真意を聞かされたからって、私がみすみす恋太郎君を奪われるのを、良しとする」とでも思つたんですか？」

「これからも何も無かつたような顔で、関係を続けていいけるつて。あなたは、そう思つているんですか？」

羽香里の言うことに、間違いは一つもない。

返せる言葉が、何も思いつかない。

自分が今日選んだ行動は、気持ちを楽にするために、羽香里に重荷を押しつけるだけの行為でしかなかつたんじゃないか。

結局私は、恋太郎のことしか見えていなかつたんだ。

押し寄せる後悔に溺れそうになりながら、最後の言葉を待つ眞妃。

そこにかけられたのは、思つてもみなかつた一言だつた。

「……なーんて」

顔を上げる羽香里。

それは眞妃が今まで彼女に見出したことのない、妖艶さの中に。一抹の愉悦を含んだ、邪な笑顔。

背筋に、ゾクリと冷たい汗が流れる。

いい返事が返ってくるなどとは、最初から期待していなかつた。

しかし、目の当たりにしている光景は、想像していた悪い未来とは、全然種類が異なつていた。

「私、全部、気づいてましたよ。最初は、薄々でしたけどね」

「初めに紹介した瞬間の、眞妃さんの反応。恋太郎君に入った連絡の早さ。3人で遊んだ時の表情。そして、今日の私への誘い」

「行動が性急すぎますし、考えてることが全部顔に出でますよ。……バレてないと思つたら、大間違いです」

羽香里の唇が妖しく歪み、言葉が紡がれていく。

眞妃にとつてそれは、おぞましい呪術の詠唱のようで。

全て見透かされていた。

その上で、一緒に遊びに出かけて、夏休みの計画を提案して、写真を送りつけて、今日この場に現れた。

そしてわかりきつていた眞妃の本心を聞いて、下を向いて傷ついたふりをして。心の中で眞妃のことを、嘲笑つていた。

……ひょつとして、恋太郎にも？

高速で思考を回転させる眞妃の前で、羽香里は恍惚さと優越感を隠さずに笑い続けている。

——この女、いつたいどこまで——

怒の色に染まる眞妃の瞳。

目つきが険しくなるのを自覚する。奥歯には自然と力が入り、全身の毛が逆立つていく。

手の平の上で弄ばれていた、屈辱と。自分には得られないものを持つていてることに対する、羨望と。決意を踏みにじられたことに対する、憤慨と。

それら全ての感情がない交ぜになり、眞妃の中で憎しみの檜が形成されていく。変貌した幼馴染みに向けて、それを発射しようとした、まさにその時。その変化は、訪れた。

「……なーんて、」

それはつい2分前に彼女が発したのと、全く同じ文言。
違っていたのは、その表情。

その瞳から、頬から、唇から、先ほどまで発していた邪気は一切消え去り。

残つたのは、眞妃のよく知る、いつもの純真な羽香里の笑顔だつた。

怒りの持つて行き場を無くして啞然とする眞妃を見ながら、羽香里は再び言葉を発する。

「ごめんなさい。ちょっと、意地悪しすぎちゃいました」

「……羽香里。 ittai、どういうこと？」

「どういうことかっていうと、うーん。ちょっと、説明が難しいんですけど」「一言で言うと。私、眞妃さんに対してあんまり怒ってないんです」

そう言って、羽香里は感情を言葉にまとめていく。

「もちろん私の視点から見て、『無いな』って思った要素は無いわけじゃないです」「それはさつき、もう既に言いました。だからちょっと、憂さ晴らししちゃいました」「ごめんなさい、ともう一度呟いて、さらに言葉を続ける。

「でも眞妃さんは今日、私に偽らない気持ちを話してくれました」「彼と出会つてから、たつた10日目で。凄いと思います。誰にでもできる」とじやないです」

「眞妃さんは、やっぱり私の知つてる、格好いい眞妃さんでした。……大好きです」

「恋太郎君への想いが、それだけ大きいこともわかります」

「私だつて恋太郎君が大好きだから、わかるんです」

「眞妃さんと私の違いは、ただ恋太郎君に先に会つたか、後に会つたかだけ」「だから、眞妃さん」

「私は、あなたを許します。そして、眞妃さんにも、私を許して欲しいです」

「これからも、友達でいてください」

「……羽香里」

眞妃の全身から毒気が抜かれ、心底からの安堵が駆け巡る。羽香里の結論を、ゆっくりと反芻する。

結果的に自分は、何も失わずに済んだ。

眞妃の出した勇気は、見事に実を結んだのだ。

内心でホワイトおじさんに感謝しながら、すっかり薄まつたカルピスに口をつける。

……ほとんど水だ。

「それにしても。あー、死ぬかと思つたわ」

「名演すぎよ。アンタ、財閥のことなんか誰かに任せて、女優にでもなつた方がいいんじゃない?」

「私は、花園の子ですから」

このぐらいの芸当はできないと。

そんな意思を言外に受け取り、眞妃は苦笑する。

「さて。一段落ついたけれど、私たちの関係を整理しておかないとね」

「私、恋太郎への想いを諦めることなんてできない。アンタ達に幸せになつて欲しいのと同じくらい、私だって幸せになりたい」

「勝つても負けても、恨みっこなし。そういう風に思つてもらえると、私としてはありが

たいんだけど——」

「眞妃さん。そのことについてなんですけど」

羽香里が、言葉を遮る。

その瞳には、今まで見てきたどの表情とも違う艶いろが映っている。

それは歓喜と安堵と、これから起きることに対する期待と、少しの興奮とが入り混ざつたもの。

「頑張った眞妃さんに、とびつきりのご褒美です」

「信じてください。私のご主人様は、ものすごい人なんですから」

そう言い切る少女の顔には、どこか扇情的な雰囲気さえ漂つていて。

……私はこれから、とんでもないことに巻き込まれようとしているのかかもしれない。

そんな予感に飲み込まれながら、自分の口角が吊り上がり始めていることに、眞妃が気づくことはなかつた。

【第7話】四条眞妃は見極めたい①

「恋太郎君！こつち、こつち！」

軽く腰を浮かせながら、羽香里は愛しい恋人を手招きする。

舞台は引き続、ファミリーレストラン。

入り口に現れたのは、二人の想い人、愛城恋太郎その人であつた。

眞妃はおおよそ予想通りの光景を目にしながら、これから一体何が起きるのかについて思案を巡らせていた。

30分前。意味深な発言をしたかと思つたら、急にスマホを取り出し、メッセージを打ち始めた羽香里。

誰に連絡しているのかの問には答えず、いくつかやり取りをしたと思しき後に、ポケットにしまって、そのまま何ということのない雑談に入る。

「眞妃さん！夏休み、どこに行きましょうか！」

その瞳にも語氣にも、邪惡なものは一切含まれておらず、純粹に眞妃との外出を楽しみにしている感情だけが伝わってくる。

その勢いに押され、当座の疑問を脇に置いて話題につきあう眞妃。

「そうね。とりあえず、候補を手当たり次第に挙げてみましようか」

「真つ先に思いつくのはディズニーだけど、3人で行くのはちょっと微妙よね」「この前提案した、横浜はどうでしょう！・ワールドポーターズにコスモワールド、カツプヌードルミュージアム！一日じやとても回りきれないぐらいスポットが揃っていますよ！」

「水族館なんかも悪くないと思うわ。品川のアクアパークに行つたことがあるけど、なかなかいい雰囲気だつたわよ」

「水族館なら、思い切つて鴨川シーワールドまで足を伸ばしませんか？せっかくの夏休みですし、一度行つてみたいと思つてたんですけど…」

「だいぶ思い切つた提案ね。そこまで遠出を考慮するなら、選択肢はグッと広がるわ」「一泊するプランも考えちゃいましょう！熱海か伊豆で温泉宿に泊まるとか！」「どんどん大胆になつていくわね。当然部屋は、私と羽香里で一緒よね？」

「えへへー、それはどうでしよう」

「ぶんなぐんぞ」

そういう意味では、ないんですけど。

羽香里はちょっとと考えて、まあ後にしようと判断して、そのまま話題を続ける。

「もしかしてもしかして、普通に旅行にしちやうとか！」

「暑い時期だし、軽井沢も好きよ。自然と触れあえるし、テニスも楽しいわ。二人で恋太郎をボコボコにしてやりましょう」

「私は、伊勢神宮に行きたいです！あんなにパワーをもらえるスポットは、なかなか他にはないと思います」

「史跡を訪ねるのもいいわね。お城を巡ったりするのって、楽しいのかしら」

「古城巡りなら、ちょっと遠いけど中四国ですよ！現存する天守閣が何故か集まってるらしいです！」

「詳しいわね。四国だと、讃岐うどんに高知のカツオ。阿波踊りを楽しんで道後温泉でフイニッシュ、完璧だわ」

「温泉と言えば別府が最高ですけど、九州は遠すぎるかもしませんね。北海道も遠いし、東北だと……恐山、とか!?」

「北海道より遠いわよ」

どんどん話に花が咲き、時間を忘れてのめり込む。

そうこうしているうちに、恋太郎の登場とあいなつたのであった。

「二人とも、こんばんは。こんな時間にどうしたんですか？」

「恋太郎君！恐山と地獄巡りだったらどつちがいいですか!?」

「日本で最もあの世に近い二択!!」

「俺何か殺されるようなことしたつけ、と狼狽る恋太郎を横目に、眞妃がたしなめる。
「羽香里。どつちもボツになつた場所でしよう?」

「そうでした。つい楽しくなつちやつて」

「旅行の行き先、かな?」

「ええ、そうよ。夏休みに3人で遊びに行けないかと思つて、候補を挙げていつてたところ」

「まあ、恋太郎君を呼んだのはそれを決めるためではないんですけどね!」

「違うのか。そう思いつつ、恋太郎はメニューを手に取る。チヨコパフェを注文。

「それで、羽香里は何で俺を呼んでくれたんだ?」

眞妃が抱くのと全く同じ疑問を、恋太郎が尋ねる。

「それはですね…………」

「眞妃さんから!恋太郎君に!どうしても伝えたいことが、あるらしいんです!」

何てことを言い出すんだこの娘は。

固まる眞妃。

「眞妃さん。 そうなんですか？」

「いや、あの、えっと、その」

顔を逸らして意味の無い音声を発しながら、まとまらない思考を何とかまとめようと努力する。

羽香里はキラキラした目でこちらを見てくる。

……まさかこの期に及んで、『眞妃がフられる様を目の前で見たい』などということはないだろう。

もしそうだつたら、今度こそ絶交だ。四条と花園の戦争になる。

もしかして、私は恋太郎とつきあえるんだろうか。

そんな期待が頭をもたげるが、目の前の二人を見て冷静になる。
うまくいってないようにも、今すぐ別れるようにも見えない。

(ありえるとしたら……)

(正々堂々、勝負をしましよう、ということかも)

それもいまいちピンとこないが、そのぐらいしか可能性が思いつかない。

だとしても、今すぐ恋太郎に告白するには色々と問題があつた。

そんな心の準備も言葉の準備もしてきていないし、羽香里だつて目の前にいる。

それに、何より……

(……恥ずかしい)

以前までなら決して出せなかつた勇気を、いくつも出してきた昨今の真妃であつたが。

流石に滾る恋情を、意中の男性に向かつて直接伝える勇気まで持ち合わせているかといふと、それはまた別の話だつた。

躊躇う真妃。

待つ恋太郎。

見守る羽香里。

永遠にも思われるような逡巡の後、真妃の頭脳が弾き出した解答は。
変化球であつた。

「こ、これは、私の友達の話なんだけどね」

「この前のパーティーでアンタを見た時に、一目惚れしちやつたらしくつて

「彼女いるしチャンスないよって教えてあげたんだけど、どうしても諦めきれないらしくつてね」

「気持ちだけでも伝えてもらえないかつて。あはは、こんなこと言わわれても迷惑よねえ」「あなたには、羽香里がいるんだもの。ね？」

それは眞妃からすれば、『友達』の話に身を借りた、自分自身を止めてもらうための確認の問いかけ。

ここ数時間での、嵐のような感情の変化に揺られ続けた脳髄が絞り出した、苦肉の策。

「そうだつたんですか。わざわざ伝えてもらつて——」

「眞妃さん」

鋭い眼光とともに話を断ち切ったのは、羽香里。

その表情には、先ほどの演技と比べればわずか3%ほどの濃度ではあるが、今度は確かに本心からの、落胆の色が浮かんでいる。

「私、眞妃さんがそんなこと言うところ、見たくなんか、なかつたです」

——信じてくださいって、言つたのに。

一つため息をついて、さらにとんでもないことを言い始める。

「いいです。眞妃さんがそんなに言いたくないなら、私が代わりに言つてあげます」
嫌だ。待つて。

「嫌なら、私が言い切る前に。ご自分の口から、ご自分の言葉でどうぞ」
それだけは。

「……眞妃さんはね。恋太郎君のことが」
「やめて!!」

店内に響き渡りそうなほどの大声を上げて、羽香里を制止する眞妃。

その剣幕に、羽香里もようやく我に返る。

羽香里は羽香里で、舞い上がつていた。

眞妃の行動の答え合わせを聞いて、少しだけがっかりした気持ちと。包み隠さず打ち明けてくれた、この上ない喜びと。これから自分と旧友に訪れるであろう、幸福に対する期待感と。

それらに頭を支配されて、つい先走つてしまつたのだ。

「……ごめんなさい」

今度は演技ではなく、俯く羽香里。

眞妃は答えない。感情が渋滞を起こしすぎていて、答えることができなかつた。

氣まずい沈黙が流れる。

今日はこのまま、お開きで。そんな流れになつてもおかしくない空気が立ちこめた時。

そんな時に『男』を見せるのが、恋太郎なのである。

ここまで流れ。具体的な言葉は何一つ聞いていないが、二人が今どんな気持ちでいて、何を伝えたいのかは、あらかた恋太郎には伝わった。そして。

「羽香里。今、ここでいいか？」

意味深な問いに、羽香里は小さくコクンと頷く。

そして恋太郎は、眞妃へと正対する。

「眞妃さん」

「一目見た時から、あなたのことが好きでした」

——えつ?

今、何て——

「出会つたばかりで、まだまだお互い、知らないことばかりだと思いますけど」

「少し一緒に過ごしただけで、眞妃さんが優しくて、ちょっと素直じやないけれど、とっても可愛い人だということは、十分にわかりました」「これからもつと、いろんな顔を、俺に見せて欲しいです」

「俺の、恋人になつてください」

時が止まる。

言われた言葉を遅れて理解し。

眞妃の脳を、歓喜が包み込む。

生まれて初めて、好きな人から、好きだと言つてもらえた。

足下から溶けて無くなつてしまいそうなほどの、無上の幸福感に襲われながら――

聞かねばならないことが、眞妃にはあつた。

「羽香里との関係はどうするの？」

そして返ってきたのは、今日何度目になるかわからない、とんでもない言葉。

「羽香里とも、別れることはできません」

「でも、俺は、眞妃さんも欲しいんです
「二人とも、俺の恋人になつてください」

……今度こそ、言葉が遅れて脳に到達する。

それに対しても返すべき返事を、眞妃は知らない。

羽香里を見る。その表情は見えないが、少なくとも恋太郎に関する拒否を示すことはない。

わからない。どうして貴方は、そんなことを平氣で言うの?
わからない。どうして貴女は、何も言わないの?

そう長くはない、沈黙が流れた後。

眞妃の頬を、一筋の涙が伝い落ちる。

「！眞妃さん！泣かせてしまつもりは」

「ごめんなさい」

「…………今日、これ以上何かを考えれそうにないの」

度重なる感情の激震に振り回され続けた眞妃の大腦扁桃体は、限界を迎えていた。

「一晩、冷静になるための時間をちようだい」

明日また同じ時間に、同じ場所で。

そう約束を一つ交わして、眞妃はその場を足早に立ち去った。

【第8話】四条眞妃は見極めたい②

翌日。

三者三様に夕食を平らげ、食後の紅茶をすすりながら、眞妃は昨日の続きを始める。

「私と羽香里、両方とつきあいたいって話だつたけど」

「二股をかけたいってことで、間違いないわよね」

「正確には少し違うんですけど、まずはその通りということになってしまいます」

「何が少し違うのか。それを聞くのはさておいて、眞妃は率直な気持ちを伝える。
「はあ。アンタ、脳みそ腐つてんじゃないの？」

「……返す言葉もございません」

自覚はあるらしい。

「羽香里も羽香里よ。二股かけられようとしてるのに、何でアンタは何も言わないの」

「私は、恋太郎君にフられることさえ無ければそれでいいです」

エキセントリック。羽香里がこんな恋愛観をしていたとは知らなかつた。

「全く」

「私はアンタと、つきあえればそれでいいわけじゃないの。ちゃんと幸せになりたいの」
あ。

言つちやつた。

失言に気づいてチラリと恋太郎を見るが、その表情には特段の変化はない。羽香里が
サツと下を向いたのはちよつとムカつく。

内心真っ赤に茹で上がりながらも、努めて平静を保つて眞妃は続ける。

「たたた例え話よ！ 仮につきあつたらつてことよ！」

訂正。平静は別に保てていない。

「とにかく！ そんな無法なことを通したいなら、まずは理由を聞かせなさい」

「一人の女とつきあうのなら、他の女とは別れるのが道理よ」

「どうして当たり前のことができないのか、私が納得するように説明してみなさい」

「……理由は、あります。でも、今は話せません」

——恋太郎と結ばれなければ、眞妃はなんやかんや不幸な目にあつた後、死ぬ。
神から教えられた残酷な運命を、伝えることは簡単だ。

だが、それを聞かせて結ばれたところで、一体何になるというのだ。

そんなのは、まるで脅迫だ。そんな関係性に、未来はない。

いいよとなれば、伝えなければならない。でもそれは、あくまで最終手段。

恋太郎は恋太郎自身の力で、運命の人の愛を勝ち取るのだ。でないと、幸せにすることなんてできない。

命を賭けて茨の道を歩むと決めた男の、覚悟であつた。

「話にならないわ。二股はかけたい。理由は言えない。そんな理屈が通るとお思い？」
「簡単に通るとは、思っていません」

「それでも俺は、この想いを絶対に通さなければいけないんです」

「絶対に、あなた達を幸せにしてみせる」

「だから、眞妃さん。俺の恋人になつてください」

「……平行線ね」

こんなやりとりをしている隣で、羽香里はメロメロである。

「恋太郎。正直、アンタのことは嫌いじゃないわ」

「ど、どうしても。アンタがどうしても私とつきあいたいって言うのなら、聞いてあげないこともないわよ」

精一杯の虚勢。羽香里が噴き出しそうになるのを抑えているのがわかる。……そろそろ本当にぶん殴ろうか。

「でも、二股を受け入れるなんて、私にはできないわ」

「アンタだって、わかってるでしょう。二人の女を同時に愛するのが、どれだけ無謀なことなのか。欲望に任せて無茶をしていたら、アンタだって幸せになんかなれないわよ」「二股でも、幸せになれるつて。そう確信できる何かを示してくれれば、考えてあげないでもないけれど」

「そんなもの、あるわけが——」

「眞妃さん」

それまでずっと身悶えし、一言も発しなかつた羽香里が、口を開く。

「そういうことなら、いい方法があります」

「……？」

「次の土曜日。私の家に来てください」

「面白いものを、見せてあげますよ」

「恋太郎。こんなことしてて、本当に大丈夫なの？」

場所は○○高等学校。

屋上へ向かう階段を二人で上りながら、眞妃はそう尋ねる。

「土曜日。約束通り花園邸へ赴いた眞妃を待っていたのは羽香里ではなく、恋太郎一人だけだつた。

「羽香里はちよつと準備があつて、別の場所にいます」

「一緒に、俺の高校へ来てください。そこに、見せたいものがあります」

そう言われ、不審がりながらもここまでついてきた眞妃。

恋太郎はただ眞妃の手を引くばかりで、答えない。

その表情に少し陰が落ちているのは、気のせいいか。

そして屋上へ続く扉は開かれ。眞妃の目に飛び込んで来たのは。

赤、黄、赤、赤、赤、黄色のコスチュームに身を包み、後ろを向いて並んでいる、人の女達であつた。

“パパパパーパパー♪♪♪”

陽気なミュージックが流れ、順番に振り向いていく彼女達。

「私こそは、一番に名乗りを上げた者！宝物は、ピンクの四つ葉のクローバー！脳みその色もピンク色！ハカレンジャイ！」

「わ、私だつて同じ日に告つたんだから！宝物は、ピンクの四つ葉のクローバーなんかじゃないんだからね！カラレンジャイ！」

“ 内に秘めた静かなる想いは、主人への何よりの忠誠の証！弱さこそが明日の強さへ繋がる！” 「シズレンジヤイ（羽香里の声）！」

「効率重視。ナノレンジヤイ」

「ドパミン！オキシトシン！エンドルフィン！今日も今日とておクスリ天国！シャブはまだだよ！クスレンジヤイ！」

「若さが何よ！私の色香にひれ伏しなさい！女が一番輝くのは、二十代後半つて言われてるんだから！ハハレンジヤイ！」

我ら6人揃つて――

ゴレンジヤイ!!!!

ズドバ――――ン!!

ものすごい勢いとともにポーズをとる彼女達を見て、呆気にとられる眞妃。

「……これ、どういうこと？」

眞妃の口から、一切の笑みは零れない。

「ほらー！だから言つたじやないか、流石に滑り散らかすつて！」

「だいたいコレ、私たちが生まれる前のネタじやない！誰よこんな持つてきたの！」
「こんなのは何ですか！私が子供の頃はこれに皆夢中になつたのよ！」

“パーティを組むのならば、役職は分けるのが普通。戦士と武闘家ばかりのその一行は、異様な雰囲気を放つていた”

「どうせなら全部赤にするのが効率的」

「そこで新開発！『目に見えるものを全部赤くしてしまう薬』なのだーー！」
わいわい。ぎやいぎやい。

仲良く言い争う女たちをよく見ると、それはいつかのウェディングドレスの写真に写つっていた、周りの娘たちだと気づく。

「羽香里。これはいつたい、何のつもり？そもそもあなた達、どういう関係なの？」
「私たちはですね……」

少し胸を反らして威張りながら、羽香里は告げる。

「恋太郎君の、恋人です！」

それは知っている。一瞬そう思つた後、その眞の意味に気づく。

そんな、まさか。

そのままさかを、確認する。

「恋人つて……まさか、全員？」

「全員です！」

元気よく返ってきた返事に卒倒しそうになりながら、顔を見渡す。よく見ると、羽々里さんまでいる。明らかな、異常事態。

にも関わらず、全員の顔は晴れやかで、慈愛と幸福に満ちていて。

「眞妃さんに、見せたかつたんです」

「私たち、全員、幸せですって。こんな風に協力してばかな事ができるぐらい、仲良くやっているんですよって」

「今更眞妃さん一人増えたところで、恋太郎君は問題なく愛してくれるって。そう伝えたかつたんです」

「幸せになれるっていう、確信。感じてもらいましたか？」

全くもつて、理解不能。眞妃の理性は、そう告げている。

しかしながら、彼女の本能が囁く。

もしかしたら私は、今日から、幸せになつてもいいのかも知れないと。

この男に、幸せにしてもらえる未来が、あるのかもしれない。

そう実感した瞬間、胸から溢れ出し、脳天を貫く至福の感覚。今までずっと報われない日々を送つてき少女に訪れた、天使の福音。そのファンファーレを聞きながら、真妃は抱腹絶倒する。

「……あはははは！ あははははははは！」

「あなたたち、面白いわ！ どうしてそんなことをしているのかも、何で全員納得しているのかも、全然理解できなけれど」

「一つだけ、確認させて」

「恋太郎とつきあつて、幸せ？」

最後の確認に、答える6人。

「幸せです」

「し、幸せなんかじゃないんだからね！」

“ それは至高の幸福であつた”

「幸せ」

「幸せなのだ！」

「幸せよ」

自 分 同 類

約一名、素直じやないのが混ざつていてることに気がつくが。
その答えに、眞妃の心が決まる。

「わかったわ。私、アンタにつきあつてあげる」

「言つとくけど、アンタが好きかどうかはもうわからないわよ。てゆーか、たぶん、好き
じゃない」

嘘よ。大好き。

「けど、私はアンタたちに興味が湧いた」

「アンタのこと、見ててあげる。本当に私たちを幸せにしてくれるのか見極めがつくま
で、アンタについていつてあげる」

「だから、私を。惚れさせてみせなさい」

それは彼女に残された、最後の虚勢。
それを受けて、恋太郎は。

「眞妃さん」

「約束します。絶対に、あなたを幸せにしてみせる」

最高に、格好いい顔で返し。

そのまなざしを眞妃が忘れるることは、きっと生涯ないだろう。

「そんな可愛い顔したからって……」

「私は簡単に落とされたりなんか、しないんだからね!!」

そのセリフを聞いて、目尻の涙を拭う、花園親子。
優しい微笑みを浮かべる、静、凪乃、楠莉。

深刻なキヤラ被りにおののく唐音。

そして、幸せ満開の笑顔を見せる眞妃。

晴れ渡る空に、笑い声だけがこだました。

【第9話】藤原千花は描かせたい

「ここから恋バナのにおいがします！」

その日、バンツ！と騒々しい音を立てて生徒会室の扉を開けたのは、秀知院学園高等部3年、生徒会書記、藤原千花。ふじわらちか。

ストライプ柄のハンチング帽にトレードマークの極黒リボンを装着し、頬を上気させながら虫眼鏡を掲げて部屋へと入る。

いつも通りの『ラブ探偵』の姿であった。

「藤原さん。いつも思うのですけど、その衣装の持ち出しは演劇部に許可をとつているのですか？」

呆れ顔を浮かべてそう問いかけるのは、漆黒の長髪を真紅のリボンで折り畳んだ、紅

玉の瞳が印象的な美少女。

生徒会副会長を務める四宮財閥の令嬢、四宮みやかぐやしおみやかぐやであつた。

「もちろん、許可なんてとつてません！」

「はあ？」

「バレなきや罪じやないんですよー！」

大きな胸をめいっぱいに張つてふんぞり返る彼女を見て、ため息をつくのは本日の来訪者、四条真妃。

「四条さん！久しぶりですね！」

「ええ、久しぶり。アンタはちつとも変わつてないわね」

「そう言う四条さんは、何だか雰囲気が柔らかくなりましたか!? もしかして、惚れた腫れたなんですかー!!」

「ツバカ！そんな浮いた話、ありやしないわよ！」

嘘である。この女、まさに恋バナをしにここにやつてきたのである。

晴れて恋太郎とつきあうことになり、幸せの絶頂にあつた真妃。

彼とイチャイチャすることに土日を費やし、迎えた平日。

相談に乗つてくれた生徒会の二人に、報告とお礼がしたい。そんな思いを胸に、生徒会室のドアをノックしたものの。

そこには白銀と石上の他に、彼女のよく知る親愛なる再従祖叔母、かぐやも着いていたのであつた。

この状況では、まともに恋バナをする気にはなれない。

ハーブティーだけいただいて、また改めて訪れることにしよう。

そう思つていたところに、千花が勢い良く現れたのだつた。

「藤原。見当違ひだ。俺たちは別に恋バナなんかしていない」

「あれれ？おつかしいですね？」

「藤原先輩のセンサーはいつもぶつ壊れてるんですよ」

「あははく石上くん。今日も絶好調ですね。この虫眼鏡あげますよ」

そう言つてレンズ側を持ち、柄の部分を石上の顔に向かつて突き出す千花。

ひよいと避ける石上。

「全く、いつもながらそんな小道具持ち出してきちゃつて。そんなんだから出遅れるんですよ」

「藤原先輩、気づいてます？第9話にして自分の名前にルビが振つてあるの。メインキャラとして恥ずべきことですよ」

「それを言うなら、かぐやさんだつて！私より後ろでルビ振られてるじゃないですか！」

「四宮先輩の名前は2話で既に出てます。ここまで描写で影も形も無かつたのは藤原先輩だけですよ。藤原先輩だ・け！」

「ムキイイイイイ!!お黙りなさい!!見てください、ここまでに並んだサブタイトルを!!」

そう言つて千花はホワイトボードに、『四条眞妃』の文字を列挙する。

「ご覧なさい！8話に渡つてズラリと並んだ四条さんの名前！そしてその後に燐然と輝く、『藤原千花』の4文字を！」

「そう言わば、これは紅白の大トリ！満を持しての絶対的守護神の登板なんですよ！！わあわあ。ぎやあぎやあ。

言い争う石上と千花を見ながら、白銀とかぐやは完全に置いてけぼり。

「一体何の話をしているんだ？」
「さあ……」

同時刻。某屋上。

「ねえ、この作品メタネタ多くない？」

『かぐ告』キヤラはこんなこと言わない

“お互いの美点を取り入れあつてこそ、異文化交流の意味があるつてもんだろう”
「ちなみに今回俺たちの出番はこれだけです☆」

再び生徒会室。

「いいでしょ……そこまで言うのなら、ゲームの時間です！」

「負けた人は、ご自身の恋バナについて洗いざらい喋つてもらいます！いいですね？！」

「いやムチャクチャだな！」

「抵抗しようとしてもそれはさせません！いきますよー、『絵を見てものを当てちゃおうゲーム』!!」

ルール説明!!!

千花が鞄から取り出したカードの束には、お絵かきのお題が書いてある。

『出題者』はその中から好きなものを選び、ホワイトボードに絵を描いて伝える。文字を使うのは禁止。

『回答者』はわかつた時点で早押しボタンを押し、何が描かれているかを当てる。

答えが当たつていればプラス1ポイント。間違えた場合は、マイナス1ポイント。

10問の合計得点で勝敗を競う、シンプルなゲームである!!

「『出題者』は、かぐやさんにお願いします！」

「『回答者』は、私、会長、石上くん、そして四条さん！」

「はああ!? 何で私まで！嫌よそんなの！」

「拒否権は与えません！さあ、席についてください！」

長机に早押しボタンを4つ並べながら、手招きする千花。

その勢いに押され、残りの面々が着席する。

「早押しボタンまで用意してあるなんて……何でもあるわね、生徒会室」
「何なら魂が宿つたチョコレートも置いてあるからな」

「その話題には深入りしないでおくわ」

そんな会話を横目に、いそいそと準備を進める千花。

お題の束をかぐやに渡すが……。

「ちよつと待て、藤原。お前が持つてきたお題を四宮に描かせたら、お前だけ有利になるんじやないか？」

「ムムツ！いいところに気がつきましたね！」

「そこは大丈夫です！こつちの束が、私が考えたお題！そしてこつちは、マツキーちゃんが考えたお題！」

「こつちを使えば不公平にはなりません！はい、かぐやさん」

カードの束を2つに分け、かぐやに渡そうとする千花だが。

それを避けてかぐやが手にしたのは、千花が『自分が考えた』と言つて脇によけた、もう一つの束だった。

「かぐやさん！どうしたんですか！」

「藤原さんのことです。どうせ渡そうとしているそつちの方が、自分で考えた束なんでしょう」

「酷い、かぐやさん！私そんなセコいことしません！」

「それじゃあ、後で楳原さんに確認してみるわね。もし嘘だつた場合、ハラを切る覚悟はできてるから」

「うう…………あうう…………うううううううううう」

赤面し、ポロポロと涙を流す千花。

それを見て、白銀は大きなため息をつく。

「全く、藤原は何回やつても姑息だな」

「え、あの娘いつもああなの？」

「いつもああです」

そんなこんなで、ゲームスタート。

第一問。

かぐやの手によつて描き出されるのは、まずオートバイのヘルメットのような、丸っこい曲線。

そこから側面に、溶接工がつけているような、顔を保護するための長方形のゴーグル

が付け足される。

ピンポーン！

「はい、石上くん」

「スペツナズヘルメット」

正解！

「一問目から随分とマニアックな……」

「四宮先輩、よく知つてましたね」

「私は実物を見たことがありますから」

「やつぱり戦闘訓練極めてらつしやる!?」

第二問。

「藤原さん。カラーペンも使つて構いませんか？」

「ええ、どうぞどうぞ！」

描かれるのは、くちばしを持ち、流線型のまつすぐとした体を二本足で支える、黒い
背中の鳥類。

かぐやが赤ペンに手を伸ばしたその時、眞妃が早押しボタンを押す。
ピンポーン！

「はい、眞妃さん」

「ペンギン！」

自信を持つて答えた、眞妃であつたが。

「残念、不正解です」

「えーっ！どこからどう見てもペンギンじゃない！何でよ！」

「確かに、ペンギンはペンギンなのですが。種類が指定されているんです」「これで不正解とするのも可哀想ですから、もう一度回答のチャンスをあげましょう。どの種類のペンギンですか？」

「つ！それは……」

「コ、コウテイペンギン！」

「ぶー。ハズレです。眞妃さん、マイナス1ポイント」

「そんなんああああ！」

頭を抱える眞妃を尻目に、お絵かきを続けるかぐや。

ひれとくちばしに、赤の差し色が描き込まれる。

「ピンポーン！」

「ジエンツーペンギン」

「正解！流石会長」

そして、ゲームは進んでいく。

「天樹院フレデリカ！」

「正解。石上くん1ポイント」

「伏見稻荷大社！」

「正解。会長に1ポイント」

「怪盗ルパン！」

「正解。また会長に1ポイント」

眞妃はペンギンで減点されたのが響き、なかなか思い切ってボタンを押すことができない。

得点を重ねていく白銀と石上。これはかぐやの計略でもあつた。

(御行さんが恋バナを洗いざらい喋るなんて、とんでもない。それだけは阻止しないと)
(それに石上くんの恋バナも、私は聞き飽きてるわ。狙うなら、眞妃さんか藤原さん)
『出題者』であるかぐやだけは、お題の傾向を選ぶことによつて、このゲームの行く末を
ある程度コントロールできる。

その結果として、9問目終了時点での得点は。

白銀、5ポイント。石上、3ポイント。眞妃、0ポイント。千花、0ポイント。

そして最終問題!!

「これはちょっと難しいですね。ホワイトボードに描くのは限界がありそうです」「ちょうどビスケッヂブックを持つっていますから、そつちに描くことにしましょう。いきますよ」

そしてかぐやが描くのは、金色の被り物をし、豊かな黒髪を携えて柔軟に微笑む、蓮の花の上に座っている女性と。

馬に乗り、恐ろしげな顔で髪を逆立てている、青みがかつた肌の四本腕の女性。
ピンポーン！

「はい、眞妃さん」

「吉祥天と、黒闇天だわ！」

「眞妃さん、大正解!!」

「えー、何ですかそれ!?難しすぎます！何で知ってるんですか!?」

「仏教における守護神で、人の幸運と不運を司ると言われている姉妹の神様よ。この前倫理の授業で習ったわ」

「そんなのわかりませんー！あーもう、何で私が最下位なんですか！」

地団駄を踏む千花に、周囲の視線が襲いかかる。

「さあ、藤原。負けた奴は、恋バナを洗いざらい喋るんだつたよな？」

「言い出しつペの法則です。包み隠さず話してもらいますよ」

「……しかたないですなー。私の恋バナ、とくと聞きなさい!!」

そう言つて、沈黙すること16秒。

「……私の恋バナ……何一つ、ありませんでした」

涙を浮かべてそう語る千花。

「藤原！ここまできておいてそれはないだろう！」

「私だつて好きでハブられてるわけじゃないんで求一!!」

「平行世界の私なら×な×の×と×な×を×たり×の×と×を×たり！めくるめく恋を
謳歌してゐるのに！」

「現実逃避してないで今世に目を向けろ！あとその言及は危なすぎる！」

その後も何か無いかと、根掘り葉掘り質問をしてみる一同だが。

この世界線の千花に、浮いた話などは一つも存在していないのだつた。

「こうなつたら、しようがない。四条。お前の番だ」

「何でそうなるのよ！」

「ここで諦めたら、今日ゲームに費やした時間が無駄になつてしまふ。虚無感を抱えて

家に帰るぐらいなら、お前の恋バナを聞かせてくれ」

「ツンデレ先輩、話したいことありそうな顔してますし。ちょうどいいんじやないですか？」

「な、な……そんなこと……そんなことあるわけ……」「

あるけど。

眞妃は眞妃で、初めて成就した恋の顛末を、誰かに話したい気持ちで満々であつた。
半年前までなら、かぐやの前でそれを開陳するなど土下座されてもごめんであつた
が。

（こ）最近のコミュニケーションにより、二人の仲もやや軟化してきている。
しばしの逡巡の後一度口を開けば、喋りたい気持ちに戸を立てることはできず。
立て板に水とばかりに、恋バナを垂れ流し続ける眞妃の姿があつた。

「それで……名前は愛城恋太郎って言つて……」

「歳は2つ下で……〇〇高等学校に通つて……」

「どこが好きなんですか？」

「そもそも一日会つた瞬間から、好きだつたんだけどお……」

「気遣いができるところとか……自分を鍛えるのに一生懸命なところとか……一度言い出したことは、絶対に貫き通す意志の強さとかあ……」

完全に雌の顔をして語る眞妃。

「素敵な人なんですね！写真とか見せて下さいよ！」

「もう、しようがないわねえ」

そう言つて、スマホを取り出す眞妃。

映された画面には、恋太郎とのツーショットが写つている。

「わあ、思ったよりフツメンさんですね！でも確かに、意志の強そうな顔をしています

！」

そう言つて、何気なく画面をスクロールする千花。

そして、表示されたのは。

「ひやああ！眞妃さん！この写真はどういうことですか！」

そこには我先にと恋太郎に抱きつく、7人の彼女達の姿が映し出されていた。

「ちょっと千花！勝手にスクロールしないでよ！」

「ごめんなさいー！でもこの写真、おかしいですよね？！皆さんどういう関係なんですか

！？」

慌ててスマホを取り返す眞妃だが、時既に遅し。

「……四条。この前相談に来た時、『一筋縄でいく恋ではない』と言つていたな？」
相談の内容を暴露する気は、白銀にはないが。この写真を見過ぎておく気もまたなかつた。

「結局、どういう関係に落ち着いたんだ」
「それは……」

悩んだ眞妃だが、結局洗いざらい吐くことにした。
いずれはバレることだと判断したためだ。

恋太郎とは両想いだつたが、羽香里と別れることもできないと言われたこと。
それどころか、恋太郎には愛する6人の女性達がいたこと。

そして自分が、『7人目』としてそこに加わるのを受け入れたこと。

その話を聞き。

かぐやと千花は、ショートした。

石上は、激昂した。

そしてじつと考え込む、白銀であつた。

「死ね死ねビ——ム！死ね死ねビ——ム！」

「ちよつと優！人の彼氏に向かつて『死ね』なんて言わないでちよつと優だい！」

「ちよつと、お花をつんできますねえ！」

「プスプスと頭から煙を出しながら、生徒会室を後にする千花。かぐやは床に突つ伏して動かない。」

「四条。お前は本当に、それでいいのか？」

真摯に問いかけるのは、白銀。

「……の関係がおかしいことぐらいは、わかってるわよ」

答える真妃。

「それでも、私は。この輪の中に、飛び込みたいと思つてしまつた」

「こうすることで、幸せにたどり着けるつて。この人たちと一緒に、幸せになりたいて」

「心からそう思つたから、こうすることにしたの」

「外野からどうこう言わせて、この気持ちが揺らぐことはないわ」

「……そうか。四条がそう言うなら、俺は何も言わないが」

扇子を開き、白銀はため息を一つ。

「さしづめ現代の光源氏といったところか。その男に、俺も一度会つてみたいものだ」

「ツンデレ先輩。傷つけられたりしたら、言つてくださいね。僕、何が何でも止めますの
で」

「二人とも」

「ありがとう。いつか、彼を紹介するわ」

嬉し涙をかすかに浮かべながら、冷めたハーブティーをする眞妃であつた。

【幕間】神様は100カノを紹介したい

マハロ――――――――――!

ジメジメした天気が続いているが、諸君は元気しておるか――――? ん? ワシ?

ワシは、恋愛の神じや!

今日は諸君に、あの『かぐや様は告らせたい』天才たちの恋愛頭脳戦』と同じヤ○グジヤ○プにて好評連載中の恋愛漫画、『君のことが大大大大大好きな100人の彼女』について紹介するぞい!

ちなみに今のヤン○ジヤン○には、上記2作品以外にも『可愛そうにね、元気くん』『久保さんは僕を許さない』『九龍ジエネリックロマンス』『少年のアビス』など、恋愛をメインテーマに据えた作品が目白押しで掲載されており。

もはや○ング○ンラブと言つても差し支えないような様相を呈しておるぞ。 つと、話題が逸れたな。それではまず、『100カノ』の作品紹介からじや。

【君のことが大大大大大好きな100人の彼女】

2020年4・5合併号より連載開始。単行本は現在2巻まで発売しておる。

『次にくるマンガ大賞2020』にもノミネートされている、期待の作品じや。

人がこの世に生まれた時に定められる最高の恋愛。パートナー、『運命の人』。

本来なら、それは一人の人間に對して一人までしか定められないはずなんじやが。

ワシのミスのせいで、主人公である愛城恋太郎の運命の人は二桁多い『100人』に設定されてしまったのじや。メンゴメンゴ。

運命の人同士が出会うと全身にビビーンと衝撃が走り、たちまちお互いのことが好きで好きでたまらなくなる。

それは最高に幸運なことなのじやが、その分そこに一生分の『運気』を費やしてしまふのでな。

その幸運を逃してしまえば、必然的に不幸な運命しか残されなくなる。つまり、近いうちなんやかんや不幸な目にあつた後死ぬということじや。

そんな現実を知らされた恋太郎は、運命の人を救うため、そして何より純粹に愛する女を幸せにするため、DEAD OR LOVEの百股生活を送ることを決意するの

じや。

とは言え、今のところ作中に『DEAD』の要素はほとんど出てきておらん。むしろ『GAG AND LOVE』といった感じで、直球で濃厚なラブ要素と畳みかけるようなボケが特徴的な、頭を空っぽにして読める恋愛ギャグ漫画と評するのが正しい。

体感で2ページに1回はボケておるぞ。また、メタネタが多く挟まれているのも作風のうちじやな。

『かぐや様』の読者ならば、ヤ○ジャン本誌でついでに追えばこの漫画は実質無料。恋愛漫画とギャグ漫画が好きな諸君は、今すぐお近くの書店にゴー！じや！

と、宣伝を挟んだところで、キャラ紹介に移るぞい。

過剰なネタバレは避けたいところじやが、こんな二次創作を書いている以上はあまり気にしそぎても仕方がないのう。

本当に重要な部分は避けてキャラ造形を説明するので、それでもいいという人のみ読み進めて欲しい。

初見の感覚を大事にしたいという方は、ここで画面を閉じて今すぐお近くの書店にゴー！じや！

【愛城恋太郎】
あいじょうれんたろう

本作の主人公。特に特徴のない短髪と太めの眉毛、綺麗な瞳が印象的な、高校1年生の男子じや。

中学卒業までに実に100回の失恋を経験し、未だ恋愛経験はゼロ。

そんな悲運に見舞われていたのは、彼には高校で100人の『運命の人』に出会うという特大の幸運が待っていたからじや。

友人曰く、『顔は悪くなく運動も勉強もできる方、誰にでも親切で気が利き、男女問わず人望があり真面目なのに気さくで接しやすい』。

作品が進むうちに、二股をかけながらも精一杯誠実であろうとしたり、本当に命を賭けて彼女を守つたりする姿を見ることができる。

あの伝説の男、リトさんにも勝るとも劣らないポテンシャルを秘めていると思われる大器。それが愛城恋太郎という男じや。

それでは次に、ヒロインの紹介に移るぞい。

【花園羽香里】
はなそのはかり

恋太郎の、記念すべき運命の相手第一号じや。もみあげの長いミディアムショートのピンク髪に、白い花をあしらつた髪飾りが特徴的。

ボン・キュー・ボンの爆弾ボディを持ち、そのバストの感触はふわふわでもちもち、『大福と人間の合成獸』^{キメラ}と評されるほど。

おつとりした雰囲気ではあるが、その実策士であるところを何度も垣間見せており、様々な計略を仕掛けては自爆する姿を楽しめるのじや。

3巻に収録予定のエピソードにて、大金持の家の子であることが発覚。

四大財閥の一つというのはこの二次創作のオリジナル設定じやが、そうであつてもおかしくないような豪邸描写がなされておるぞい。

【院田唐音】

花園羽香里にタツチの差で告白第一号の座を譲った、ツンデレ娘。

腰まで伸びる金糸のツインテールを持つ、スレンダーな体型をしたザ・美少女じや。ことあるごとに『「なんかじやないんだからね』と意地を張り、本音を隠しているようで誰より本音がダダ漏れ状態。

素直ではないが決して嫌な奴というわけではなく、他人を思いやれる気持ちに溢れて

いたり、羞恥心に震えるところを見させてくれたりと、ギャップが好きな人にはたまらん造形となつておるぞ。

なお今のところ唯一の明確なツツコミキャラであり、着々と増えていく彼女陣が巻き起こすトラブルの渦中でそろそろ過労死するのではないかと作者からは心配されておる。

個人的に2020年女性キャラベストネーミング賞を贈りたい一人じやな。

【好本静】 よしもとしづか

少し癖のついた黒のロングヘアと、低身長が特徴的な小動物系の図書委員。

気が小さく、何と自分の口で言葉を発することができないのじや。

代わりに本やスマホのアプリを使い、愛読書である『王冠恋物語』の中から該当するセリフを引用して自分の意思を示す、変わった娘じやぞい。

説明が短くなつてしまふが、正直上記の要素だけで十分にキャラは立つておる。現時点での作者の推しキャラであり、本編での活躍が楽しみじや。

【栄逢凪乃】 えいあいなの

銀色ストレートのロングヘアに黒タイツ、高身長のシルエットが美しい、作中きつて

のクールビューティーじや。

校内模試は全教科満点であり、正体はA-Iと噂されており。そんな模試の結果を見に行くのすら『行くだけ時間の無駄』と切り捨てる彼女は、徹底した効率主義者。

『楽しい』ことに価値を見出せず、自分の将来を向上させるものだけに全ての時間を費やしてきたわけじやが、恋太郎と出会つて大きく人生観が変わるぞい。

貴重なツツコミ要員でもあるが、見るもの全てにツツコまなければ気が済まない唐音とは違い、彼女が口を挟むのは最低限のこと。唐音の負担は減らんのう。

彼女と秀知院学園の天才達、いつたいどちらが知力が上なのかは作者も気になつているところじや。

〔薬膳楠莉
やくせんくすり〕

作中きつての便利キャラ。その風貌にはネタバレ要素が含まれるので、ここでは伏せよう。

化学部部長であり、前述の4人とは違つて3年生。

ドラえもんレベルの薬を連発するが、その副作用もなかなか強烈。薬のせいでの周囲に迷惑をかけてきたトラウマを持つてゐるぞい。

展開に困つたら楠莉に頼めば、おそらくだいたいの事態は解決する。

作劇上便利この上ない存在ではあるが、乱発すると(ご)都合展開になつてしまふので、用法用量に注意して正しく取り扱つていきたいところじや。

【花園羽々里】

はなそのははり
単行本未収録の範囲にて初登場する、羽香里の母親じや。

彼女が登場する3巻に収録予定のエピソードは、今のところ○ンジヤンアブリで全話無料で読むことができる。

購入するか迷つてゐる読者の方は、まずはそれを読んでみて決めるのもいいと思うぞい。

羽香里をさらにパワーアップさせたような爆弾ボディの持ち主で、高貴さを感じさせる縦ロールの髪に花の飾りがあしらわれている点は娘と同じ。

29歳にして15歳の娘を持つ未亡人という設定じやが、その裏には悲恋が隠されておる。

五股男に引っかかつた娘の目を覚ますため、強引なやり方で仲を引き裂こうとするが、結果として六股目をかけられることになるぞい。

学校でのシーンにどう絡ませるのかと思つていたら、理事長として乗り込んでくる斜

め上の回答が用意されておつた。

何食わぬ顔で屋上コントに混ざる姿は、立派な恋太郎の恋人の一員じゃ。

と、ここまででヒロイン紹介は終了じゃ！

実は7月9日発売の最新号にて、100カノ7人目のヒロインが追加されているのじやが。

最速でネタバレするのもどうかと思うし、今日の所はここまでにしておくのじや。新ヒロインの扱いをどうするかじやが、極力物語には巻き込んでいきたいと作者は思つてるので、恐らく適当なタイミングでしつと混ざることになると思うぞい。

それでは最後に、皆さんお待ちかね！

恋愛の神であるこのワシの、手に汗握り額に珠光る、驚きと感動に満ちた大スペクタクルエピソードを――

“はーいおつかれさまでーす”
“てつしゅー、てつしゅーー”

コ、コラ待て!!ワシの!!ワシの出番はどこじゃ!!

第1話以降登場0コマじやぞ! もうちよつとワシに見せ場をよこせ!! 崇めろ! 敬え
! 奉れ!!

これだから信仰心の足りない現代人は……! 全員千と千尋を見ろ!! 千と千尋を——
ブツリ。映像はここで途切れている。

【第10話】愛城恋太郎は鍛えたい①

「シルバーマンジム無料体験入会券？」

ある土曜日。花園邸休憩室にて静と楠莉の頭を膝の上に乗せながら、恋太郎はそう聞き返していた。

「そうなのよ。このご時世で、ジムもだいぶ客足が減っちゃつてるらしくって」「私としては、無料である必要は別に無いのだけれど。ほら、こういうのつてつきあいでもあるじゃない？」

そう答えるのは、屋敷の主である羽々里。豪奢な椅子に身を沈ませ、メイドの淹れたコーヒーを優雅に味わいながらチケットを恋太郎に見せる。

「恋太郎ちゃん、体を鍛えようと頑張つていたでしよう？ 無料体験できるのは4回までみたいだけど、行つてみたら得られるものがあるんじやないかしら」

「確かに、シルバーマンジムといえば業界最大手のジム。正しいトレーニング方法を教えてもらえば、今後のプラスに——」

ピピピピッ。ピピピピッ。

タイマーが鳴り響く。

「はい、10分経過！ 次は私たちの番なんだからねっ！」

「えー、もう10分経ったのだー？」

『楽しい時間ほど早く過ぎ去るというのはまつこと本当のことじやのう』
「ほら、代わって代わって。私たちだつて首を長くして待つてたんだから」

そう言つてポジションを入れ替わるのは、唐音と真妃。

本日のイチャイチャのお題は膝枕であつたが、一度にしてもらうのは一人が限界。

10分交代で愛でてもらうことには決めた彼女達は、お行儀良く列を作つてゐるのだった。羽香里と凪乃は正座でスタンバつてゐる。

(さて、私の番だけど……どうやつて右膝をいただこうかしら)

膝枕というのは、ただ膝を貸してもらうだけのイベントではない。

頭をナデナデしてもらうのは必然の流れ。そしてその時は当然、利き腕である右側にいる者の方が有利！

「唐音。好きな方の膝を選んでいいわよ」

(こう言えば、素直じゃない唐音は必ず行きたいのとは逆の方の膝を選ぶはず)
「べ、別に私は利き腕側に寝たいわけじゃないんだからね！」

(計画通り……って、はれえ!?)

そこには、しつかりと恋太郎の右膝に頭を擦りつける唐音の姿があつた。

「ちよつと! 言行不一致が早すぎるわよ!」

「な、何のことかわからなーい! そう私は、『右も左もわからない』小娘!!」

『一の小さな嘘を隠すためには、百の大きな嘘が必要になるのであつた』
「か、唐音? ほら、私は左利きであなたは右利きでしよう? 私が右側をもらつた方が合理的じやないかしら」

「なるほど……って、逆! 逆! 左利きが右に行つたら普通かち合つちゃうでしょ?」

「ほら、『右も左もわからない』なんて大嘘じやない! そんな悪い子は私に右側を譲りなさい!」

「お二人とも、もう2分経ちますけどいいんですか?」

羽香里の指摘に我に返り、結局ジャンケンで左右を決定する二人。

眞妃の勝ち。

「やつたあ! ぐふふふふ……」

「そんなあ! 真妃! 次の番は私が右側なんだからね!」

100点満点の笑顔で頭を撫でてもらう眞妃と、一抹の不満を浮かべながら頬を撫でられる唐音。

二人を優しく愛でながら、恋太郎は話を本筋に戻す。

「そのチケット、ありがとうございます。早速明日にでも行つてこようと思ひます」

「恋太郎が行くなら、楠莉も行きたいのだー！」

「私も」

「私も」

「私も！」

“某も”
それがし

「恋太郎は忙しい。できるだけ一緒に時間を過ごした方が効率的」

「みんな、そう言い出すと思つたから」

「安心しなさい。人数分もらつておいたわよ」

「お母様……♡」

「わーいなのだ！」

「私は明日用事があるから、同行はできないけれど。せつかく無料なんだから、めいっぱ

い楽しんでいらっしゃい！」

——
翌日。シルバーマンジム。

各々スポーツウェアに着替え、更衣室出口に集合する恋太郎一行。

「皆集まつたな。それじゃあ、行こうか。案内係の人が待ってるらしいけど……ゾロゾロとトレーニングルームを目指す7人の前に現れたのは、青いジャージを来た爽やかな修身の青年。

「君たちが、残りの無料体験希望の子だね？」

「初めまして。シルバーマンジムのトレーナーの街雄です」

「わからないことがあつたら、何でも聞いてくださいね！」

ニッコリと笑いながら自己紹介を済ませる、街雄鳴造まちおなるぞう。

その笑顔と物腰の柔らかさに釣られる若い女性も多いだろう。

そんなことを考えながら、恋太郎は問いかける。

「残りの、つてことは、俺たちの他にも体験希望者がいるんですか？」

「ああ、今日は千客万来でね。あと2人、高校生の女の子が来てているよ」

そう言って、トレーニングルームの入り口の方向を指さす街雄。

そこには唐音によく似た髪型をした、ややぼつちやり体型な女子が立つており。

隣では、黒髪ストレートにパツツン前髪の、いかにもお嬢様然とした女子が……喘いでいた。

「はち切れそうな大胸筋……♡」

「山みたいな僧帽筋……♡♡」

「ヨロイみたいな大腿四頭筋……♡♡♡」

「あああああ……♡♡♡イイ……♡♡♡♡♡」

その様子を見て、唐音似の女子高生はドン引きしている。

「紗倉さん、奏流院さん！お待たせしました。今日の体験者が揃つたので、行きましょ

う

「は、はーい！ほら奏流院、呼ばれてるよ！」

我に返り、街雄たちの方へ近づいてくる二人。

そんな彼女らが歩いてくるのを待つ、恋太郎一行。

その距離は近づき。そして。

ビビーン！

と、くるかと思つたら、こなかつた。

(アレ?)

「今日は、この9人で一緒にトレーニングを体験してもらうよ」

「全員高校生だし、まずは自己紹介をしてもらおうか！」

「初めまして！私は紗倉ひびき！皇桜女学院に通う2年生だ！」

「私は、奏流院朱美。紗倉さんとは同級生よ」

「初めまして。愛城恋太郎です。○○高等学校1年生です」

「花園羽香里です」

「院田唐音よ」

『シズカと呼んでくださいまし』

「榮逢凪乃」

「葉膳楠莉、3年生なのだ！」

「四条真妃。秀知院学園3年生よ」

(男子1人に、女子が6人。これがハーレムつてやつか。どの娘が本命なんだろう)
「あなた達も、自分を鍛えるためにこのジムの門を叩いたのね。健全な魂は、健全な肉体に宿るもの。健康で文化的な生活のために、お互い頑張りましょう！」

ジト目で見てくるひびきと、目を輝かせ、鼻息を荒くする朱美を見ながら、先ほどの感覚を思い返して考え込む恋太郎。

「それじゃあ、トレーニングマシンを紹介するよ！みんな、こっちに来てください！」

移動を始める一同だが、恋太郎は考え方をして動かない。

「恋太郎？ どうしたの？」

「！ ああ、ごめんなさい！ ちょっとさつき、不思議な感覺に襲われて」

「不思議な感覺？ ……まさか、またビビ——ンつてきたの？」

「いや、それに近いんですけど。ビビーンつてきそうになつて、キヤンセルされるような感覺があつたんです」

あれは一体、何だつたんだろう。思案する恋太郎に、凧乃が意見する。

「……わかつた。これはきっと、作者の狡猾な陰謀」

「どういうことだ、凧乃？」

「せつかく別漫画のヒロインが登場したのだから、運命の人として巻き込みたい気持ちは山々」

「でもこの作品は、作者にとつて処女作。風呂敷を広げすぎた時に、まとめきれる自信はない」

「それに、原作が『かぐや様』という主題からもズレてしまう」

「そこで、意味深なビビーンキヤンセルでフラグだけ立てておいて、来たるべき100力ノアニメ化のタイミングに合わせてリメイクすれば」

「効率的に読者を獲得することができる……！」

目を見開く恋太郎一行。

「クソッ、何てことだ！ 悪魔的！ まさに鬼畜の所業！ よくもそんなことを考えついたな！」

「いやそこまで言われるほどかしら」

「このフェミニズム全盛の時代に、100カノがアニメ化できるかどうかは懐疑的ですが」

“伏線つてのは、適当に蒔いておくだけでいいのさ。拾うかどうかは俺の勝手、つてな”

「……あのー。そろそろ本題を進めていいですか？」

困り顔を浮かべる街雄。

「あつ、ごめんなさい！ さあみんな、行こうか！」

汗をかきながら、小走りにトレーニングルームの入り口をくぐる一同であつた。

【第11話】愛城恋太郎は鍛えたい②

「それじゃあまずは、体を温めましょう。そこのランニングマシンに乗つてください」「8分間、軽く走つてもらいます。無理をせずに、少し息が切れる程度の速度を保つてくださいね」

「付属のイヤホンを繋げば、好きな音楽を聴きながら走ることもできますよ」
指示に従い、ウォーミングアップをする一同。

「体が温まつたら、こつちに来て。このビデオを見ながら、準備体操をしましよう」「筋肉の調子を整えるのが目的ですから、無理に伸ばしすぎる必要はありません」

「気持ちよく体が伸びているを感じる程度にしてくださいね」

映像の通りに、アップドッグ、ダイナミックチェストストレッチ、ニーアクセスなどを行つていく。

「もう既に結構きついわね」

「今日が初めてだと、一つ一つの動きがきつく感じるはずです。トレーニング本番も含めて、決して無理はしないでくださいね」

「それでは、マシンを使つていきましょう」

「鍛える部位を決めるためには、目的を意識することが必要です」

「野球がやりたいのか、サッカーがやりたいのか。力を強くしたいのか、足が速くなりたいのか」

「鍛え方を間違えると、鍛える前よりかえつて体の動きが悪くなってしまう場合もあります」

「例えば、愛城くん。君は何のために体を鍛えたいのかな?」

「俺は」

「何か、上達したいスポーツがあるわけではありません」

「ただ、大切な人を守れるようになるために」

「そのために、力が欲しい。そう思つて、体を鍛えることにしました」

(素敵……)

(かつこいいなあ)

(イケメンすぎんのよ)

(抱いて欲しいのだ)

(好き)

(びしょびしょ)

(何だコイツ。アツいなあ)

(なかなか見込みのある筋肉ね……♡)

「私は、恋太郎君のメニューについていけばそれでいいです」

「『「私も！」』』』』

口を揃える恋太郎ファミリー。

「わかりました。紗倉さんと、奏流院さんは?」

「私は、効率よく体重を落とせたら嬉しいかなって」

「私は健康的に暮らせるなら何でもいいです」

「オーケー！ それじゃあ今日は、下半身と背中のトレーニングをしましよう」

「筋トレは、大きい筋肉から手をつけていくのが基本です。下半身を鍛えれば、全身のバランスが良くなりますし」

「背中を鍛えれば、姿勢の改善やヒツティングマッスルの増強に繋がります。大きい筋

肉から鍛えれば、代謝も良くなりますよ」

「よろしくお願ひします！」

まうちおつのつき・ん・に・く・こゝうゞゞゞ

「ハイ！まずはレッグプレスマシンの使い方から。シートに腰掛けて、背中を背もたれにしつかりとつけてください。お尻が浮かないよう気をつけて」

「両足を、足下の板、プラットフォームにつけて。膝の角度は90度より小さくならないよう。太ももとプラットフォームが平行になるように、背もたれの位置を調節します」

「この位置の具合が一番大事なので、しつかりと調節してくださいね」「準備はできましたか？」

「これから、プラットフォームを足で押して、元に戻す動作を繰り返してもらいます」「ゆっくりと限界まで押したら、3秒間静止してからゆっくりと元に戻します。押す時は、膝がピンと伸びきらない程度にしてください」

「ウエイトは、20回繰り返して限界が来るような重さに設定するのがミソです。今日は初回ですから、軽めから始めて、手探りで重さを設定していきましょう」

「2、3回動いて軽すぎたり重すぎると感じたら、ウエイトを調整しましょう」

「押す時に息を吐いて、戻す時に吸うよう意識してください。それでは、スタート！」

「説明通りに、マシンを使つて下半身を鍛えていく面々。

「やつぱり……結構、きついわね！」

「レッグプレスで鍛えられる筋肉は、主に大臀筋、ハムストリング、大腿四頭筋、内転筋

です」

「お尻から太ももにかけての筋肉が、しつかり動いているのを意識しましよう。意識してやることによって、より効果的に筋肉を鍛えることができますよ」

各自マシンを動かしながらウエイトを調節し、最適な重さを試行錯誤する。

20回やりきった結果、それぞれのウエイトは。

恋太郎、105kg。羽香里、25kg。唐音、100kg。静、10kg。凧乃、35kg。楠莉、15kg。眞妃、30kg。ひびき、35kg。朱美、70kg。

「すごいすごい！初めてで100kgを超えるウエイトで20回できるのは、かなり体力がある証拠だよ！」

「一応、家で鍛えてますから」

「その褒め言葉、私に刺さるんだけど」

「院田さん、凄いわ！以前からトレーニングしている私よりも上だなんて！マツスルクイーンの才能があるわよ！」

「全然嬉しくない！」

「でも、これはウエイトの重さを競う競技ではないからね」

「自分に合った強度で根気強く続けて、次第に上げていくのが大事なんだ」

「それじゃあ、1分休憩してもう1セツト。今日は2セツトやつたら、背中のトレーニン

グに移るよ!」

「ハイ。これが背中を鍛えるマシン、ラットプルマシンだよ!」

「このトレーニングで鍛えられるのは主に、広背筋、僧帽筋、上腕三頭筋。背中から二の腕の後ろ側にかけてだね」

「今日教えるのは、フロントラットプルダウン。まず椅子に座つたら、両手でバーを持つ。この時、手は肩幅より少し広めにすること」

「胸を張り、背中は反らして上半身をやや後ろに傾ける。この姿勢が一番大事だよ!」

「それから、息を吐きながらバーを胸に向かって、ゆっくりと引き下ろしてくる」

「肩甲骨を寄せるよう意識して、肘は肋骨につけるよう、閉じるような軌道で動かすんだ」

「首の付け根の少し下まで引っ張つたら、素早くバーを元の位置に戻す。この時に息を吸うんだよ」

「ウエイトは、15回で限界が来る程度に設定しよう!全部で3セット行うよ!それじゃあ、スタート!」

「ここでも恋太郎に迫るウエイトの設定を見せる、唐音。

そんな彼女に、朱美は熱い視線を送る。

優れた筋肉を持つ者ならば、男女問わず大好物なのだ。

「院田さん……是非一度一緒に、お茶でも……我が家でじっくり、しつぽりと……お話をしませんか……？」

「身の危険を感じる！遠慮しておくわ！」

そんなこんなで、トレーニング終了。

「街雄さん、今日はありがとうございました！やつぱりマシンを使えると、鍛えられたなあつて感覚が全然違いますね」

「自重を使つたトレーニングもいいけど、どうしても余計なところに力が入つてしまうからね。効率良く筋肉を鍛えるなら、マシントレーニングだよ！」

「その他にジムならではのプログラムとして、うちではダンス教室もやつてているよ！」

「曜日ごとにテーマが違うから、興味のあるものを体験してみるといいよ。今日はエアロビクスの日だね」

「そうなんですね！せつかだから、今日参加させてもらいましょうか」

「おつと、それはやめておいた方がいい。今は筋肉に負荷をかけて、繊維を引き裂いた状態だからね」

「しっかりと休ませて、回復してやることが肝要なんだ。ダンスはまた別の日に、再度挑

戦すれば……」

「そう、再度挑戦……再度……サイド……」

バリバリバリ。音を立てて裂けていく、彼の衣服。

「はい!! サイドチエストオー!!」

弾け飛ぶジャージ！ 隆起する筋肉！

痩身の爽やかイケメンは眼前から消え去り、合成写真みたいなゴリマッチョボディの持ち主がそこには立っていた!!

「何だコレ!? 楠莉、何か変な薬でも飲ませたか!?」

「酷いのだ！ 何でもかんでも楠莉のせいにしないで欲しいのだ！」

「素敵……♡ 眼福すぎてイツちやいそう……♡」

絶頂に達する朱美であつた。

「まあ、今日はダンスをしないにしても、見学だけはしておいてもいいかもしれないね」「こつちがダンスルームだよ！ ちょうど今から、休憩時間に入るみたいだけど」

そう説明する街雄の前で、部屋の扉が開かれる。

中から出てきたのは、長い黒髪を軽くまとめた、漫画に出てくるような大きな丸眼鏡をかけた少女であつた。

「大仏さん！お疲れ様。今日の調子はどうだい？」

「街雄さん、お疲れ様です。無料体験キャンペーンのおかげか、まあまあの客入りですね。あと、暑苦しいので服を着てもらえませんか？」

「これは手厳しい」

そんな彼女を見て、眞妃が声をかける。

「あら、アンタ。大仏、だつたつけ？こんな所で何をしているの？」

「四条先輩。奇遇ですね」

「私、ここで臨時のアルバイトをしているんです。無料キャンペーン中で人手が足りなかつたのに便乗したんですけど」

そう答える大仏。額にはしつとりと汗が浮かんでいる。

「そうだつたの。正直、アンタに運動できるイメージなかつたけど。ちよつと意外ね」「実を言うと、筋トレは苦手なんですけど。こう見えて、歌とダンスはちよつとかじつていましたから。多少教えられるぐらいにはできますよ」

「眞妃さん。知り合いの方ですか？」

「ええ、私と同じ学校の1年後輩で、風紀委員の……」
 「大仏おさらぎこばちです。大仏と書いて、おさらぎと読みます。是非覚えてくださいね」

恋太郎一行に向かって、軽く頭を下げるこばち。

「大仏、こばち……？」

顎に手を当てて、何かを思い出そうとする羽香里。

「羽香里、知り合いか？」

「ああいえ、そういうわけでは。少し聞き覚えのある名前だと思つたんですけど
 思い過ごしか。でも、そんなに良くある名字ではないし。
 考えている間に、話題が先へ進む。

「でも、風紀委員がアルバイトしてて良いの？」

「校則には違反してませんから。ウチ、ちょっと今家計が苦しいんですね」

「彼らも今日、無料体験入会券を使って筋トレをしに来たんだ。あと3回分残っている
 はずだよ」

「そうちつたんですか。ダンスも楽しいですから、是非キャンペーン中に体験に来てく
 ださいね」

愛想笑いを浮かべるこばちだが、その目元はレンズに隠され、恋太郎たちからはよく

見えない。

「それじゃあ、次の時間もあるので私はこの辺で。四条先輩もお疲れ様です」

「ええ、お疲れ様。頑張つてね、大仏」

そんな会話を交わし、適当にエアロビを見学してから、その場を後にする一同。

帰りに受付で週間スケジュールを確認し、次はどの曜日に来ようかなと考えながら、それぞれ家路につくのであつた。

なお翌日、初めてのトレーニングを終えた彼女達の体を激烈な筋肉痛が襲つたことは言うまでもない。

【第12話】大仏こばちと運命の出会い

「いいですか？ヒップホップダンスの基本は、アップとダウンの動きです」

「このように、リズムに合わせて、膝を曲げ伸ばしして、体を上下させる。同時に背中を丸めたり伸ばしたりして、全身を協調させるようになります」

実演して見せながら、アップとダウンについて解説するこばち。

「リズムの表で、体を伸ばすのがアップ。リズムの表で、体を沈ませるのがダウン」

「前者は軽やかなイメージを、後者は重々しいイメージを観客に与えます」

「この基本の動きを、色々なパターンと組み合わせられるように。足を開いた状態、閉じた状態、片足ずつ、前後に歩きながら、左右に歩きながら」

「それぞれ何も意識せずに、スムーズにこなせるようになるのが目標となります」

「結構難しいわね。それに、見た目はかなり地味だわ」

こばちの真似をしながら、感想を述べる唐音。

足腰にまだ残る筋肉痛を感じつつも、体をリズミカルに動かしていく。

今日も恋太郎一行は、放課後を使ってシルバーマンジムを訪れていた。

眞妃はボランティア部の活動のため、羽々里は仕事の都合のため欠席。
それ以外の6人で、こばちが講師を務めるヒップホップダンスのレッスンを体験して
いたのだ。

「地味な動きですが、基本というのは何より大切なものです」

「それに、初めのうちはこれだけの動きでもなかなか楽しめると思っています」

「重心は、つま先にかけるよう意識して。それから足だけではなく、体幹から骨盤を意識
して体重移動をするよう心がけます」

「体重は下半身にしつかりと乗せながら、動きは軽やかに。これがヒップホップの重心
の基本です」

「それでは次に、アイソレーションを教えますね」

「アイソレーションとは、体の一部分だけを独立させて動かすことです」

「まず、首。次に、肩。それから、胸。そして、腰。リズムをとつて、前、左、後ろ、右
と、順々に動かしていきます」

そう説明し、カウントを数えながらこばちは実演する。

上から順に、まるで別の生き物のように動く彼女の頭部、胸部、腰部。

「各部位のアイソレーションを極めれば、このように滑らかなボディウエーブが可能に

なります」

そして全身をうねらせて見せる。

「すごいのだ——まるでエチゼンクラゲみたいなのだ！」

「それはたぶん褒めてない」

「いてて。ちょっと筋を違えかけたかも。それに、滑らかなウェーブにはほど遠いなあ」

「アイソレーションは、一朝一夕で上達するものではありません。時間をかけて、根気よく可動域を広げていくことが必要です」

「上達したいと思ったら、是非本レッスンの定期受講をお願いいたします」

宣伝を挟みながら、次の話題へと進むこばち。

「次は、ロッキング。静と動の緩急の極致です」

「ワン、ツー、スリーエンド、ロック。このロックの部分を綺麗にキメるのが重要です」
腕をくるくると回しながら、胴体の前でピタッと止めてみせる。

「大仏さんは、本当にすごいなあ。ちょっとかじつてるどころか、プロ級の腕に見えます」

「そんなことはありません。……昔取った杵柄ってやつです」

謙遜するこばちだが、その実自身のダンスのレベルには自信があつた。

シルバーマンジムでは、基本的に高校生のアルバイトは雇っていない。

それにも関わらずこばちが働けているのは、ちょっとしたコネと、華々しい経歴と、卓越したダンスの実力あってのことだつた。

「解説は一通り終了です。それでは私がカウントをとりますから、教えた動きをどんどんこなしていきましょう」

手拍子をしながら声を上げるこばちを見て、恋太郎は考える。

（それにしても、あの眼鏡はいったいどうなつてているんだろう）

こばちの眼鏡は眉毛のすぐ下から頬部までを覆い隠し、その目元は全くうかがい知ることができない。

「あれはきっと、ミラーレンズ」

心を読んだかのように、凧乃が呟く。

「ミラーレンズ？」

「ミラーレンズは、レンズ表面を鏡のように反射加工した、ファッショニ性の高いレンズである。強い光線を遮る効果も併せ持つ」

「wikiみたいな解説ありがとう」

だから目元が見えないんだな。そう納得し、恋太郎は体を動かし続けた。

「一通り、体験できましたね。それでは、音楽に合わせて実際の振り付けを踊つてみましよう」

「まずは私が見本を見せますから、それを見てできるだけ覚えるようにしてくださいね。そう長い振り付けではないですから」

そう言つて、音楽を準備し、眼鏡をケースにしまつて、皆の前に立つこばち。

(わああ……!)

(何て綺麗な人)

現れたのは、羽香里の可憐さ、唐音の可愛さ、凪乃の美しさを全て兼ね備えたような、絶世の美女。

ヤン○ジャンプ始まつて以来の美少女と評される、大仏こばちの素顔であつた。それを目の当たりにした羽香里は、ハツと気づいた。

(……この美貌。やつぱり)

(4年前、弱冠13歳にしてグループ『プラチナメイデン』のセンターを飾つておきながら、親のスキャンダル発覚に伴いわずか1ヶ月で芸能界から姿を消した、伝説のジュニ

アイドル

(あの、大仏こばちだわ!!)

(お母様の会社からも散々手を尽くして口説いたのに、結局二度と復帰することはなかつた)

私たち、何て幸運なんでしょう！こんな大物から直接ダンスを教わるなんて！）興奮する羽香里たちの前で、こばちは淡々と振り付けをこなしていく。

アツブ、ダウン。スリーエンド、ロツク。

四肢を自由自在に操り、ボディウエーブから華麗にターンを決めていき……。

見守る恋太郎と、振り返るこばちの、目と目が、合わさつた。

ビビン!!

そしてこばちは、全身に迸る情熱を自覚した！

(何!? この感覚……!)

そんな感覺を、彼女は未だ知らなかつた。

強いて言えば近いのは、遠い昔、石上に対して抱きかけた甘い感情。しかし明らかに違つたのは、雨となつて激しくその五体を貫く確信の矢！

そうそれはまるで、俗に言う『一目惚れ』――

そんな衝撃につられて、彼女のダンスには熱が入っていく。

(どうしよう。本来このダンスは、こんなに情熱的な感情を込めるものではないのに)

元来、ヒップホップの意味する概念の幅は広い。

1970年代、アメリカ人のコミュニティの中で行われていたブロック・パーティに起源を辿ることができるこのジャンル。

ストリートギャングの抗争の無血的解決のためにも一役買つていたとされるそれは、滾る感情を全身を使って表現することに使われる。

しかしながら、今こばちの脳内から五体を通つて迸る激しい恋情は、ヒップホップのカバーする範囲とは趣を異にしていた。

それはまるで、男女の激しい交歓を表す、パンドブレのような。

振り付けをこなしながら、こばちは自分とシンクロして踊る恋太郎の姿を幻視する。

私を支配して、乗りこなして欲しい。そんな願望を抱きつつ、途中で止めるつもりだつた音楽の箇所を大幅に超過して、こぼちは踊り続ける。

その目にはもう、彼のことしか映つていない。

自然と、四肢に力が入る。

前後、左右へ髪を振り乱し、意味深に腰を突き出したかと思えば、今度は唇を少し尖らせ、笑みを浮かべて上半身をなぞつてみせる。

ゆらりと数周回転しては、顔を隠し、また覗かせ、ワインクを一つ。目を惹かれて離せない、不思議な男へのシグナルを発する。

彼は私のこの視線に、気づいてくれているかしら。

そんなことを考えて息を切らせる彼女の火照った肢体から汗が飛び散り、飛沫しぶきとなつて辺りを覆う。

乱れ舞う手が、しなやかな指先が、跳ね上がる脚が、揺れる胸が、弓なりに反る背が、細かく震える腰が、妖しく光る表情が、彼女の持つ“女”的”全ての部分を強調し、観る者の劣情を煽つていく。

見て。私を、もつと見て。

音楽が、山場を迎える。

神秘的な異国のライムを口ずさみ、全身全霊の激情と欲情を隠すことなく振りまきつつ、こばちの動きがさらに加速する。

本来の振り付けからは大きく逸れ、多分に織り交ぜたアドリブで心の全てを表現しながら、現世のものとは思えぬ美貌の持ち主は、ハーレムの王に向かつて求愛のダンスを贈り続ける。

そんな彼女の見せる熱情に、恋太郎は、その場にいる一同の目は、釘付けとなり——

結局彼女がその動きを止めたのは、4分34秒後のことであつた。

「あ、愛城くん！」

ヒップホップレッスンの1コマが終わり、男子更衣室へ向かおうとしていた恋太郎を、こばちが呼び止める。

次のレッスンまでの間の、短い休み時間。この間に、何とかして彼とのコネクションを取りつけなければならない。

そう決意したこばちは、別の日のレッスンに恋太郎を誘う。

「明後日も私、勤務が入ってるんだけど！その日は、社交ダンスを教える予定でね！」

「社交ダンスを教わるジムって、結構貴重だから！もし、愛城くんの都合さえ良けれ

ば、また受けに来て欲しいなつて」

恋太郎に残された無料体験の機会は、残り2回。

もしそれを筋トレに費やされてしまえば、こばちと恋太郎との接点は無くなつてしまふ。

そうなる前に、もう一度ダンスレッスンに来て欲しい。

こばちの願いは、恋太郎にしつかりと届いた。

「わかりました。社交ダンスなんて初めての経験ですし、とてもワクワクします」

「誘つてくださつて、ありがとうございます。楽しみにしていますね。それでは、また明日日に」

そう言い残し、更衣室へと消えていく恋太郎のたくましい背中を目で追いつつ、歓喜

するこばち。

(やつたあ!)

今後彼の心を、どうやつて籠絡してやろうか。

そんな策謀を張り巡らせながら、足取り軽く次のレッスンへと向かうのであった。

【第13話】大仏こばちは誘いたい

「私ね。この土曜日、誕生日なの」

恋太郎と体を密着させながら、そう耳打ちするこばち。

「そうなんですか！おめでとうございます」

「それですね。もし良ければ、一緒に行きたい場所があるんだけど……」

言葉を続け、彼の手にそつと紙片を握らせる。

「これ、私の連絡先。詳しくは、バイトが終わった後で相談しましょう」

「とりあえず、一言だけ送信しておいて。終わったら、私から返信を送るから。待つてて

ね」

そう告げると同時に、ホールドが解かれる。

恋太郎から離れ、こばちは次のパートナーの元へ向かうのだつた。

「あなた達！準備はよろしいかしら——!?」

「レツツエンジョイ！競技ダンスよ!!」

6月4日、木曜日。シルバーマンジム、ダンスルームにて。

異様に伸びた背すじと発達しきつた体躯もさることながら、それ以上に目を引く大きなアフロヘアとタラコ唇の持ち主が、壁に張り巡らされた鏡の前に立っていた。

胸元のはだけたトップスからは見事な大胸筋が顔を覗かせており、朱美がここにいれば身悶えして喜んだことであろう。

「真澄くん。決めゼリフはいいけど、今日は一応、競技ダンスじゃなくて社交ダンスって名目だからね」

「あと、まずは自己紹介をしないと」

「そもそもうね！ついつい張り切りすぎちゃつたわ」

クソデカドナルドという形容がピッタリ当てはまるオネエ言葉の使い手は、姿勢良く受講者たちに向き直す。

「私の名前は、といがきますみ土井垣真澄。歳は18。この春からプロの競技ダンサーとして活動しているわ」

「私はそのパートナー、あやつじりお綾辻理央。真澄くんとは小さな頃からずっと一緒に踊つています。今日はよろしくね」

優雅に礼をする二人の横には、慣れた様子の丸眼鏡の少女。

「今日は初めての人もすごく多いし、改めて名乗らせてもらいます。私の名前は、大仏こばち」

「……、シルバーマンジムでダンス講師をしています。今日はスペシャルゲストとして、このお二人ともう一人の方に来てもらっています」

もう一人。そのフレーズを聞き、目の色を変える受講者たち。

広いフロアには50人を優に越す数の男女が集まつており、特に女性の比率が高い。

「その方は、諸事情により遅れているようですが。おそらく、もうすぐ着くかと思い——

L

こばちの言葉を遮るように、ダンスルームの扉が勢いよく開かれる。

「すいません!! 道路が混んでて遅れました!!」

『テストステロン』の、花園亮です！今日はよろしくお願ひします！」

「「「キヤアアアアアアアアアアアア!! ゾノきゅーーーん!!」」

黄色い歓声を上げる、
フロアの女性たち。
中にはハチマキやうちわを身につけている

者もいる。

遅れてやつてきたそのイケメンの後ろからは、撮影機材を手にしたスタッフたちがゾロゾロと入ってくる。

「凄い人気だな。流石は現役のトップアイドル」

「今日の予約倍率、エグかつたみたいよ。よく私たち、潜り込めたわね」

そう話すのは、恋太郎ご一行。今日は全員揃っている。

実は予約の定員が埋まっていた後から、こばちが無理矢理ねじ込んだのだが、そんなことは知る由もない。

「それにしても、この講師陣。錚々たるメンツね」

「羽々里さん。花園亮はわかりますけど、あの二人も凄い人なんですか？」

「凄いなんてもんじやないわよ。去年の競技ダンス全国大会、オールジャパン・ジュニアダンススポーツカップ。その高校生部門、スタンダード種目の優勝ペアよ」

「日本一のペアってことですか!?」

「そうよ。それに加えて、あの大仏こばちまでいる。はつきり言つて、いくらお金を積んだとしてもなかなか受けれるレッスンじやないわ。私たち、本当にラッキーよ」

そう解説する羽々里を、目ざとく見つけたのは亮。

「つ、羽々里さん!? それに、羽香里ちゃんまで！」

「久しぶりじゃないですか！ 今日はどうしてこんな所に？」

親しげに話しかける彼を見て、ざわめく周囲。

「亮ちゃん、久しぶりね。去年夏のパーティ以来かしら」

「こんな所も何も、普通にレッスンを受けに来ただけですよ。むしろ亮君がいることにびっくりです」

「俺は、『金ツバ』の競技ダンス企画の一環です。土井垣さんペアに弟子入りするような形で、修行させてもらっているんですよ」

談笑する3人の顔を見て、震え上るのは番組スタッフたち。

（おい！花園財閥の当主がいるなんて聞いてないぞ！）

（絶対に粗相はするなよ！俺らのクビなんてポップコーンより簡単に弾け飛ぶぞ！）

別に羽々里にそんな酷いことをする気はないのだが、そこは芸能界というタテ社会の住人。

絶対に失礼を働いてはいけないという強い意思が表情に表れ、その緊張感が受講者たちにも伝わっていく。

「はいはい、お喋りはそこまで！アツキーの人気は結構なことだけど、今日の主題はあくまでダンスよ」

「こばちやん！皆さんに説明をしてあげてちょうだい！」

よく通る声で、その場の雰囲気を正す真澄。

高校時代、競技ダンス部部長として部員を牽引してきた指導力は伊達ではない。

「わかりました」

「それでは、皆さん。本日教える社交ダンスには、スタンダードと呼ばれる男女がしつか

りホールドをして踊る種目と、ラテンアメリカンと呼ばれる自由度の高い種目があります」

「今日はその中でも、基本となるスタンダードのうちの1種目、ワルツを教えますね」「社交ダンスの中で一番簡単なのはブルースといつて、4拍子でゆっくり踊るパーティ用のダンスなんだけど」

「今日教えるワルツは、競技シーンでも踊られる立派な種目の一つよ。ばっちりマスターすれば、単科の大会にだって出れちゃうわよ」

真澄の言葉に、やる気を出す受講者たち。

「それでは、ワルツの具体的な踊り方について、理央さんから解説をお願いします」

「はい。男女がホールドをして踊るワルツではありますが、その段階に進む前に、まずは基本中の基本となる足運びを練習しましよう」

「ボックステップと呼ばれるものです。私たちの動きをよく見てください」

そう言って、鏡の前に並び立つ四人。

直立した状態から、左足を前に出す。次に、出した左足に右足を添えるように動かし、そのまま右横に滑らせる。

サイドに足が着地したら、今度は左足をそれに追随させ、両足を閉じる。「ここまでが、前半部分。フォワード、サイド、クローズです」

続けて、右足を後ろへ。左足をそれに添えるように動かして、左横へずらす。左足が着地したら、今度は右足でそれを追い、両足を閉じる。

「これが、後半部分。バツク、サイド、クローズです」

「これらを繋げて、一周です。足下に四角形の箱をイメージして、それに沿うようにひたすら繰り返していきます」

「そう難しい動きではありませんが、これをリズムに合わせて、スマーズに行えるようになることが第一目標です」

「慣れてきたら、逆回りの動きにも挑戦してみましょう」

ワン、ツー、スリー、ワン、ツー、スリー。

声を上げてカウントをとりながら、四人はボツクスステップを繰り返してみせる。

「この動きに加え、本来は膝を柔らかく使って、上下動を織り交ぜます」

「体の上下動はライズ・アンド・フォールと呼ばれ、ワルツに限らず社交ダンスでは必須のスキルです」

「しかし、今日はそこまで到達しなくても構いません。まずは、ボツクスステップを体に覚えさせることから始めましょう」

理央の説明を聞いて、一步ずつボツクスステップの足運びを確かめる一同。

恋太郎、唐音、楠莉は、初めはぎこちないながらも、次第に動きの要領を得る。

羽香里、羽々里、眞妃には元々社交ダンスの心得があり、ライズ・アンド・フォールの動きまで意識しながら優雅にステップを踏んでいる。

凪乃の動きには、最初から一切の無駄が無い。

静の足取りは覚束ないが、何とか周りについていこうとしている。

他の受講者たちも、それぞれのペースで練習を進めていく。

10分ほど経つ頃には、皆がカウントに合わせて両回りのステップを踏めるようになっていた。

「いいですね。それでは次に、男性と女性のホールドについて解説します」

そう言つて向かい合う、眞澄・理央ペアと、亮・こばちペア。

一部の亮ファンからの射殺すような視線がこばちに刺さるが、それを意に介さず解説は続く。

「スタンダードホールドでは、立ち位置とコンタクト・ポイントの確認が重要です」

「基本として、男性の右足のつま先が女性の両足のつま先の間にくるように立ちます」

「次に、コンタクト。まず男性は、左手を斜め前方に出し、女性を迎えます」

「女性は男性の左手に自分の右手を合わせ、軽く握ります。男性は焦らずにしつかりと女性を待つて、あくまで迎え入れるという姿勢を崩さないようにします」

「それから、女性が左手を、男性の右上腕の上に置き、親指と人差し指で軽く押さえます」「男性の右手は、女性の左肩甲骨の辺りに、指を閉じた状態で置きます」

「以上が、コンタクトポイントになります。ここまでできたら、肩を少し下げて首を綺麗に見せながら、ボディとボディを軽く合わせます」

そう言いながら、体を合わせる四人。全日本優勝ペアはもちろんのこと、亮とこばちの姿も堂に入っている。

「この状態で意識して欲しいのは、背すじをピンと伸ばすことです」

「背中はのけ反らせず、地面と垂直まっすぐに。肩は張らず、リラックス。横隔膜を引き上げて、お腹は引っ込める」

「決して楽な姿勢ではありませんが、意識すればグッと見た目が引き締まります」

「それでは、実際に試してみましょう」

「社交ダンスは、男性と女性で動きが全く異なります。今日は女性が多いですが、でくるだけ男女で組んでもらって、女性同士のペアは交代で役割をこなすようにしてください」

その言葉を聞き、色めきだつのは恋太郎の彼女たち。

(絶対に、恋太郎とペアになりたい!!)

そう考えるのは、誰もが同じ。

しばし7人で視線を合わせた後、自然と拳が前に出される。

「……勝つても負けても、恨みっこなし。出さなきや負けよ、最初はグー！」

ジャンケン、ポン！

一発で勝利したのは、二人だけチョキを出した、羽々里と真妃。

「……出さなきや負けよ、最初はグー！」

ジャンケン、ポン！

あいこで、しょ！

あいこで、しょ！

あいこで、しょ！

もつれた勝負の末に、勝利を掴んだのは真妃であつた。

「やつたー!! 私が恋太郎と組むわ！」

「あらあら。眞妃ちゃん、あなたジャンケン強くないかしら？」

「そういえば、大事な勝負で負けた記憶ってあんまりないわね」

そう言い残し、いそいそと恋太郎の元へ赴く眞妃であつた。

「しようがないわね。それじゃあ、ママは羽香里と組むわ」

「お母様……！」

「あなたとペアを組める日が、こんなところで来るなんてね。成長した我が子と踊れるのは、とっても幸せなことよ」

ホールドを組み、既にステップを踏んでフェードアウトする母娘に対し、残されたのは4人。

恋太郎以外の男と組むのは不本意ではあるが、誰かと組まなければ話が始まらない。

いつそのこと自分たちで組もうかとも考えながらフロアを見渡す彼女たちへ声をかけてきたのは、同じく4人組の、特徴の無い同じ顔をした若い男子の集団だった。

「君たち！もし良かつたら、僕たちと組んでくれないかな？」

(……四つ子?)

「……まあ、構わないわよ。せつかだし、名前を教えてもらえる？」

「よくぞ聞いてくれました！我ら、同じ時に生まれし4兄弟！姓は毛舞田！」

そう叫び、大上段に構えて高らかに名乗りを上げる、モブ顔の4人。

「長男！毛舞田重國！」

「次男！毛舞田碎蜂！」
もぶたそいふおん

「三男！毛舞田ギン！」
もぶたぎん

「四男！毛舞田烈！」
もぶたれつ

「誇らしげな顔で、ジャムの乗つていないプレーンヨーグルトのように特徴の無いボーナスを決める彼ら。」

「無個性な顔貌と苗字からの個性的過ぎるファーストネーム!!」

「ていうか特に次男!!もうちょっと隠しなさい!あんた達の親はBLEACHファンか!」

「ちょうど僕らが生まれる頃に、尸魂界篇がクライマックスだつたらしいです」「ということは、全員高校生?」

「はい。高校2年生です。日頃はサッカーで鍛えているのですが、無料キャンペーンに釣られて今日ここにきました」

「社交ダンスに潜り込めば、きっとめんこい女の子とお近づきになれるはず。兄貴の読みはズバリやつたなア」

「いきなりの関西弁!四つ子なら生育環境は同じはずでしょ!?」

「これにはな、深ア～いワケがあるんや。どこぞのボイロ姉妹と同じような、深ア～い背景設定がなア」

「それは聞きたくもないけれど！」

キヤラが濃いのか薄いのか良くわからない4人と組みながら、次の指示を待つ一行であつた。

「ペアは組めたようですね。それでは、ホールドした状態でボツクスステップを踏んでみましょう」

「男性役はフォワードから、女性役はバツクから動きを始めてください」

「一人でやる時と同じ動きですが、相手がいるだけで全く勝手は変わります」「男性の方は、女性の歩幅に合わせることを忘れないようにしてください」

「お互いの呼吸と歩調を合わせ、ゆっくりとステップを踏むだけでも、社交ダンスの楽しきの一端を味わつてもらえれば幸いです」

各々しつかりとホールドを組み、カウントに合わせてステップを踏んでいく。

「えへへ……恋太郎……えへ……えへへ……」

眞妃はだらしない笑顔を浮かべながら、恋太郎の懐を堪能する。

「眞妃さんは、すごく手慣れてますね」

「そりやあ、子供の頃から社交界に出されているんだもの。羽香里もこのぐらいはでき

るわよ」

「流石だなあ。眞妃さんに任せていれば、安心ですね」

「こら。社交ダンスはあくまで、男性がリーダー。女性はパートナー。リードするのは貴方の役目よ」

「私、どこまでも貴方についていくから。しつかりと私を導いてね」

「薔薇色の世界に浸る眞妃。それを見て、微かに嫉妬を浮かべる花園親子。

「やつぱり、恋太郎ちゃんと踊るのは羨ましいわねえ」

「そうですね。でも、お母様。私はお母様とこうしているのも幸せですよ」

「もちろん私もよ、羽香里。ママがリードしてあげるから、ゆっくりとついてきなさいね」

穏やかに流れる時を、優雅に堪能する二人。その向こうでは、唐音が騒いでいた。

「別に私は後ろに行きたいわけじゃないんだからね！」

「か、唐音さん！言つてることとやつてることがめちゃくちゃですよ！」

「僕が先に足を動かしますから！その体重移動に合わせて、唐音さんはついてくるだけ

でいいって、さつき理央さんも言つてましたよね!?」

「恋太郎以外の男についていくなんて、まっぴらごめんよ！私の動きを读懂であなたがそれに合わせなさい！」

社交ダンスというジャンルに対し、致命的に相性の悪い唐音であつた。

「あんな風に言い争うのは、非効率的。私はどこまでもあなたの動きについていく」

「凧乃さん。……それはありがたいんですけど」

そう言いながら、困惑の表情を浮かべるのは碎蜂。

凧乃の動きは、完璧だ。碎蜂の意思を刹那のタイミングで汲み取り、一切邪魔をしないように追従する。

しかし。その動きは、完璧で効率的すぎるのだ。

碎蜂からしてみれば、相手を気遣う必要が塵芥ほども存在しない状況。つまり、一人でステップを踏んでいるのと大差ないのである。

凧乃の動きは、まさに空気のよう。ホールドを組んでいるはずなのに、心なしかそこから伝わる体温さえ冷たいように感じられる。

「……」れ、本当に楽しいのかな」

『楽しい』という感情は不要。相手が愛城恋太郎ならともかく、初対面のあなたを楽しませる義理はない』

「涼しい顔でめちゃくちゃ辛辣な」と言いますね」

「楠莉はとーつても楽しいのだー♪♪♪」

「楠莉さん！私たち、とつても相性がいいかもしないわねー!!」
ウキウキとした表情で、ステップを踏む楠莉と烈。

その息はぴつたり合っていて、周りから見ても微笑ましい。

「あ。おしつこしたくなっちゃったのだ」

「この密着した状態で!?」

「オムツをしているから大丈夫なのだ♪♪」

「社交ダンスの空気を粉々にぶち壊すムード!!お願ひだからトイレに行つてきてちょう
だい!!」

渋々フロアを後にする楠莉を見ながら、震えているのは静。

「静チヤン。そんなに怖がるコト、何かある？」

(ひつ……!)

ホールドした状態では、スマホを使えない。

意思を発することができない静に向かって、毛舞田家の三男は特徴の無い目を細めて
微笑みかける。

「ええんやで、静チヤンは何も考えんで。黙つてボクについて来れば、何にも心配するコ

トは無いんやからねエー

優しげな言葉の裏に舌なめずりする蛇の姿を幻視し、おののく静。

(この人……怖い……！)

最初は、とてもスマーズだった。

静のぎこちないボツクスステップに対し、あくまで紳士的に、甲斐甲斐しいリードをしてみせるギン。

しかし、静が少し慣れた頃。足運びの最中に、彼とかち合ってしまうタイミングが生じた。

少し慌てながら、軌道を修正する静。ほどなく、滑らかな動きに戻る。

ホツとしたのも束の間、またギンとかち合う。修正する静。

初心者同士なのだから、上手くいかないところがあるのも当然かと思つていた。

しかし、動きを繰り返すに従つて、様子がおかしいことに気づく。

足がかち合うのは、ちょうど4周に1回。静のバツクのタイミングに合わせて、振り

子時計のように規則的にノイズが挟まれる。

何度も何度も修正しようとする静だが、4周に1度の不協和音は一向に改善されない。

……わざとやっている。そのことに、静が気づいた瞬間だった。

突如として強く握られるグリップと、引き寄せられる肩甲骨。

獲物を離さないとでも言うかのように、ボディを強く押しつけられる。

優しく伝えられていた体重移動は完全に乱れ、ほとんどシンクロできていたはずの歩調も滅茶苦茶なものになる。

静が息を呑み、パニックになりかけた瞬間。すっと力が抜かれ、最初の完璧なエスコートに戻る。

まるで心を読まれ、弄ばれているかのような——いや、『ような』ではない。

この男は、自分を弄ぶためだけにこの動きを行っている。

——意図が、わからない。正体不明の恐怖に震えながら、操り人形のように彼に追随する静。

その様子を見て、ギンの目はますます細く歪む。耳元で発せられる呪詛をもつて、彼女をさらに包みこもうとし——

「すいません。悪いけどそこ、代わつてもらえますか？」
ギンの肩を掴んだのは、恋太郎。

「おつとつと。何や、エライ怖い顔してはんなあ」

「怖い顔してるのは、あなたですよ。静ちゃんを離してください」

「アンタの相手は、私がしてあげるわ」

恋太郎のパートナー役を放棄し、助け船を出す真妃。

「そつかあ。ボクとしては、そつちのちつちやい子の方が組んで面白かつたんやけどなア」

「まあ、しゃーない。キミもエライ別嬪さんやんか。お手柔らかに頼むわア」

一触即発の空気。それを破ったのは真澄であつた。

「あなた達！ 雰囲気を悪くするなら、出て行つてもらうわよ！」

「ゴメンゴメン。そんなつもりは無かつたんや。ただ静チヤンがあまりにも可愛すぎて、ちよつとはしやいでしまつたんやなア」

他人事のように語るギンの手を、真妃が無理矢理絡め取る。

「さあ、これは社交ダンス。あくまで仲良く、レッスンを受けましようね」

「静ちゃん。こつちに来て。俺と組んで踊ろうね」

何とかその場を収める一同であつた。

「それでは二人で組んでのボックステップができるようになったところで、次の段階に移りましょう」

「ワルツに限らず、社交ダンスには決められたステップがあります」

「その数は非常に多岐に渡り、基本となるベーシックステップだけでも200種類。発展型まで網羅すれば300種類以上になります」

「今日教えるワルツの中だけでみても、30種類ものステップが存在しますが、今日はその中でも特にメジャーな4つのステップをお教えします」

「1つめは、ナチュラルターン。6歩かけて右回りに回転しながら、男性から見て左前方へと進んでいきます」

「2つめは、ウイスク。ボックスステップの半周の動きをしながら、クローズした足が少し軸足を追い越すように、後ろにクロスする形になります」

「3つめが、リバースターン。6歩かけて左回りに回転するステップで、ちょうどナチュラルターンの鏡映しの動きです」

「4つめが、シャッセ。男性から見て左方向に右足を出しながら、2拍目で一度細かく両足を揃えます」

「この4つのステップですが、はつきり言つて、習うより慣れろです」「基本的には、ボックスステップの動きを忘れずにいれば大丈夫です」

「口で説明するよりも、体で覚えましょう。私たちが順番に回ってリードしていきますから、各々ステップを確認してください」

「やることのない方々は、ボックステップを続けるもよし。見よう見まねで基本足型を練習するもよし。心得のある方は、自由に踊つていてくださいって構いません」

そう言つて、フロアへと散る講師たち。

こばちはポケットに忍ばせた紙片を確認しながら、恋太郎を捕まえに行く。
そして、冒頭のシーンへと繋がるのであつた。

「それじゃあ、皆！ 最後に音楽に合わせて、舞踏会としゃれこむわよ！」

「教えた足型を使うのも大事だけど、別にそれにこだわらなくてもいい。リズムに乗つて、パートナーとともに歩いていけば、それがあなた流の社交ダンスよ！」

「楽しみましょう！ ミュージック、スタートオオ！」

真澄のかけ声に合わせてかかるのは、"Let It Go" のアレンジ。

ゆつたりと流れる音声に乗り、各々が教えられたステップを生かして、動き始める。
その習熟度は、人によつてまちまちだが。

一様に満足げな表情を浮かべながら、一体感に身を任せる心地よさを体感する受講者たち。

3拍子のリズムを数え、体を合わせた二人、二人、二人が、あちらこちらでくるくる

と回る。

お互いにぶつからないように気を遣いながら、50人を超える男女たちが、フロア全体に左回りの大きな回転を生む。

200年を超える時を経て地球上で愛されてきた、円舞の集い。その様子を見て、真澄は優しく微笑む。

「うふふ。理央、大成功ね」

「ええ、そうね。真澄くん。私たちも、踊りましょう」

手を取り合い、ゆっくりと集団に溶けこんでいく、黄金ペア二人。

ファンサービスとして、次から次へと女性の相手をする亮。

それに負けず劣らずの勢いで、結局恋人たちをローテーションして踊る恋太郎。幸せに浸る、彼女たち。

その様子を見ながら、こばちの思考も静かに回転する。

……どの娘が本命なんだろう。

7人全員に平等に接する恋太郎の姿にクエスチョンマークを浮かべながらも、こばちの方針は変わらない。

明後日は、私の誕生日。一年に一度きりの特別な日に、私だけを見つめて、勝負をかける。

抑えなくていい。抱えなくていい。

そんな文言で自らを勇気づけながら、恋太郎に送る誘いの文面を心の中で練り上げるこばちであつた。

【第14話】大仏こばちは祝われたい

「夢の国へ、ようこそ！ハッピーバースデー！」

カツプルと思しき若い二人組に向かつて次々と声をかける、道行くキヤストたち。

「流石は日本一のテーマパーク。スタッフの教育が行き届いていて、気持ちいいね」

隣で歩く男に向かつて笑顔でそう話すのは、絶世の麗人、大仏こばち。いつもの野暮つた眼鏡は外し、髪も下ろして、誰もが振り返る美貌を惜しげもなく晒している。

今日のために念入りに手入れされたであろう黒髪は絹糸のように美しく揺れ、キューティクルに反射する日光が眩しい。

その頭頂部には、世界一有名なネズミペアの片割れの耳を象ったカチューシャがはめられ、右側の円にはシールが貼られている。

“M Y H A P P Y B I R T H D A Y ! ”

目立つ赤文字でそう書き込まれたシールには、やはりこのパークを象徴する一匹のマウスの顔が、コーンハットを被つて描かれている。

本日の主役が彼女であることを示す、特別なシンボル。右手にはスパークリングレモ

ンゼリードリンクを持ち、ご機嫌な表情で闊歩していく。

「さあ！次は、どこへ行こうか？」

同じ学園に通う生徒が見ても決して気づかない、特別な人に向けるためだけに解禁された天女の微笑みを携えて、こばちは想い人にそう告げる。

その姿に見惚れてしまい、返すべき言葉が上手くまとまつてくれない恋太郎であつた。

シルバーマンジムにて華麗なる円舞曲の集いが開かれた、その日の夜。こばちからの返信を待つ恋太郎のスマホに、メッセージの通知が入つた。
ティロン。

“お待たせ。今家に帰つたよ。まだ起きてるかな？”

“私の方が年上だし、タメ語で話させてもらうね。”

“早速、明後日の話になるんだけど。君と一日、二人きりでデートさせてもらえないかな？”

いきなり懷に深く踏み込んでくる、こばちからのメッセージ。

“お疲れ様です。起きてましたよ。”

“大仏さんみたいな綺麗な人からデートに誘つてもらえるなんて、光榮です。行きた

い場所つていうのは、どこですか？』

返ってきたOKサインを見て、まずは拳をグッと握るこばち。

恋太郎の周りには、女の子が多すぎる。

ハーレムのように姫たちを従える彼には、逆に特定の恋人がいない可能性も高いと踏んでいたが、どちらにせよ二人きりのデートを受け入れてもらえるかは、一つ目の大きな賭け。

表目が出たことに喜びながら、彼女はベットを上乗せしていく。

『こばちさん、つて呼んで欲しいな。私も、恋太郎くん、つて呼んでいい？』

『出会つてからまだ1週間も経つてないのに、大それた提案をしてしまうんだけどね。』

『私、デイズニーランドに行きたい。私が主役になれる特別な日に、君と二人で、夢の国を堪能してみたいの。』

男女二人きりで行く、デイズニーランド。

いくら誕生日という名目があるとは言え、出会つてたつた5日の男に持ちかけるにはあまりにハーデルの高い相談。

突っぱねられる可能性だつて、十分にある。

それはこばちにもわかつていたが、遠慮して引き下がるのは彼女の性分ではなかつ

た。

恋太郎に恋人がいようといなかろうと、デイズニーデートを承諾されようとされなからうと、とりあえずはギリギリまで踏み込んでみて、反応を見る。拒否されれば、その時に軌道を修正して、二の矢を放てばいい。攻めの姿勢をとるこばちは、どこまでも肉食系女子であつた。

“デイズニーランドですか。ちょっと予想していなかつたので、びっくりです。”

“俺なんかで良ければ、ご一緒させてもらいますよ。”

“調べてみたら、パスポートからバースデー仕様のものがあるみたいですね。二人分買つておきましようか。”

思つていた以上の色よい返事に、相好を崩すこばち。

手から取りこぼしそうになるスマホを慌てて持ち直して、画面上に指を跳ねさせる。

“ありがとうございます。お願ひするね。私の分のお金は当日渡すから。”

“すっごく楽しみ！気合い入れて準備して行くから、よろしくね！”

そして6月6日、土曜日の朝。舞浜駅南口。

「おはよう、恋太郎くん！」

綺麗めの半袖シャツに明るい色のジーンズという出で立ちで改札をくぐつた恋太郎に、声をかける傾国の美女。

花柄のレースをあしらつた白のブラウスにデニムのショートパンツを合わせ、ちょっぴりセクシーなオーバーニーソックスを装着。

動きやすさと女の子らしさを両立した上で、男を悩殺する絶対領域の魔力。

至る所に黄金比を備え、ダンスで絞られた輝かしい肉体を前にしばし見とれる恋太郎の左腕に、こばちの両腕が絡みつく。

「たつたの2日だけ、待ち遠しくて仕方なかつたよ！今日のコーデ、どうかな？」

「ど、とっても似合つてますよー俺なんかが隣にいて釣り合うのか心配になるぐらいです」

「嬉しい！君のためだけに、考えて仕上げてきたんだよ！今日は一日ずっと、隣にいてね！」

きつとこの場に石上がいれば、『お前誰だよ』と言いそうなぐらい快活に笑顔を振りまくこばち。

惚れた男の喉首に、1日で噛みつき、食らいつくしてみせる。完全に戦闘態勢に入った雌豹のアクションに、思わず身体を硬くする恋太郎。

道行く男たちの羨ましそうな目線を気にしながら、パーク入り口へ向かつておずおず

と歩き始めるのであつた。

「ワールドバザール」

「キャストさん！バースデーシール、ください！」

ニコニコしながら声をかける、こばち。

「誕生日、おめでとうございます！今日が楽しい1日になりますように！」

「このシールを貼つておけば、色々な場所でお祝いしてもらえますよ。目立つ所に付けてくださいね！」

「目立つ所、かあ……それなら、アレだね！」

軽い足取りでアーケードをくぐり、向かう先はタウンセンターファッション。

「ディズニーランドのスタートといえば、ここしかないよね！」

店内の一角には、ディズニーキャラの頭部を模したカチューシャの数々が所狭しと吊るされている。

「やつぱりここは、王道のミニ一かなあ」

「恋太郎くん、どう？似合つてる？」

漫画みたいな大きなリボンを揺らしながら、振り返るこばち。

「似合つてるなんてもんじやないですよ。絵本の中から白雪姫が飛び出してきたみたい

です

「もう、褒め上手ね。それじゃあ、私はこれにしようかな！恋太郎くんはミツキーにしなよ！」

そう言つて、トンガリ帽子つきのミツキーのかチューシャを手渡す。

「お揃いですか……何だか恥ずかしいですね」

「大丈夫、すぐ慣れるつて！このパーク内ぐらいでしかつける場所ないんだし、思いつきり世界観を楽しまないと！」

♪ペニーアーケード♪

「恋太郎くん、がんばつて！もつと速く、回して回して！」

「うおおおお!!今こそ筋トレで鍛えた上腕二頭筋の力を見せる時！」

「ゴール！やつたね、恋太郎くん！」

「あ、特に景品とかは無いんですね」

♪ジヤングルクルーズ♪

「クルーズへようこそ！オレは、船長の霧崎だ！これからみんなを、危険がいっぱいのジヤングルへと案内するぞ！」

「何が起ころるか分からぬジヤングル。二度と戻つてこれないかもしね。見送りの人たちにお別れの手を振ろう。バイバイ！」

「さあ、これからカバの縄張りへと入つていくぞ！船を揺らしたり、大きな音を立てたりしないように」

「カバを怒らせるとすぐ危険だぞ。何せ、動物界最強の一角とも言われてるぐらいだからな！」

「あんなのに体当たりされたら、ひとたまりもねエ。カバが怒つている時は、耳をピクピク動かす……動いている！」

「みんな、船につかまつて!!」

バーン！バーン！

手にした猟銃をぶつ放す動きをする、霧崎。船の周りで水しぶきが上がる。

「キヤアア！恋太郎くん、私怖い！」

ちつとも怖そではない満面の笑みで、ここぞとばかりに恋太郎にしがみつくこぼち。

「いやー、びっくりして逃げていった。でも、まだそこらにいるかもしれないな。油断は禁物だ」

「さて、いよいよこのジャングルで最も危険で最も恐ろしいところへと近付いてきたぞ。

そこは文明社会だ」

「オレの眼は命の危険を直前に察知できる特別製だが、都会の中じゃあ危険が多すぎてとても生きた心地がしねエ」

「ジャングルの方が、よっぽど安全つてもんだが。みんなは、そんなことはないだろう」「忘れ物に、気をつけて。カメラ、ハンドバッグ、財布、それに大事なお子さん。忘れ物は3日以内に取りに来ないとみんなオレがいただいちまうぞ」

「また冒険したくなつたら、いつでも遊びに来てくれよな！この後も東京ディズニーランドでゆつくりと過ごしててくれ！サヨウナラ！」

「ウエスタンランド・シユーティングギャラリー」

「恋太郎くん！射的で勝負しない？」

「センサーを狙つて、引き金を引くんですね。何だか難しそうです」

「銃のフロントサイトと、リアサイトをしつかり一直線に並べて、マトを狙うのがコツだよ！ほら、こんな風に！」

恋太郎の後ろからピッタリと体をくつつけて、指導するこばち。二人の頬と頬が近づく。

吐息さえ届いてきそうな距離感にドギマギする恋太郎の背中に当たるのは、柔らかに

自己主張する二つの膨らみ。

お互い背筋に痺れるような甘酸っぱい感覚を走らせ、耳たぶを紅潮させながら、努めて平静を保つて彼は尋ねる。

「こばちさんは、詳しいんですね。元々デイズニーがお好きなんですか？」

「両親がすごくデイズニー好きでね。毎年1回は行つてたかな。最後に来たのは5年ぐらいい前だけだね」

「私は9点！恋太郎くんは6点！私の勝ちだね！」

「参りました。でも、楽しかったです」

「はいこれ、グーフィーのスコアカード！記念に持つて帰ろう！」

「勝利の証に、何かおごつてもらっちゃおうかな！スパークリングレモンゼリードリンクで手を打つね！」

～スプラッシュ・マウンテン～

「恋太郎くん、このアトラクションに登場する動物たちの名前は知つてる？」

「あれば、主人公のブレアラビット。あつちは、アライグマのラケツティ。それからこつちが、ミスター・ブルーバード」

「そして、あそこでカメラを持っているのが、フイニアス・ファイヤーフライ……キヤア

アア！」

滝つぼへめがけて落ちて行くボート。

撮影された写真には、バーをしつかりと掴む恋太郎と、手を上げてポーズをとるこばち。

「これも、記念になるね！ いっぱい思い出が増えて、嬉しいなあ」

「アリスのティーパーティー」

「ゲストさん、ハッピーバースデー！ もし良ければ、お名前を教えてもらえますか？」

完璧な笑顔で、こばちに話しかけるキャスト。

こばちは少し躊躇つて、こう答える。

「……神代です。神様の神に、代理の代と書いて、かじろ」

「わかりました！」回っている最中に、お名前をお呼びしますね！」

そう言い残し、キャスト席へと戻っていく。

「こばちさん？ どうして、偽名なんか」

「……ホラ、世の中どこで誰と出会うかわからないでしょ。珍しい名字だし、知り合いに気づかれたりしたら嫌かなって」

そういうものかなと思ひながら、全力でティーカップを回す恋太郎。

「神代さん！ ハッピーバースデー！」

存在しないゲストへ向けたアナウンスを聞きながら、こばちの表情が今日初めて曇るのを、恋太郎は見逃さなかつた。

～スター・ツアーズ・ザ・アドベンチャーズ・コンティニューム

「こばちさん。何か、嫌なことでもありましたか？」

夕方を迎へ、一気に増えてきたゲストたち。

大人気アトラクションということもあり、今日並んできた待ちに比べても一際長い待ち時間の長いディズニーランドではトークスキルが求められるが、そこは惹かれ合う運命の二人。

ここまでのかばちとのデートに、うまくいかない点は何もなかつた。

友達のこと。学校のこと。好きな漫画。映画。小説。ドリンクの味。小さい頃の思い出。

話題は尽きることなく提供され続け、お互いを知る喜びを感じながら、これまで仲を深めてきた。

その中で、それとなく避けられてきた話題。

一つは、恋太郎の女性関係。ジムを共に訪れた取り巻きの少女たちとは、どういった間柄なのか。

もう一つは、こばちの家族のこと。両親の話題は5年前までに限られており、最近の話は全く出てこなかつた。

「そんなことないよ！今日は何かで、楽しいことだらけだよ」

そう嘯くこばちの顔に、違和感は全くない。

心から、恋太郎とのデートを楽しんでいる表情。

その完璧さが逆に、さつきの曇り顔とのギャップを生み、恋太郎に疑念を抱かせた。

「……こばちさんって、実は有名人なんですよね」

少し考えてから、声を潜めて今日一番踏み込んだ話題を振る。

「えっ！……あー、知つてたの？この前一緒にいた花園家の人から聞いたとか？」

苦笑しながら、否定はしないこばち。

「そうです。4年前までは注目されていたアイドルだつたのに、突然いなくなつたつて

「さつき本名を明かさなかつたのは、もし『大仏こばち』を知つてる人がいたら、面倒なことになるからですか？」

「うーん。それも、あるし。それだけでも、ないかな」

複雑な表情を浮かべて、黙り込む。

話したくない、というよりかは、何から話そうか、迷っているような間。

「あ、前の人、進んだね！」

「辛氣くさい話題は、やめやめ！ほら見て、R2—D2だよ！シンプルなフォルムが絶妙に可愛いよね～」

彼女の顔面に貼り付いた笑顔に、負の印象は欠片も見られない。

アイドル時代に鍛えたであろう、全ての者を魅了する表の顔。

ひまわりのようなその面持ちに、逆に深く、暗く、ぱっくりと口を開けた悲哀を見て取れるような気がして。

どんな声をかければいいのかわからないまま、列の先へと足を進める恋太郎であつた。

【第15話】 大仏こばちは見せつけたい

「大仏さーん！ ハッピーバースデー！」

くるくると回るティーカップの外縁にしがみついてはしゃいでいた女の子に届けられた、サプライズメッセージ。

小さな頭にはミニーのかチューシャがつけられ、左耳には“M Y H A P P Y B I R T H D A Y !”のシール。

周りのカップからは拍手が送られ、次々に祝福の声が上がる。

見知らぬ人々から温かい言葉をもらい、歓喜の表情を見せる少女。

キヤストにとって、それは見慣れた光景だが。この日は少し、いつもとは様子が違っていた。

「大仏？ 大仏つてもしかしてあの、おさらぎたいき大仏たいき？」

「ちょっと！ あれ、めありM E A R I ジやない!?」

「こ、こばちやんだあああ!! ヤバいやばい、握手してもらわないと!!」

伊達眼鏡やサングラスを装着し、髪型も変えて一般人を装っていた大仏一家だが、わ

かる人にはわかつてしまつた。

「やれやれ。今日は一家団欒のつもりだつたんだけどな」

「まあまあ、これもタレントの宿命。全く気づかれないとマシじゃない?」

「パパ、ママ! あのおじさん、いつもイベントに来てくれる人! 後で握手してきていい?」

「こーら、今日はパパとママから離れちゃダメ。迷惑にならない所に皆で移動してから、ファンサービス会といきましょうね」

「わかった! ジヤあパパ、もつと早く、回して回して!」

「うおおおお!! 今こそ長年の芸能活動で鍛えた上腕二頭筋の力を見せる時!」

大仏こばち、10歳の誕生日。

訪れる苦難も、悲しみも、何一つ想像していなかつた天真爛漫な頃。

いずれは大輪の花を咲かせると期待された、はち切れそうに膨らんだつぼみが、吹き寄せる熱風に押されて、微かに揺れた。

時は再び、現在に戻る。

「ミッキーのレインボー・ルアウ♪

「恋太郎くん。わざわざ予約してくれて、ありがとう」

「前日だつたので流石に無理かと思つてたんですけど、こつちのレストランだけは空きがあつたんですよね。予約をキャンセルした人がいたのかかもしれません。ラツキーでした」

ステージに近いテーブル席についた二人の前には、黄色と赤のグラデーションが綺麗な南国風のドリンク、ポリネシアンパンチ。

フルーティーな味わいを楽しんでいる間に、『ディナーショーが始まる。

「皆さん、このディナーレストランに、ようこそお越しくださいました」

「私は本日、ポリネシアの魅力をご案内させていただきます、倉見と申します」

「どうぞ、よろしくお願ひいたします！」

ハワイでの女性の正装とされているドレス、ムームーを着用した倉見の前口上が終わり、虹をモチーフにした幕が上がる。

けたたましい動物たちの鳴き声をバックにウクレレの音が鳴り響き、アロハシャツとムームーを着た数名の男女が舞台上へと踊り出る。

「アロハ～！」

軽快な足取りでユラユラと腕を振り、時にカヌーのオールを力強く振り回しながら、ダンスを披露するキャストたち。

「ハワイでは宴のことをルアウと言つて、新しいカヌーの完成や子供の1歳の誕生日、結

婚などの記念にルアウをします」

「今日は皆さんの記念日を、一緒に祝いさせてもらいたく思います。それでは、皆の友達を呼んでみましょー！カモーン！」

一際明るくなる照明と同時に登場したのは、ミツキー＆ミニーマウス、チップとデール、そしてクラリス。

特徴のある甲高い声で口々に喋りながら、カラフルなオールを順番に手に取つていく。

「僕たちは、赤いオール！出会いをお祝いする係だね！」

「私は、紫のオール！記念日のお祝いよ！」

「私は、黄色いオール！誕生日のお祝いだわ！」

「そして僕は……虹色のオール？」

「ミッキーには、全てのお祝いに参加してもらいまーす」

「それでは皆さん！お待ちかねの、ディナータイムです」

「美味しいお料理をお楽しみください。途中、私たちがテーブルを回つていきますので、どうかお相手をお願いしますね」

皿に乗つて運ばれてくるのは、アボカドのサラダや、サーモン、シユリンプなどのシー

フードを中心としたポリネシア料理。

見慣れないそれらを口に運びつつ、やつてくるキャラクターたちと握手やハグを交わす。

「ゲストさん、ハッピーバースデー！ステージ上でお名前を呼びますから、教えていただけますか？」

「神代です。かじろ、みやこ」

「みやこさん！今日は本当に、おめでとうございます！」この花飾りは、『クペエ』といいます。手首につけておいてくださいね」

「」でも本名を名乗らず、素性を隠すこばちだった。

「はい、皆さん！お腹はいっぱいになりましたか？」

「それじゃあ早速、記念日のお祝いを始めましょう！クラリス、出番よ！」

再び陽気な音楽が流れ出し、最初より露出の増えた華やかな衣装を纏った女性を従えて、クラリスが激しくダンスを踊る。

左右になまめかしく腰を振る、ポリネシアンダンサー達。その艶やかな雰囲気に、先日のこばちのダンスを思い出しながら観覧する恋太郎。

「上半身ビキニに、フレアスカートかあ。かなりセクシーな衣装だね」

「それを言うなら、こばちさんだつて。その……太ももの、辺りとか。初めに見た時は目のやり場に困りましたよ」

少し躊躇いながらも、感じたことを正直に述べる恋太郎。

「あら、そうなの？……見せてるのよ」

「そつかあ、私で興奮してくれたんだ。なら、こんなのはどう？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、4人掛けのテーブルの対面から、恋太郎の隣へと移る。

「ほら、あのお姉さんとお揃い。きつちり絞れてるでしょ？」

そう言つてこばちは、左手で軽く恋太郎の頸を押さえ、顔を斜め下に向けさせながら、右手でブラウスをたくし上げる。

ステージ上のダンサーと同じ、へそ出しルック。

よほど体に自信がないとできないムーブだが、なるほど確かに、うつすらと筋の入った腹直筋と、女性らしい腰のくびれ、真っ白な肌が眩しい……

つて、そうではなくて。

「こ、こばちさん！こんな所で！誰かに見られたらどうするんですか！」

「別に見られても減るもんじやないし、何ならお姉さんは全員からお腹を見つめられてるわけだしき？」

「あつ！それとも、二人きりの所で見たかった？もう、恋太郎くんのえっち」

「からかわないでください！ほら、しまつてしまつて！自分の体は大事にしないとダメですよ」

まるでお父さんみたいな注意をしながら、こばちを制止し、元の席へと戻らせる恋太郎であつた。

「シンジくん、ユウくん、ケイマくん、アサミちゃん、イクミちゃん、キヨウスケさん、ツキタケくん、モエカさん、ユウタロウくん、ショウスケくん、ミヤコちゃん、シノブさん、お誕生日おめでとうございまーす！」

ステージは進み、今度はミニ一が担当する誕生日祝いの番。ダンスが一段落したところで、倉見がメモを見ながらアナウンスを行う。

予想以上に多くのゲストが誕生日記念にここを訪れていることを知るが、その中に恋太郎にとつての本日の主役、こばちの名前は含まれない。

1年に1度しか巡つてこないチャンスをフイにしながら、一向に構わないというように笑顔で拍手を送る彼女。

ティーカップの時の曇り顔はどこへ行つたのかと思うような、一片の闇も含まない完全無欠の表情。

朝合流した時は、何かが異なっている。

こばちのごく僅かな、本当に微細な変化を、鋭敏に察知する恋太郎。

「こばちさん」

「何？ 恋太郎くん」

ポリネシアンパンチのストローを口に含みながら、明るい顔をこちらに向ける姫。

目尻の緩みも、眉の傾きも、頬の膨らみも、口角の上がりも、少し傾げてみせる首の角度も、その全てが計算され尽くしたような、完璧な演出を備えていて。

スパークリングレモンゼリードリンクのストローを咥えていた時の自然な笑顔とは、よく見ると全然違う。

ぴつたり重なるはずの2つの写像が、全く重ならないことに改めて気づいた恋太郎は、彼女の深淵を探るべく、かける言葉を組み立てるが。

それが組み上がる前に、アナウンスの声に思考を遮られる。

「ねえミツキー、見て。ポリネシアで私たちが見た、虹のように輝いているわ！」

客席の照明が落とされ、テーブルに置かれた色とりどりのアートグラスが淡い闇の中に浮かぶ。

ショーは最終盤を迎える、ダンサーとキャラクターたちがステージ上に集結する。

「今日はとつても素晴らしいレインボールアウになりました！皆、どうもありがとうございました！」

愛くるしいポーズを決め、お辞儀をするミツキー。

舞台の幕が下り、音楽のボリュームが一瞬上がった後、散会を迎える。

「楽しかったね！お腹もいっぱいになつたし、この後はいよいよパレードだね！」

残るはパークの目玉とも言える、きらびやかな電子の宴。

場所取りに向かつて席を立つこばちについていきながら、踏み込むタイミングを逸する恋太郎であった。

「エレクトリカルパレード・ドリームライツ」

夢のような一日も、いよいよクライマックス。

沿道を埋め尽くし、期待に目を輝かせて、隊列がやつてくるのを待つゲストたち。

その群衆に紛れて、お揃いの黒耳をぴょこんと覗かせながら、身を寄せ合つて座るこばちと恋太郎。

ルアウの後急いで移動したおかげで、パレードの進行ルートの中でもスタート地点に近い位置を確保することができた。

「パレードを見るのも、5年ぶりだなあ。男の子と二人きりで見るのは、もちろん初め

て

「一生に一度の経験になるわ。目に焼き付けておかなくつちやね」

やがて、臓腑に響き渡るような重低音が空間を満たし、続けて流れ星を想起させる効果音が降り注ぐ。

“Ladies and gentlemen, boys and girls”
 “Tokyo Disneyland proudly presents”
 “Our most spectacular pageant of night
 time dreams and fantasy”
 “In millions of sparkling lights and
 brilliant musical sound”
 “Tokyo Disneyland, electrical parade
 dreamights”

電子音のナレーションとともに、誰もが知るファンファーレが鳴り響き、漆黒の闇をバックにまず現れたのは、青く輝く4枚の翅をたなびかせ、ティアラをかぶつた金髪の妖精。

物言わぬ操り人形に仮初めの生命を与えた、ブルーフエアリー。彼女が手にする、光

るタクトに誘われて、ゲスト達は45分間の魔法にかけられる。

続いて登場するのは、お調子者のグーフィーが操縦する汽車に乗つて愛想を振りまくミッキーとミニー。

パークの主人公はアロハシャツを着ていたルアウの時とは違い、燕尾服でビシツとキメている。

ゲストの中には、感極まつて涙を浮かべる者も。

陽気なミュージックとシャツター音に囲まれながら、百万個の電飾に彩られた夢の行進は続していく。

「恋太郎くんは、デイズニーのことはどれぐらい知ってる？」

「正直言つて、あんまり。メインキャラクターぐらいは知っていますが、実際に作品を見たことは多くありません」

「やつぱり、そなんだね。じゃあ、流れてくるキャラクターたちを紹介するね！その方が、百倍パレードを楽しめると思うから」

「あれは、チエシヤ猫。上に乗つているのは、不思議の国のアリス」

「チエシヤ猫は、自由に現れたり消えたりする能力を持つ、神出鬼没なネコなんだよ」

「アリスは夢見がちな女の子。白ウサギを追つて色々な動物やトランプ兵たちが活躍す

る不思議な世界に迷い込むんだけど、結局夢オチだつたのは私的には不満かな』

「次は、白雪姫。継母に騙されて毒リンゴを食べて眠りについたお姫様が、王子様のキスで目覚めるシーンはあまりにも有名だよね」

「実はディズニーの長編映画第1作目で、世界でも初の長編アニメーションなんだよ。この作品のヒットが無ければ、今私たちがこうしてパレードを見ることもなかつたかもしないね」

「次は、トイストーリー。おもちゃ達の冒險を描いた作品で、フルCGで作られてるのが特徴的ね」

「その次が、アラジン。ストーリーは知らなくても、『ホール・ニュー・ワールド』は聞いたことがあるんじゃないかな」

「あつ、塔の上のラプンツェル！前来た時には無かつた！18年間塔の中だけで暮らしていたお姫様が、大泥棒に連れられて外の世界を経験するお話だね」

「お次は、シンデレラ。継母や義姉にいじめられていた可哀想な召使いの女の子が、魔法にかけられて王子様と出会い、ガラスの靴を通じて結婚までするお話」

「今でも逆境をはねのけて幸運を掴む物語をシンデレラ・ストーリーっていうし、これは恋太郎くんも知ってるんじゃないかな？」

「次が、美女と野獣。読書好きな女の子と、傲慢さが過ぎて野獣に変えられてしまつた王

子様が出会つて、外見に囚われない『真実の愛』で結ばれるの」

「それから今度は、アナと雪の女王ね。一昨日流れた“Let It Go”的原曲は、知つてるよね?この作品も『真実の愛』がテーマになつてゐるわ」

「残りは、ドナルドやプルート、チップとデールなんかの、いつものメンバーが来て終わ
りだね!」

パレードも終盤にさしかかり、好きな作品を説明しきつた満足感を浮かべるこばち。
「こばちはんは、本当にデイズニーが好きなんですね。親御さんの影響が大きいんですね」

「うん、そうだよ!……アイドルを目指してたのも、デイズニープリンセスみたいに輝き
たって思つたのが、最初のきっかけ」

そう語るこばちはんの顔は、完璧な笑顔。

そう、またあの、完璧な笑顔。

「ちなみにこばちはんは、さつき通つたデイズニー作品の中ではどれが一番好きなんですか?」

「うーん。やっぱり、シンデレラかなあ」

「家庭の温かさに恵まれず、日々の辛さに耐えながら暮らしてゐる、冴えない女の子が、

魔法で変身して王子様に幸せにしてもらう」

「女の子なら誰でも憧れるストーリーだと思うよ」

「私にも、そんな王子様が現れないかなあ」

意味深なセリフを吐きながら、チラリと恋太郎の顔を見る。

彼は何か、考え方をしているようだ。

気になることでもあるのかもしれないけれど、私を見てくれると嬉しいのにな。

「さてと、恋太郎くん！ パレードも見終わつたし、帰ろうか！」

「今日は本当に、いい一日だつた——」

伸びをしながら立ち上がりかけたこばちの手を、強く掴む恋太郎。

「れ、恋太郎くん？ いきなりどうしたの？」

「こばちさん。俺はまだ、聞いておかないといけないことが、あります」

そう言つて、強いまなざしでこばちを引っ張り、群衆から抜け出す。

そのまましばらく歩いて辿りついたのは、シンデレラ城裏の、一脚のベンチ。

パレードコースからは外れている上に出口と反対方向であるため、辺りは閑散としている。

「もう……どういうこと？こんな人気のない場所に連れてきちゃつて」

「まさか私、襲われちゃう？それはそれで熱いシチュだけど」

「頬を染めて軽口を飛ばすこばちに向き合うのは、どこまでも真剣な表情の恋太郎。

「俺の、思い過ごしだつたらいいんです」

「今日は、本当に楽しい一日でした。こばちさんの、色々な表情を見せてもらいました」「その中で、気づいたんです。心から笑ってくれているこばちさんと、笑顔で何かを覆い隠しているこばちさんがいたことに」

「ティーカップの時、4年前のことを聞いた時、ルアウでの誕生日祝いの時、そしてさつき。こばちさんの表情に違和感が生じるのは、家族と誕生日に関わる話題になつた時でした」

そこまで述べて、いつたん区切る。

見つめるこばちの瞳からは、何を考えているのか読み取ることができない。表情を武器として自在に操る者の、何も発信しない人形のような面持ち。

「……内心を、無理に話せとは言いません」

「ただ。パレードはまだ、ゴールに向かつて進行中。閉園までは、少しの時間があります」

「助けてくれって、言つてるような気がしたんです」

「こばちさんなら、本気で隠そうと思えば、何も悟られずに一日を終えることもできたはず」

「俺に気づかせてくれたのは、伝えたい何かが、あるからなんじやないかつて」「そう思つたから、ここに連れて来ました」

長い長い、沈黙が走る。

赤みを帯びた満月の光に照らされ、隣り合つて座る二人。

「……今日言うつもりは、あんまり無かつたんだけどなあ」

そう呟いてカチューシャをしまい、代わりに伊達眼鏡を取り出し、顔にかけるこばち。

「今日はね。私の記憶を、上書きしてもらいたかつたの」

「毎年この夢の国に私を連れて來てくれていた、大好きだつたパパとママはね」

「離婚してるの。それが、4年前のできごと」

「……聞いててあまり気持ちのいいものじや、ないかもしけないけど。それでも良ければ、聞いてくれる?」

重い口を開いたこばちに対し、一度だけ首を縦に振る恋太郎。

恋を叶えると言い伝えられるストロベリームーンの輝く下で、少女の独白が始まつた。

【第16話】大仏こばちは忘れない

「恋太郎くんは。『大仏たいき』と『M E A R I』の、離婚騒動を覚えてる?」
ミラーレンズで表情を隠しながら、打ち明け話を始めるこばち。

「いいえ。4年前ですよね?」

「芸能人の、不倫騒動みたいなのがあつた気はするんですけど、名前までは」

「まあ、恋太郎くんは当時小学生だし、興味ないよね。それに、大衆なんて、そんなもん」
「有名人のプライベートに押し入って、騒ぐだけ騒いで、コンテンツとして散々消費して、後は知らん顔」

「所詮は、他人事。でも私にとつては、大事な家族に関わる重大な事件だつたの」

一つ、息をつく。心の中に積み重なった澱を、できるだけ解きほぐして、筋道立てる。

「私のパパとママは、二人ともタレント」

「交際が始まつてから、わずか1カ月で結婚したつて。当時は随分話題になつたらしいわ」

「その下に生まれた私も、当然のようにアイドルを目指した」

「シンデレラを見終わった私が、『私もあんな風になりたい！』って言つたら、すぐに入タジオに連れて行つてくれて」

「あれよあれよという間に話が進んで、気がつけば子役としてドレスを着てテレビに出ることが決まつてた」

「私が4歳の時の話よ」

普通そんなことにはならないわよね、とこぼし、話を続ける。

「私は、すぐにテレビ局で重宝されるようになつた」

「自分で言うのもなんだけど、親から受け継いだ容姿と演技力には自信があるし」

「芸能界側からしても、扱いやすくて話題性のあるいいコマだつたんでしょうね」

「そうだつたんですね。俺がこばちさんのことを探らなかつたのが、何だか少し申し訳ないような気がします」

「そんなの、全然。子役の名前なんて知らない人は知らないし、今となつては、知られていない方がよっぽど気が楽」

「9歳になる頃にはトーキ番組やバラエティにも出演するようになつて、交友関係が一気に広がつた」

「1回だけ誕生日ディズニーに連れて来てもらつたのは、10歳の時」

「その日はたまたま3人ともオフにできたから、記念つてことだつたんだけど」

「ティーカップで名前を呼ばれたら、周囲の人たちにバレちゃつて」

「パークの片隅に移動して、即席のサイン会と握手会が始まつちやつた」

「いい時間だつたなあ。遠くを見つめながら、そう語る。

「11歳の春に、新生アイドルユニット『プラチナメイデン』のメンバー入りが決まつたの」

「歌とダンスは幼い頃から厳しく仕込まれてたから、最初からそれなりにいいポジションがもらえてね」

「私もダンスは好きだつたから、一生懸命、練習に打ち込んで」

「忘れもしない、あれは中学1年生の時の5月14日」

「夏フェスでお披露目する新曲で、私がセンターを任されることに決まつたの」

「ヒップホップのティリストを取り入れた楽曲で、その方面は私が一番得意だつたから」

「当時の気持ちは、嬉しさと、责任感とが半々つて感じかな」

「年上のメンバーを押しのけて、私がセンターに選ばれたことを、良く思わない人もたくさんいたと思う」

「それがわかつてたから、私はますます練習に励んだ。誰に対しても胸を張つてステー

ジに立てるように、最高のパフォーマンスを目指してた」

「新曲は、無事に初公演を迎えることができて。センターとしての私の評価は、可も無く不可も無く」

「特別に賞賛を受けることもなかつたけれど。とりあえずは無難に役目を果たして、その後もセンターを続けさせてもらえそうなどに、ほつと胸を撫で下ろしたわ」

「その夏には、もう一つ大きな仕事が決まつていて。初めての、主役級での映画出演」
『かじろみやこ』は、その時演じるはずだつた役名。ホラーゲームを元にした作品で、盲目の少女という役柄だつたから、リアリティを出すために知恵を絞つたわ」

「アイドルとしても、女優としても。ここが一番の頑張りどころ」

「ここでしつかりと結果を出せば、一気に広い世界へ向かつて羽ばたけるかもしれない」

「そんな夢を見てたの」

「ママの不倫が週刊誌で大きく報じられたのは、そんな時だつた」

いつたん、言葉を区切る。恋太郎は何も言わず、真剣に話に耳を傾けていた。

「初めて記事を目にした時の気持ちは、よく覚えてない」

「学校が終わつて現場に出かけようとしたら、マネージャーさんから、記事を見せられ

て

「何だか別世界の出来事のようで、現実感がなかつたのだけは確か」

「世間では午前中のうちから、騒ぎにはなつてたみたいで」

「その日の仕事が終わつた瞬間に、私もマスコミから質問攻めにされた」

「実感が湧いたのは、その時かな。『今のお気持ちを聞かせてください』なんて言われても、どう答えて良いのか全くわからなかつたけど」

「事務所の人たちに守られながら、家に帰つて。目にしたのは、玄関の前でマスコミに囲まれてる、パパの姿だった」

「パパは明らかに落ち込んでたけど、何とか質問に答えようとしていて」

「帰つてきた私を見て、迎え入れてくれた。パパと二人で、フラツシユから逃げるようにな
家に駆け込んだのを覚えてるわ」

「少し遅れて、ママが帰つてきて。私は、先に寝てなさいって言われて、しかたなく部屋
に戻つて」

「翌朝見た時の両親は、予想外に普通の様子だったのが印象に残つてる」

「あの日の夜中に、どんな話をしたのかはわからないけれど。パパは、ママを許そうとし
ていたみたい」

「正直、芸能界では不倫って、よくある話だし」

「私も、ママのことを大嫌いにはなれなかつた。何とか戻つてきてもらつて、家族関係を構築しなおすことを望んでた」

「だけど、その望みは叶わなかつた」

「ほどなくして、記事の第二弾、第三弾が公開されて」

「ママが一人だけじゃなくて、色々な人と不倫していたのが暴かれていつた」

「いつ、どこで、誰と、どんな風に会つていたのか。知りたくもないことが詳細に報じられて」

「ネット上の誹謗中傷にも、一気に火がついた。ママは、殺されるんじやないかつていうぐらに追い詰められて」

「パパの方も、連日の取材攻勢に晒されて、すっかり疲れきつてしまつてた」

「両親の仕事は、めつきり減つて。外出することすら避けて、人目を忍んで歩くようになつて」

「結局別居することになつて、間もなく離婚。私はパパの方に引き取られた」

「パパはそれでも頑張つて、私を高校にまで入れてくれたんだけど」

「次第にお酒の量が増えていつて、今年に入つた頃からは家に帰らない日が増えて。噂

では、怪しげな人たちとつるむようになつてたみたい」

「今は体を壊して、入院中。いつ帰つてこられるかはわからないつて、お医者様からは聞いてる」

「私の方も、グループのセンターからも、映画のヒロインからも、降板を余儀なくされて。そのまま逃げるようにして、芸能界をやめた」

「本当は、もっと頑張りたかったんだけど。周囲からの好奇の目に晒され続けるのに、耐えきれなくなっちゃった」

『親の七光り』、『アバズレの娘』、『売女』、『カエルの子はカエル』。匿名で寄せられる暴言は、本当にこたえたなあ』

「学校でも、同情の体を装つた『ざまあみろ』の大合唱」

「正直人格が歪んでも、おかしくはなかつたと思うんだけど」

「私が恵まれてたのは、温かく接してくれる友達が周りにたくさんいたこと」

「一番の親友は、私が陰口を叩かれるたびに怒つてくれたし」

「ふつーに優しい人もいた」

「関係ない男が首突っ込んできたり」

「コンプレックスを受け止めてくれる先輩がいたり」

「おかげで、トラウマって言うほど辛くはなくて」

「そう言つて、頬を緩ませる。

「だからね。本当は全部、忘ることにしてるんだ」

「辛い境遇を嘆いたつて、何かが変わるわけじゃないし」

「大切な人に囲まれて、高校まで通わせてもらつて、普通に楽しく過ごせてる時点で、私は十分恵まれてる」

「論理的に考えて、全部忘れた方が幸せでしよう?」

「バイトが必要になつたおかげで、恋太郎くんにも出会えて、今日こうやって一緒に遊びに来て」

「誕生日デイズニーの思い出も、上書きさせてもらえたし」

「私のこんな気持ちにも、気づいてもらうことまでできちゃつて」

「実はね。ここまで洗いざらい話したのは、君が初めて」

「親友にも相談には乗つてもらつたんだけど、根掘り葉掘りは聞かれなかつたからね」

「今日はついつい、喋りすぎちゃつた。君が、本当にいい男だからかな?」

「さ、そろそろパレードも終わつた頃かしら! 帰ろう、恋太郎くん!」

努めて快活に言い切り、席を立とうとするこばち。

その身体を、恋太郎が、優しく抱き締めた。

【第17話】大仏こばちは信じたい

「れ、恋太郎くん？どうしたのかな、急に」

「こんなところで、いきなりなんて。私にだつて心の準備とかあるし、こういうことはちゃんとベッドの上で……」

「こばちさん。もう、演技しなくて、いいんですよ」

おどけてみせるこばちに向かって、真摯に語りかける恋太郎。

「こばちさんの過去に何があつたのか、よくわかりました」

「眼鏡で素顔を隠す理由も、笑顔で本音を隠す理由も、時に大袈裟な冗談で、俺を振り回してみせた理由も、全部わかりました」

言葉を切つて、視線を合わせる。

彼の目から、静かに一筋の涙が零れ、それはすぐに二筋の流れとなる。

「トラウマって言うほど、辛くないわけ、ないじやないですか」

「人生で一番楽しくて、一番力を込めていた、一番輝こうとしていた時に。突然全てを奪われたんですね」

「自分には落ち度のないことで。しかも、他人ならともかく、一番大切な肉親のせいで」「ご両親のこと、大好きだつたんでしょう。大好きなお母さんの過ちのせいで、こばちさんも、お父さんも、そんなことになつてしまつたわけでしょう」「両親渝つて普通の家庭を築いてくれている俺には、想像もつきません。こばちさんが、ご家族への愛と失望の間で、どれだけ苦しんだのか」

そう言つて恋太郎は、こばちの眼鏡をそつと外し。

既に潤み始めている彼女の瞳を自らの胸にもう一度埋め、柔らかく頭を撫でる。

「演技しなくて、いいんです」

「辛いって言つてくれて、いいんですよ」

「こばちさんには、もつと、ずっと幸せな未来があつた」

「嘆いても、何も変わらなかつたとしても。嘆いて当然のことなんです」

「その気持ちを、俺の前では隠さないでください」

恋太郎の言葉が、絶望を経て乾ききつたこばちの心の砂地に、ゆっくりと染み渡つていく。

ハートの隅まで染み渡つた水が、その下端から微かに絞り出され、ぽたり、ぽたりと

滴り始め、やがて雨となつて流れ出す。

「恋太郎くん！私！私……！」

「辛かつた。悔しかつた！死んじやいたいぐらい悲しかつた！」

「センターとして、踊り続けていたかつた。『神代美耶子』を、演じさせて欲しかつた！」

「私が努力して作り上げたものを、ファンの皆さんにちゃんと伝えたかつた」

「ママに、帰ってきて欲しかつた。パパに、ずっと傍にいて欲しかつた！」

「こんな風になりたくなんかなかつた！」

「グループの同期がテレビに出てるのを見るたびに、心の奥がぎゅっと痛んだ」

「私も。私も！夢を見続けていたかつたよお……!!」

恋太郎の胸に顔を埋めたまま、一気に言葉を出し切るこばち。

それは、彼女の人生が暗転して以来4年間、誰にも吐き出すことのなかつた思いだつた。

親友であるミコにも、尊敬できるつばめにも、話したことはなかつた。

聞かれば答えたかもしれないが、深くは聞かれなかつた以上、酷すぎる境遇に起因した弱音は、内に封印したままだつた。

駄々をこねる子供のように、恋太郎の胸を叩き、嗚咽を漏らし続ける。

素顔を隠すレンズと、本音を隠す演技に紛れ、彼女自身も気づかないまま、心の奥底に沈めていた、積もり積もつた泥の塊。

その汚泥を綺麗に洗い流すかのように、恋太郎の慰めと、こばちの涙が、夢の国の夜を流れ続けた。

“皆様、東京ディズニーランドは、まもなく閉園時間となります”

“楽しい一日をお過ごしいただけましたでしようか”

“またお越しただける日を心よりお待ち申し上げます”

流れるアナウンスを聞きながら、ベンチに座る男女が、そつと体を離す。

男は頭に、ミッキーのかチューシャをつけている。浮き世離れした美しい女は、目を真つ赤に腫らしている。

「結局、閉園時間まで居座っちゃったね」

「そうですね。流石に、もう帰らないといけませんね」

立ち上がる二人。女は男のかチューシャを取り、バッグにしまって、悪戯っぽく数歩駆け出し、振り返る。

「帰る前に。最後にもう一つだけ、伝えさせて欲しいことがあるの」

そう言うと、大きく息を吸い込んで、胸の高鳴りを全身に感じて、大切な言葉を紡ぐ。

人は、どんな時に告白するのだろうか。

用意周到に計画を練り、成功の可能性を極限まで高めた上で、プラン通りに想いを伝える者もいる。

普段の何気ない生活の中で、ぼろつと本音が零れるように、素直な想いを伝える者もいる。

そして、今日この時の、彼女のように。

感極まつて溢れた思いの丈を、我慢せずに、恐れずに、相手に向かつて、ありのまま届ける者もいるのだ。

「恋太郎くん。私は、君が好き」

「意思の強いまなざしも。凜々しい眉毛も。勇気を持つて立ち上がる強さも、私を受け止めてくれた優しさも、全部ひつくるめて、君のことが大好き」

「まだ出会つてから、全然時間は経つてなくて。君の周りには、女の子が多すぎて」「正直、自信を無くしそうだけど」

「私は、君と恋人になりたい。君の全てが欲しいし、私の全てを君にあげたい」「お願い。私とつきあつてください」

そして彼女は、彼の返答を待つ。

学園では『難題女子』と呼ばれ、恋愛強者であることを何の遠慮もなく自覚する彼女が見せる、どこまでも無防備な心の中核。

それを贈られた、恋太郎の答えは。

「俺も。あなたのことが好きです。こばちさん」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

シンプルな、肯定の言葉。

何よりも欲しかったそれを受け取つたこばちは、恋太郎に向かつて駆け寄つていき。そのままの勢いで、深い深い口づけを交わす。ここに誕生した確かな愛を、緋色の月明かりが祝福した。

「……という次第でございまして……。大仏こばちさんを9人目の彼女として迎え入れ

させていただいてよろしいでしようか』

滝のような汗を流しながら、ハーレム構成員へ向かい合って報告をする恋太郎。時は日曜日。場所は花園邸。何度もやつても、この儀式には慣れないと。

「あんた！一昨日一人増えたばつかでしょーが！どんだけ食いしん坊なのよ！」

「食いしん坊という意味では『彼女』の右に出る者はいない」

「こ、こばちさん!? 本当にこばちさんが彼女に加入するんですか!?」

「あらあら、元アイドルまで陥落させるなんて。流石私たちの恋太郎ちゃんね」「綺麗な人なのだー！ 楠莉は大歓迎なのだ！」

『こうしてパーテイーに、スーパースターが加入したのであつた』

『まさかアンタまで、『こつち側』だとは思つてなかつたわ』

『私もびっくりですよ。四条先輩にこんなイメージ全然なかつたんですけど』

『本当にね。どうしてこうなつちやつたのか……』

日々に所感を述べながらも、こばちを迎えること自体には異論はなさそうな日々。

「恋太郎くん。正直この展開も、1%ぐらいは予想してた」

『全員まとめて幸せにしたい』なんて、まるで漫画のタイトルね』

「私的には、悪くないシチュだけど。一つだけ、確認させて欲しいことがあるの」

そう言って、言葉をまとめるこばち。

今日は伊達眼鏡はしておらず、女性も見とれるその美貌を恋太郎に向ける。人生がひっくり返つて以来、ぶ厚い眼鏡を常にかけ、脇役としての役割に徹して生きてきた彼女。

恋太郎に全てを受け止めてもらい、新しい一步を踏み出した彼女に、憂いはもうない。 彼女自身の人生の主役として、スポットライトを浴びるポジションを取り戻すのだ。 その一環としての、様相の変化であつた。

「私、君に私以外にも彼女がいることについては、文句無い」

「君の魅力なら、惹かれるのは無理もないことだと思うし。正直、好きな人みんなとつきあいたいって気持ち、わからなくはないし」

彼女もまた、M E A R I の娘。

家族の人生を転落させた母の所業を忌み嫌つてはいるものの、その体に流れる血に嘘はつけない。

世の中には二種類の人間がいて、絶対に浮気を許せない人種と、そうではない人種が存在する。

自分が後者であることを、こばちは元々自覚していた。

「でもね。子供が生まれたら、どうするの？」

「子供の人生は、親に否応無しに左右される」

「この日本では、一夫多妻は認められてない。嫡出子として認められるのは、正式に婚姻を結んだ夫婦の子供だけ」

「非嫡出子として育てるにしても、9人の女を侍らせた父親なんて、周りから後ろ指を指されるに決まってる」

「そうなった時に苦しむのは、私たちの子供なんだよ？」

「この問題を君は、どうやって解決するつもりなの？」

「……解決する方法は、考えています」

「でも。今はまだ、言えません」

「またそれ。アンタつて、随分秘密の多い男ねえ」

「すみません、眞妃さん。でも今回言えない理由は、前の時とは違っています」

「解決方法は、ありそうなのですが。まだそれを、俺が実現できるかどうかがわからないんです」

「ちゃんと実現できる見通しが立つてから、皆に伝えたい。それが、まだ言えない理由です」

そう答える恋太郎の目はどこまでも真剣で、この場を誤魔化そうとしているようには見えない。

「こばちは、一つため息をつき。

「まあ、いつか。とりあえず、信じてついてついていつてみるわ」

「高校生の恋愛なんて、そんなに肩肘張つてするものでもないし」

「試しに一夫多妻の一人になつてみるつていうのも、人生経験かもしれないし」

「あ、この人ダメだと思ったら、即刻見限るからね。女の恨みは怖いから、覚悟しててよね」

恋太郎と別れれば、彼女の人生はそこで終わる。

そんな事実を伝えることはせずに、ただ恋太郎は首を縦に振つてみせる。

「約束します。こばちさん、あなたを絶対に幸せにしてみせます」

「はいはい、センキュ。頑張つて私たちを幸せにしてね」

「それで。私が『9人目』って話だけど、今この場には、私を含めて8人しかいないわね」

「もう一人は、いつたいどこにいるの？」
「それがですね」

「今、大食い大会に参加してます」

「……え？」

次章へ続く!!

【第18話】伊井野ミコと運命の出会い

「ガールズ！ フードファイト・フェスティバル！」

ワアアアアアアアアア。

輝く笑顔でアナウンスを行う、ウサ耳のような髪型をした女性。

立ち上る熱気。関東全域から集いし、『食』に自信のある女学生たち。

人類の原初の欲求である、『食欲』。

その欲望の頂点を競うべく、今ここに熱戦の火蓋が切られようとしていた！

「おーおー、ものすごい人出やなあ」

「大丈夫だ！ どれだけ競争相手が多かろうと、フードファイトでキャプテンが負けるわけがねエ」

“上位3名に与えられる賞品は、三ツ星パティシエの特製ジエラートらしいぞ。参加者の多くはそれ目当てだろうな”

そう話しながら観客席に座り、参加者達を見守るのは、特徴的な外見をした男女の3人組。

テレビアニメ『ポップマン』の帽子をかぶり、ゴーグルを額につけた癖つ毛の男子、
藤崎佑助。ふじさき ゆうすけ通称ボッスン。

黒のチヨーカーを装着し、ホッケースティックのバツグを携えた金髪の少女、
鬼塚一愛。おにづかひめ通称ヒメコ。

黒髪眼鏡という平凡な風貌ながら、首と紐で繋がつてているノートパソコンを装備し、
人工音声で喋る点がどう見ても平凡ではない少年、笛吹和義。うすい かずよし通称スイッチ。

開盟学園スケット団を構成する3人。今日はクラスメイトの大食い娘が大会に参加
すると聞いて、応援に駆けつけていたのだつた。

「ルールは説明不要!!」

「とにかく食つて食つて食いまくつた者が勝者だあアーツツ!!」

「それではルール説明を行います」

「いや説明するんかい!!」

「本作品では、予選なんていうまどろっこしいものはありません！参加者314名全員
で、いきなり本戦を戦つてもらいます！」

「そのお題は、『ビュッフェ』！スタッフが腕によりをかけて用意した数々の料理のうち、

「どれをどのような順番で食べても構いません！」

「混雑を避けるため、エントリーナンバーに応じて料理を取るエリアが決まっています。それに従うようにしてください！」

「各選手のテーブルには計量器が仕込まれており、取つてきた料理を置けば皿の重量を除いた食物の重さを自動で記録してくれます！」

「必ず、料理を一度テーブルに置いてから食べ始めること！」

「制限時間は、30分！その間に、食べることのできた食物の総重量で順位を競います！」

「成績上位者の食べた量は、リアルタイムで電光掲示板に表示されます！入賞を目指す選手は、それを参考にしてペース配分をしてください！」

「言うまでもないことです、不正は働かないように！フロアではたくさんのジャッジが皆さんの一挙手一投足に目を光させています！」

「上位3名には、特製ジエラートを食べる権利が与えられ！さらにその後、エキシビジョンマッチに進んでもらいます！」

「エキシビジョンマッチで勝利すれば、なんと賞金いっぱい円まで贈呈されてしまします！」

「掴むしかない、このスペシャルチャンスを！乗るしかない、このビッグウェーブに！」

「栄光を掴み取るのは誰だ——!?」

「ガールズ・フードファイト・フェスティバル本戦！ただいまより、スタート!!!」

「本戦とか描写するだけ文字数の無駄なので結果発表にまいります」

「いや本戦!!大事やろ!!そこはしよる作品初めて見たわ!!」

「本日の主題はエキシビジョンマッチです。本戦などキャラの顔見せのための前座でしかないのです」

「第3位!!開盟学園より参加！高橋千秋選手!!
たかはしちあき

歓声とともにまず壇上へ上るのは、黒髪をおとなしめの二つ結びにまとめた、意志の強そうな目をした少女。

学生服の上にカーディガンを羽織り、スカートから覗く大腿部は健康的に引き締まっている。

「キャプテン——！おめでと——！エキシビジョンもやつちまえ————！」

“作戦通りの順位で、上位3名に残つたな。本番はこれからだ”

「第2位!!秀知院学園より参加！伊井野ミコ選手!!
いいのみこ

続いて壇上に上るのは、栗色の頭髪をおさげにまとめた、小柄な少女。

いつたいその小さな体のどこに、そんなに多くの食物が入るのか。

そんな疑問を呈する観客を尻目に、眞面目そうな表情に微かな笑みを浮かべ、ペコリと頭を下げる。

(やつたあ……あのピエールさんが作つたジエラートを食べれるなんて、すつごく幸せ)

(流石に、生徒会の先輩たちに応援を頼む気にはなれなかつたけど。賞金いっぱい円をもらいたら、皆で遊びに行く費用にしてもいいかな)

「第一位!!なんとなんと、中学生だあーー!!○○学園中等部より参加!原賀胡桃選手!!
はらがくるみ

そして最後に壇上に上がつたのは、フードを目深にかぶつてヘッドホンを装着した、ミコと同じぐらいに小柄な少女。

今さつきビュッフェを食べ終わつたばかりだというのに、お腹をクルクルと鳴らしながら、不機嫌そうな表情で観客を睥睨する。

「てゆーか、○○学園つていう名称いい加減にちやんとして欲しいんだけど。そのうちファンブックでしれつと設定されてたりすんのか?」

「あー、イライラする。早くあたしに食べ物をよこせ。とつとエキシビジョンを開始

しろ

「以上の3名にはこの後、特製ジエラートを食べる権利が与えられます！」

「しかしその前に！皆さんお待ちかねの、エキシビジョンマッチの時間だあア——！」

「規格外の女学生3名と相対するのは、大食い世界チャンピオン!!!」

「タケエ・スリバーテックス選手の入場です!!!」

鳴り響く音楽。
回るスポットライトとともに地響きが轟き、
一体の巨人がステージ上に現れる！

「ワンピースの世界みたいなサイズ感の人出てきおつた!?」

“去年の獲得賞金総額、約35万ドル。世界中の大食い大会でタイトルを総なめにする、現賞金女王だな”

「公平を保つため、タケコ選手にはまず、本戦で3名の選手が食べたのと同量の食事をとつていただきます！」

運ばれてくる、山のような料理。タケコはそれらを、ものすごい勢いで口に運び、飲み込んでいく。

わずか10分で、3人が30分かけて食べた量の食事を平らげてしまつた！

(なつ……!?速すぎる!!これが大食い世界王者の実力……!)

驚愕するミコ。しかし、胡桃と千秋の二人は表情を崩さない。

「相手にとつて不足なし。さあ、早く戦いを始めましょう!」

「早く食わせろつつてんだ! 10分も待たせん! あーもう、イライラする……!」
「何と何と、どこまでも不遜な挑戦者たち! 過去最高の戦いが見れそうな予感に、私も興奮を隠しきれません!」

「エキシビジョンの形式は本戦と同じ!! 制限時間は30分!! 決してルールを考えるのがめんどくさかつたわけではないぞ☆」

「さあ、頂上決戦のスタートです!!」

ジャアアアアアアン!!

ドラの音が鳴り響き、料理を自ら取りに走る者と、スタッフに料理を運ばせる者に分かれる選手たち!

今ここに、ガールズ・フードファイト・フェスティバル、エキシビジョンマッチの幕が上がつたのであつた!!

パン!パン!パパパパパン!

ソニックブーム

巻き起こる衝撃波とともに、次から次へと消滅していく食物たち。

何が起きているのか全くわからない神業を披露しているのは、高橋千秋、通称キヤブテンその人であつた！

「な、何だこれは――!? 私この司会をして長いですが、こんな技は初めて見ました!」
『キヤブテン』の、『ネオキヤブ食い』や!!あれについてこれるフードファイターなんかお
らへん!!」

“本戦ではこの技を封印して、ギリギリ3位に残れる量の食事しかとつていなかつたらな”

「俺らの作戦勝ちつてことだ！ キヤプテン！ そのままやつちまえ！ 世界チャンピオンをぶつ倒せ————！」

「はは、やるじゃない。あたしも、こらで本気を美味つしいいいいいい!!」

欲望のままに料理をかきこんでいく胡桃。

ハイペースで空き皿を重ねていく二人に対し、ミコの箸の進みは遅い。いくつ大食いとは、え、二度こなれば常人の範囲に入るミコ。既にこの

いくら大食いとはいっても、二人に比べれば常人の範疇に入るミコ。既に30分の本戦を戦つた後であり、全力で料理を平らげるることはできなかつた。

しかしながら、主にネオキヤブ食いの効果により、徐々にタケコと3人の食べた総重量は離れていく。

15分経過した時点で、優勢は挑戦者側。世界チャンピオンに土がつくところが見られるのか。

期待を高める観戦者たち。その時、タケコに異変が起きた。

「うふふ、久しぶりに骨のあるチャレンジヤーね。ここまで追い詰められたのは、何年ぶりのことかしら？」

「できれば、この技は使いたくないんだけど。アタシにも、賞金王としての意地がある」「本気でいくわよ、3人さん……!! 巻き込まれないように、気をつけな！」

「バツカアアアアン!!」

タケコの腹部から轟音が鳴り響き、肋骨が左右に大きく口を開く!!

その腹にパックリと開いたのは、不気味に蠢く一個の目玉!!

「おで、腹、減った。全部、食い尽くす」

「ズオオオオオオオオオオ!!」

スタッフが必死に運んでくる料理の数々を、皿ごとその体内に吸い込んでいく!!

“あれは、『鋼の錬金術師』のグラトニーの能力!?”

「いやいやいやおかしいやろ!!なんでこつちはギャグ漫画3人で頑張つとるのにそつち
はバトル漫画の概念出してくんねん!!」

ヒメコの叫びも空しく、一瞬で逆転するタケコと3人の食事量。
なすすべ無いかと思われた、次の瞬間!

ズル。ズルズル。ブシャアアアアアア!!

タケコの腹部に開いた目玉を内側からぶち破り、ベレー帽をかぶった長髪の美少女、
早乙女浪漫さおとめらんまんが姿を現した!!

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン!!」

「呼んでへんわ!!どこから出てきとんねん!!」

「いやー、『現実』か『真理』かだつたら私は『真理』側のキャラかなつて」

「ほうほう、ほな『真理』やなあ。何せロマン言うたら、この世の創造主側の技を駆使す
るからなあ。つてなるか!!はよ『現実』に戻つてこい!!」

「まあ100カノもメタいとこあるし、いつそ私が出演してもおかしくないかなつて?

あく、私も恋太郎くんハーレムの一員に加えてもらえないかなあ」

「待て待て待て!!ウチらまだこの作品では恋太郎と出会つてないから!!フライングで
ぶつ込んでくるのやめーや!!」

「あとハーレム入りはリメイクまで待つとけ!!」

「はーい。何か怒られてばつかだし、私帰るね」

「だいぶ勝負も抵抗してきたみたいだから、この辺で真理の扉は閉じとくね☆3人さん、頑張つて!。バイチャ!」

腹の中へと戻つていくついでに、タケコの肋骨をバタンと閉じる浪漫であつた。

「さあ、色々なことがありました、本日のエキシビジョンマッチもいよいよ残り5分！」

「チャンピオンと挑戦者の差は、わずか300グラム! 果たして勝負の行方は、どうなつてしまふのか!?」

(私が……! 私さえ頑張れば……! 逆転、できるはず!)

超人3名に囲まれて、己のふがいなさを味わつてきたミコ。

もう既にその胃袋は限界を超えていたが、最後の力を振り絞つて食物を口に運ぶ。まだだ。まだいける。私の体は、まだ料理を迎えるられる!

自己暗示とともに、白米をかきこみ続けるミコ。そして次の瞬間……!

ウツブ。ゲエエエエエ。

秀知院学園2年、生徒会会計監査、伊井野ミコの、人間としての尊厳が、人々に打ち砕かれた瞬間であつた。

「ミコちゃん？ 大丈夫？」

エキシビジョンマッチが挑戦者側の失格という形で幕を閉じ、控え室で失意に沈んでいたミコ。

その元に、ハーレムへの顔合わせという大事な用事を終えて会場に駆けつけた、こばちが訪れた。

「こばちちゃん」

顔を上げるミコ。その双眸に大粒の涙をたくわえて、親友の胸に頭をあずける。

「私、もう……！ お嫁に行けない……！」

「はいはい、つらかつたねー。頑張り過ぎちゃったねー」

「でも、大丈夫。ジャンプ作品ではゲロインが出てくる漫画は大成するつていうお決まりがあるから」

「ミコちゃんはその人柱になっちゃつただけだよ」

よくわからないこばちの慰めに対し、返す言葉もなく嗚咽を漏らし続けるミコ。

「こばちさん。俺たちは胡桃を連れて帰りますけど、こばちさんはどうしますか？」

続いてやつてきたのは、恋太郎ご一行。胡桃は既にクルクルとお腹を鳴らし、スニッカーズにむしやぶりついている。

「恋太郎くん。今日は私は、ミコちゃんについておくことにするわ」

皆で、先に帰つてて。もし早く帰れたら、後でまた花園家にお邪魔するね」

「わかりました。……あの、伊井野、さん？」

「ナイスファイトでした。一生懸命頑張った結果なんだから、気にすることないですよ」

その声かけに対し、ミコはこばちから体を離す。

恋太郎とミコの、目と目が合わさった。

ビビン!!

そしてミコは、脳内に吹き荒れる嵐を自覚した！

(えつ? 何? この感覚……!)

その感覚は、彼女の人生に初めて訪れたものだった。

強いて言えば近いのは、つい最近まで、石上に對して抱いていた甘い感情。違つたのは、つらく切ないそれとは違う、標的に向かうまつすぐな欲望の量！

まるで、俗に言う『一目惚れ』――

そんな単語が頭をよぎつた瞬間であつた。

「あ、ミコちゃん。紹介するわ。昨日からつきあい始めた、私の彼氏。愛城恋太郎くん」
その言葉を聞いたミコの心中たるや、まるで吹き荒ぶタイフーンの如く。
(もしかして……私、また、このパートナー^{横恋慕}なの――!?)

絶望とともに、自らの運命を呪うミコであつた。

【幕間2】作者は帳尻を合わせたい

「ねえ、つばめ先輩」

「なあに？ 優くん」

「僕たち付き合い始めてから何ヶ月目か…覚えてますか？」

「あつははー、そんなのトーゼンのゼントージャン！あまりに簡単な質問にゼットンもびっくりだよ！」

「つばめ先輩の口から『ゼットン』なんて単語が出てくることに読者はびっくりしそうですが」

「何言つてんの、この前シン・ウルトラマン見たからじゃん！」

「『僕は』わかつてますよもちろん」

優しく口角を上げながら、愛しい人の返答を待つ石上。

「24ヶ月と20日」

「えつ」

「24・67ヶ月」

「やだなあ、2年前なんて」

「優くん」

「…わかっていますよ。言いたいこと」

「どーーーしてこここの作者は私たちをこんなに放置したのかな!?かな!?」

「すいませんネタ切れです！あと大病で死にかけてました!!」

「『私は』わかってるよ、優くん♡」

『なんせ7行前からここまで書くまでにまた年単位で開いてますからね』

「ほんと大変だつたねえー」

「で、どうするの？これから」

エロ解禁祭 100 カノから何人登場させるかは不明。 プロットはないのでまた失踪の

可能性あり

「優くん……」

「つばめ先輩」

というわけで、本作は第19話よりR-18に場所を移します！投稿時期は未定！伊井野ミコ編に乞うご期待！

優&つばめ「期待しててねえええええええええええええ!!みんな大好きいいいいああああん好きいいいいいいい♡♡♡ああああああああああああいいいいいいいらめえええええええいよおおおおおおおおおおああああああああああああ好き好き愛してる

なんでもしてええええええええ!!

「ラストスパート!!」

「愛してるよ、つばめ」

私毛

「私たちこんな雑に消費されちゃつたね」

「いいんじやないすか？作者も限界みたいだし」

「そ
う
だ
ね。
それ
じ
や
あ
」

一緒にいこつか」

まだ見ぬ未来へ